

日向市所在
しお み じょう あと
塩 見 城 跡

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4

2012

宮崎県埋蔵文化財センター



塩見城跡から日向灘を臨む

塩見城跡は、日向灘に向けて扇形に開く沖積平野の起点に位置する（写真左隅）。塩見川は、塩見城と対岸の比良山との間を貫流している。この塩見川の河畔（弧状に残る道路部分）まで南側曲輪群は迫っていた。

巻頭図版 2



塙見城跡とその周辺（塙見川から臨む）

写真中央の山塊部分が塙見城跡。三方を沖積地と河川に囲まれ、険しい山地を後背とする。



南側曲輪群から西側曲輪群を臨む

写真中央付近の伐採箇所が西側曲輪群。写真右側の東屋の位置する箇所が主郭部である。（写真奥は戸高山）



曲輪 A 群と比良山（曲輪 B 群から臨む）

塙見城跡の特徴の一つは、主郭部から延びる痩せ尾根上に階段状に開削して幾重にも曲輪を配置させる構造である。西側曲輪群の一角を占める曲輪 A 群は、四万十層群の固い岩盤を削って造成されるが、その土木作業の困難さは想像し難い。最も広い平坦面（曲輪 A3）は市道面よりビル 5 層建ての高さ (15m) の位置にある。（写真奥は南側曲輪群と比良山）



城の守り（堀切 A3）

塙見城跡の発掘調査では堀切や横堀、堅堀など様々な形態の堀が認められた。この一つの堀切 A3 は、曲輪面の一角を大きく切断して防御性を高めた薬研堀である。堀の深さは 2.5m を越え、よじ登ることもできない。写真奥に見える逆三角形のシルエットは、堀切の精美なつくりを映し出している。



井戸と曲輪（井戸跡と石積造構）

曲輪 A・B 群の間にある谷地形部分（水の手曲輪）では、石積造構や土塁・堀で区切られた空間内に井戸跡や掘立柱建物跡が展開していた。写真右奥隅に位置するのは 1 号井戸跡、写真手前が 1 号石積造構である。中世山城において「水」の確保は必要不可欠であり、この「水」を守るために石積造構の堅牢性が求められたのであろう。



道路状遺構 (SG1) と掘立柱建物群 (比良山を望む)



道路状遺構 (SG2) と曲輪群 (曲輪 D 群を望む)



龍首水注 (342)



漆器椀 (936)



土製聖人像 (808)



漆器椀 (937)

塩見城跡出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成17年度から実施してまいりました。本書には平成17年度から21年度に実施した塩見城跡の発掘調査成果を記載しております。

塩見城跡は日向市街地に程近い、塩見川の北岸に広がる丘陵に位置する14～17世紀にかけて営まれた中世の山城です。「曲輪」や「堀切」、谷をふさぐ「石積遺構」などを効果的に配置して防御性を高めて主郭部分を守る構造がわかりました。

さらに、広い面積をもつ曲輪群と中央を貫く道路状遺構も確認できました。この曲輪群には、おびただしい数の柱穴があり、多くの掘立柱建物跡が存在しました。日常生活に使う陶磁器や土器類も数多く出土しています。

このように、塩見城跡は、塩見川を介した海と山を結ぶ情報や流通の交差点であり、当時の日向・延岡地域の支配権をめぐる前線基地でもあったということから、戦いのための城や周辺地域の拠点という性格だけでなく、有力者層の居住地にもなっていたと考えられます。

上記のように、今回の調査で得られた多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で有益な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 森 隆茂

例 言・凡 例

- 1 本書は、東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う日向市に所在する塩見（しおみ）城跡・中山遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成17～21年度に実施した。
- 3 本遺跡は、「東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書」2（宮崎県教育委員会編1995年）に基づき、「中山遺跡」と「塩見城跡」と別個に調査を進めた。しかし、両遺跡の調査の結果から中山遺跡は本来的に塩見城域内として包含されると判断されたので、「中山遺跡」調査分を「塩見城跡」の調査報告の一部とした。この中山遺跡の調査成果は、本書の第IV章に掲載している。なお、両遺跡に関わる文書・記録類等は、全て調査時のままである。
- 4 中山遺跡・塩見城跡については、既に以下の文献で一部報告されているが、記載内容については本書が優先する。
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター 2006『東九州自動車道（門川～日向間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書1』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第132集
 - ・南九州城郭談話会 2009『県学会・研究会資料集』
- 5 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - ・基準点・グリッド杭等の設営
中山遺跡・（株）新産測量設計コンサルタント 塩見城跡・（株）ケイディエム
 - ・空中写真撮影
中山遺跡・塩見城跡・（株）九州航空 塩見城跡・（有）スカイサーべイ九州
 - ・遺構実測
中山遺跡・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム「人骨出土状況」 塩見城跡・（株）朝日航洋「1号石積遺構」
- 6 現地での遺構図作成・写真撮影については、調査担当者がそれぞれ行なった。なお、遺構面検出時の地形は新測地系の国土地標に基づく電子平板とトータルステーションによる測量である。遺構平面図も同様な記録方法を探った。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 8 遺物の実測作業、遺構と遺物のデジタル製図作業は田中敏雄、渡ノ上隆介、田中達也、小船井順、児玉幹、川俣啓子が行い、整理作業員の補助を得た。出土土器、特に陶器類の分類については県文化財課振田孝博氏の協力を得た。遺物写真撮影は田中（敏）により行い、今塙屋毅行がこれを補助した。
- 9 自然科学分析は以下のとおり業務委託した。
 - ・鍛冶関連遺物における金属分析
中山遺跡・九州テクノリサーチ・TACセンター
 - ・人骨の取り上げと鑑定
中山遺跡・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
 - ・放射性炭素年代測定
中山遺跡・（株）パレオ・ラボ 塩見城跡・（株）古環境研究所
 - ・木製品の樹種同定・漆膜構造分析
塩見城跡・（株）吉田生物研究所
- 10 本製品の保存処理は、（株）吉田生物研究所にて業務委託した。
- 11 金銅製品の保存処理は、おもに船田史子および児玉が行った。中山遺跡出土の金銅製品については（株）吉田生物研究所にて業務委託した。
- 12 本文の執筆は分担して行い、第VII章以外は、その文責名を各文末に示した。なお、複数の場合は五十音順に示した。
- 13 本書の第VII章第2節「塩見城の歴史的位置」については、県文化財課埋蔵文化財係副主幹若山浩章氏（当時）に御寄稿いただいた。
- 14 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書の編集は主に田中（敏）が行った。なお、遺構一覧表及び遺構出土遺物一覧表は川俣が作成した。
- 15 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 16 本書で使用した周辺遺跡位置図等は国土地理院発行の1/50,000図をもとに、周辺地形図等は西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所から提供された1/2,500図等をもとに作成した。
- 17 本書に使用した主な略記号は次の通りである。

S A = 突穴建物跡	S B = 据立柱建物跡	S C = 土坑	S D = 土坑墓	S E = 構造遺構	
S F = 片戸跡	S G = 道路状遺構	S I = 集石遺構	S R = 構造	S S = 石積遺構	S X = 不明遺構
- 18 本書で使用した標高は海拔高である。方位は座標北（G.N.）を用い、図中では「N」で示した。
- 19 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帳』に掲載記述した。
- 20 本書に記載する層の略称は「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI」（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）第I章第3節の記載に準じる。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに		第V章	近世の遺構	169
第1節	調査に至る経緯	1	1	曲輪Gの近世墓	
1	調査に至る経緯		2	曲輪Kの近世墓	
2	塙見城跡・中山遺跡における既往の調査歴		3	曲輪Mの遺構	
第2節	調査の組織	1	4	近世墓の時期について	
第3節	地理的環境	2	第VI章	遺物	
1	遺跡周辺の地形と地質		1	陶器	173
第4節	歴史的環境	4	1	中世貿易陶磁	
1	塙見城築城以前（原始・古代）		2	中世国産陶磁	
2	塙見城築城以後（中世・近世）		3	中・近世陶磁器	
3	塙見城跡周辺の寺社と石塔群		第2節	土器類	204
第II章	発掘調査・整理作業の方法と経過		1	中世土器	
第1節	発掘調査の方法と経過	7	2	古代以前の土器	
1	調査の方法と経過		第3節	瓦（中近世）	210
2	遺構等の記録について		1	中世瓦	
第2節	整理作業の方法と経過	8	2	近世瓦	
1	調査報告にあたって		第4節	土製品	211
2	遺構の認識と名称について		1	土鍤	
3	遺構実測図の掲載について		2	陶製硯	
4	遺物の図化・掲載について		3	土製塑人像	
5	遺物の整理		第5節	金属製品（中近世）	222
6	報告書原稿の作成		1	金属製品	
第3節	教育普及活動		2	鉄製品	
第III章	西側曲輪群の調査		第6節	鍛冶関連遺物	227
第1節	調査の概要	10	1	羽口・炉壁	
第2節	曲輪A群	12	2	鍛冶津	
第3節	曲輪B群	29	第7節	木製品	227
第4節	曲輪C群	40	1	生活用品	
第5節	堀群	43	2	建築部材	
第6節	水の手曲輪	47	第8節	石器・石製品・石塔	235
第7節	西側谷部	87	1	石器	
第IV章	南側曲輪群（中山遺跡）の調査		2	石製品	
第1節	調査の概要	95	3	石塔	
第2節	曲輪D群	96	第VII章	自然科学分析の結果	
第3節	曲輪E群	103	第1節	はじめに	271
第4節	曲輪F群	109	第2節	放射性炭素年代測定	271
第5節	曲輪G	122	第3節	樹種同定	275
第6節	曲輪H群	125	第4節	漆製品の塗膜構造	278
第7節	曲輪I・J・K群	134	第5節	金属分析	280
1	曲輪I		第VIII章	総括	
2	曲輪J群		第1節	塙見城の縄張り	297
3	曲輪K		第2節	塙見城の歴史的位置（若山浩章）	301
第8節	曲輪L・M	145	第3節	遺物と遺構の検討	308
1	曲輪L		第4節	結び	321
2	曲輪M		附編		
第9節	道路状遺構（SG）	149	池ノ下遺跡の調査とその成果	323	
1	南側曲輪群を縱横断する遺構群		補記		
2	概要		コスト縮減に伴う未調査部分について（塙見城跡・板平遺跡）	325	
3	道路状遺構1（SG1）				
4	道路状遺構2（SG2）				
5	道路状遺構3（SG3）				

挿図目次

第 1 図	遺跡分布図	3	第 66 図	曲輪 D 群 土層断面図 (1)	100
第 2 図	塩見城跡周辺の城館分布図	6	第 67 図	曲輪 D 群 土層断面図 (2)	101
第 3 図	塩見城跡周辺地形と高速道路用地の位置	10	第 68 図	曲輪 D-SC1 堀切 D1 実測図	102
第 4 図	塩見城跡内調査区と曲輪の関係	11	第 69 図	曲輪 E 群 道構配置図	105
第 5 図	塩見城跡全体道構配置図	13	第 70 図	曲輪 E 群 土層断面図 (1)	106
第 6 図	西側曲輪群道構配置図	15	第 71 図	曲輪 E 群 土層断面図 (2)	107
第 7 図	曲輪 A 群道構配置図	18	第 72 図	掘立柱建物跡実測図 (1)	108
第 8 図	曲輪 A1・A2 道構配置図	19	第 73 図	曲輪 F 群 道構配置図	111
第 9 図	曲輪 A1・A2 土層断面図	19	第 74 図	曲輪 F3 実測図	112
第 10 図	曲輪 A3 道構配置図	22	第 75 図	曲輪 F 集石構築実測図	113
第 11 図	曲輪 A3 土層断面図 (1)	22	第 76 図	掘立柱建物跡実測図 (2)	114
第 12 図	曲輪 A3 土層断面図 (2)	23	第 77 図	掘立柱建物跡実測図 (3)	115
第 13 図	帶曲輪 A3b 道構配置図	23	第 78 図	掘立柱建物跡実測図 (4)	116
第 14 図	帶曲輪 A3b 土層断面図	23	第 79 図	掘立柱建物跡実測図 (5)	117
第 15 図	帶曲輪 A4 道構配置図	24	第 80 図	掘立柱建物跡実測図 (6)	118
第 16 図	帶曲輪 A4 土層断面図	24	第 81 図	掘立柱建物跡実測図 (7)	119
第 17 図	团塊（ノジュール）曲輪別出土個数比	25	第 82 図	掘立柱建物跡実測図 (8)	120
第 18 図	团塊重量比	25	第 83 図	掘立柱建物跡実測図 (9)	121
第 19 図	掘立柱建物跡実測図 (1)	26	第 84 図	曲輪 G 道構配置図・土層断面図	122
第 20 図	掘立柱建物跡実測図 (2)	27	第 85 図	曲輪 G 通路状道構実測図	123
第 21 図	掘立柱建物跡実測図 (3)	28	第 86 図	掘立柱建物跡実測図 (10)	124
第 22 図	曲輪 B 群 道構配置図	31	第 87 図	曲輪 H 道構配置図	126
第 23 図	曲輪 B 群 土層断面図	33	第 88 図	曲輪 H 西側斜面部道構配置図	127
第 24 図	曲輪 B1～B3 道構配置図	35	第 89 図	曲輪 H 通路状道構 1 実測図	129
第 25 図	曲輪 B3 道構配置図	36	第 90 図	曲輪 H SC1 実測図	129
第 26 図	曲輪 B4 道構配置図	36	第 91 図	掘立柱建物跡実測図 (11)	130
第 27 図	掘立柱建物跡実測図 (4)	37	第 92 図	掘立柱建物跡実測図 (12)	131
第 28 図	掘立柱建物跡実測図 (5)	38	第 93 図	掘立柱建物跡実測図 (13)	132
第 29 図	掘立柱建物跡実測図 (6)	39	第 94 図	掘立柱建物跡実測図 (14)	133
第 30 図	曲輪 C 群 道構分布図	41	第 95 図	曲輪 I・J・K 群 道構配置図	136
第 31 図	曲輪 C 群 土層断面図 (1)	41	第 96 図	掘立柱建物跡実測図 (15)	137
第 32 図	曲輪 C 群 土層断面図 (2)	42	第 97 図	掘立柱建物跡実測図 (16)	138
第 33 図	堀群 分布図	44	第 98 図	掘立柱建物跡実測図 (17)	139
第 34 図	堀群 土層断面図 (1)	45	第 99 図	掘立柱建物跡実測図 (18)	140
第 35 図	堀群 土層断面図 (2)	46	第 100 図	掘立柱建物跡実測図 (19)	141
第 36 図	各道構面の層位の関係	47	第 101 図	曲輪 J 群 道構実測図	141
第 37 図	水の手曲輪 第 1～IV 期面の道構配置図	49	第 102 図	曲輪 J 群 通路 2-3 SC1 実測図	142
第 38 図	水の手曲輪 露天状道構 (B 期) 平面図	50	第 103 図	曲輪 K 道構配置図・土層断面図	144
第 39 図	水の手曲輪 露天状道構土層断面図	51	第 104 国	曲輪 K SC1 SD3 実測図	144
第 40 国	水の手曲輪 SS1 実測図	52	第 105 国	曲輪 L・M 道構配置図	146
第 41 国	水の手曲輪 SF1 (a 期)・SE3, SF1 (b 期)・SE2 実測図	57	第 106 国	曲輪 M SA1-2 SC1 実測図	147
第 42 国	水の手曲輪 道構配置図 (第 V 期面)	61	第 107 国	曲輪 M SC1 実測図	147
第 43 国	水の手曲輪 土層断面図 (1)	62	第 108 国	掘立柱建物跡実測図 (20)	148
第 44 国	水の手曲輪 土層断面図 (2)	63	第 109 国	道路状道構 I (SG1) 道構配置図	150
第 45 国	水の手曲輪 SF1 (c 期) 実測図 (1)	65	第 110 国	道路状道構 I (SG1-1 区) 土層断面図 (1)	151
第 46 国	水の手曲輪 SF1 (c 期) 実測図 (2)	67	第 111 国	道路状道構 I (SG1-2 区) 実測図	153
第 47 国	水の手曲輪 SS1 (i 期) 実測図 (1)	70	第 112 国	滝橋状道構 2-3 実測図	155
第 48 国	水の手曲輪 SS1 (i 期) 実測図 (2)	71	第 113 国	道路状道構 I (SG1) 石積道構と SB1	156
第 49 国	水の手曲輪 SS1 内部の構造	72	第 114 国	道路状道構 I (SG1) 石敷道構 実測図	157
第 50 国	水の手曲輪 SS1 内部の石積み壁体実測図	73	第 115 国	道路状道構 2 (SG2) 平面図・断面図	159
第 51 国	水の手曲輪 SS1 (ii 期) 実測図	75	第 116 国	道路状道構 3 (SG3) 平面図・土層断面図	161
第 52 国	水の手曲輪 SS1 壁見通し図・土層断面図 (1)	77	第 117 国	近世墓の配置図 (曲輪 G・曲輪 K)	170
第 53 国	水の手曲輪 SS1 壁見通し図・土層断面図 (2)	79	第 118 国	曲輪 G 近世墓 (SD1-3) 実測図	170
第 54 国	水の手曲輪 SF1 (e 期)・SE1 実測図	80	第 119 国	曲輪 K 近世墓 (SD5) 実測図	171
第 55 国	水の手曲輪 SE1 C 区 (暗渠部) 及び D 区 A-B 立・断面実測図	81	第 120 国	白磁実測図 (1)	178
第 56 国	水の手曲輪 SE1 D 区 (開渠部) 実測図	82	第 121 国	白磁実測図 (2)	179
第 57 国	水の手曲輪 SE1 D 区 断面図	83	第 122 国	白磁実測図 (3)・青磁実測図 (1)	180
第 58 国	掘立柱建物跡実測図 (1)	85	第 123 国	青磁実測図 (2)	181
第 59 国	掘立柱建物跡実測図 (2)	86	第 124 国	青磁実測図 (3)	182
第 60 国	水の手曲輪 切岸土層断面図	86	第 125 国	青磁実測図 (4)	183
第 61 国	西側谷部 道構配置図	88	第 126 国	青磁実測図 (5)	184
第 62 国	西側谷部 土層断面図	89	第 127 国	青磁実測図 (6)・青花実測図 (1)	185
第 63 国	南側曲輪群 調査区区分模式図	95	第 128 国	青花実測図 (2)	186
第 64 国	南側曲輪群 道構配置図	97	第 129 国	青花実測図 (3)	187
第 65 国	曲輪 D 群 道構配置図	99	第 130 国	青花実測図 (4)	188
		99	第 131 国	青花実測図 (5)	189

表目次

第 132 図	褐釉陶器実測図(1)	190	第 1 表	塙見城跡基本土層図	7
第 133 図	褐釉陶器実測図(2)	191	第 2 表	中山遺跡における調査区の対照表	9
第 134 図	褐釉陶器実測図(3)・その他の貿易陶磁	192	第 3 表	西側曲輪群 曲輪(平坦面)面積	90
第 135 図	備前焼実測図(1)	196	第 4 表	1-2 西側曲輪群掘立柱建物跡一覧表	90
第 136 図	備前焼実測図(2)	197	第 5 表	西側曲輪群櫛列一覧表	91
第 137 図	備前焼実測図(3)	198	第 6 表	勾跡計測表	91
第 138 図	備前焼実測図(4)	199	第 7 表	1-6 西側曲輪群遺構出土遺物一覧表	92
第 139 図	備前焼実測図(5)	200	第 8 表	調査区対照表	95
第 140 図	備前焼実測図(6)	201	第 9 表	南側曲輪群 曲輪(平坦面)面積	162
第 141 図	瀬戸・美濃燒実測図・常滑焼実測図	202	第 10 表	1-2 南側曲輪群掘立柱建物跡一覧表	162
第 142 図	近世陶磁器実測図(1)	205	第 11 表	南側曲輪群櫛列一覧表	164
第 143 図	近世陶磁器実測図(2)	206	第 12 表	土坑墓調査表	164
第 144 図	近世陶磁器実測図(3)	207	第 13 表	竪穴建物跡計測表	164
第 145 図	中世土器実測図(1)	213	第 14 表	集石遺構計測表	164
第 146 図	中世土器実測図(2)	214	第 15 表	土坑墓計測表	164
第 147 図	中世土器実測図(3)	215	第 16 表	1-8 南側曲輪群遺構出土遺物一覧表	165
第 148 図	中世土器実測図(4)	216	第 17 表	近世墓一覧表	171
第 149 図	中世土器実測図(5)	217	第 18 表	近世墓時期と出土残貨の組合せ	171
第 150 図	土器実測図・瓦実測図(1)	218	第 19 表	曲輪名対照表	250
第 151 図	瓦実測図(2)	219	第 20 表	白磁觀察表	251
第 152 図	瓦実測図(3)	220	第 21 表	1-2 青磁觀察表	252
第 153 図	土鍾・土製品実測図	221	第 22 表	1-2 青花觀察表	253
第 154 図	古窯実測図	223	第 23 表	埴輪・無軸陶器觀察表	255
第 155 図	銅・鉄製品実測図(1)	224	第 24 表	その他貿易陶磁器觀察表	255
第 156 図	銅・鉄製品実測図(2)・鉄滓実測図(1)	225	第 25 表	1-2 國産陶器(備前)根拠表	256
第 157 図	鉄滓実測図(2)	226	第 26 表	國産陶器(瀬戸・美濃)觀察表	257
第 158 図	木製品実測図(1)	229	第 27 表	國産陶器(常滑)觀察表	258
第 159 図	木製品実測図(2)	230	第 28 表	近世磁器觀察表	258
第 160 図	木製品実測図(3)	231	第 29 表	1-2 近世陶器觀察表	258
第 161 図	木製品実測図(4)	232	第 30 表	1-2 土師器觀察表	259
第 162 図	木製品実測図(5)	233	第 31 表	1-2 土師質・瓦質・土器觀察表	260
第 163 図	木製品実測図(6)	234	第 32 表	甕・洗・生土器・須恵器觀察表	261
第 164 図	石器実測図	238	第 33 表	瓦觀察表	261
第 165 国	石製品実測図(1)	239	第 34 表	土鍾觀察表	262
第 166 国	石製品実測図(2)	240	第 35 表	硯觀察表	262
第 167 国	石製品実測図(3)	241	第 36 表	土製聖人像觀察表	262
第 168 国	石製品実測図(4)	242	第 37 表	1-2 古錢觀察表	262
第 169 国	石製品実測図(5)	243	第 38 表	銅製品觀察表	263
第 170 国	石製品実測図(6)・石塔実測図(1)	244	第 39 表	1-2 鉄製品觀察表	263
第 171 国	石塔実測図(2)	245	第 40 表	鍛冶関連遺物觀察表	264
第 172 国	石塔実測図(3)	246	第 41 表	1-2 鍛冶関連遺物觀察表(未掲載分)	264
第 173 国	石塔実測図(4)	247	第 42 表	樹種分類表	265
第 174 国	石塔実測図(5)	248	第 43 表	木製品(生活用品)觀察表	265
第 175 国	石塔実測図(6)	249	第 44 表	木製品(木杭・柱材等)觀察表	266
第 176 国	西側曲輪群暦年較正結果	273	第 45 表	1-2 木杭觀察表(未掲載分)	266
第 177 国	西側曲輪群断面較正結果	274	第 46 表	石器觀察表	267
第 178 国	樹種同定試料の断面写真(1)	276	第 47 表	1-2 石製品觀察表	268
第 179 国	樹種同定試料の断面写真(2)	277	第 48 表	宝鏡印塔計測表	269
第 180 国	樹種同定試料の断面写真(3)	278	第 49 表	空風輪計測表	269
第 181 国	水の手曲輪出土漆製品の塗膜構造調査結果	279	第 50 表	火輪計測表	269
第 182 国	鐵塊系遺物の断面金属組織観察結果	288	第 51 表	地輪計測表	269
第 183 国	金属分析試料の顕微鏡組織写真(1)	289	第 52 表	1-2 地輪計測表	269
第 184 国	金属分析試料の顕微鏡組織写真(2)	290	第 53 表	板磚計測表	270
第 185 国	金属分析試料の顕微鏡組織写真(3)	291	第 54 表	土壤蓄積計測表	270
第 186 国	金属分析試料のマクロ組織写真(1)	291	第 55 表	火輪計測表(未掲載分)	270
第 187 国	金属分析試料のマクロ組織写真(2)	292	第 56 表	地輪計測表(未掲載分)	270
第 188 国	金属分析試料の EPMA 調査写真(1)	292	第 57 表	板磚計測表(未掲載分)	270
第 189 国	金属分析試料の EPMA 調査写真(2)	293	第 58 表	西側曲輪群における放射性炭素年代測定結果	272
第 190 国	塙見城跡塙張り断面図	298	第 59 表	南側曲輪群における放射性炭素年代測定結果	273
第 191 国	塙見城跡塙張り全体図(2011年現在)	299	第 60 表	木製品樹種同定表	275
第 192 国	御世寺出土の土製品	310	第 61 表	漆製品塗膜断面観察結果	280
第 193 国	西側曲輪群における遺構の変遷 (曲輪 A3・曲輪 B 群・水の手曲輪)	312	第 62 表	南側曲輪群出土鐵治関連遺物の計測値と調査項目	288
第 194 国	南側曲輪群における遺構の変遷	315	第 63 表	試料の化学組成	288
第 195 国	池下ノ下道跡 全体図	317	第 64 表	分析の結果一覧表	288
第 196 国	調査区 A 平面図	324	第 65 表	出土人骨一覧	296
第 197 国	角錐状石器 実測図	324	第 66 表	人骨分析における年齢区分	296
第 198 国	塙見城跡未調査箇所	324	第 67 表	埋葬姿勢の様式	296
第 199 国	板平道跡 未調査箇所	325	第 68 表	陶器類からみた曲輪の消長	314
		326	第 69 表	遺構の変遷と画期	314

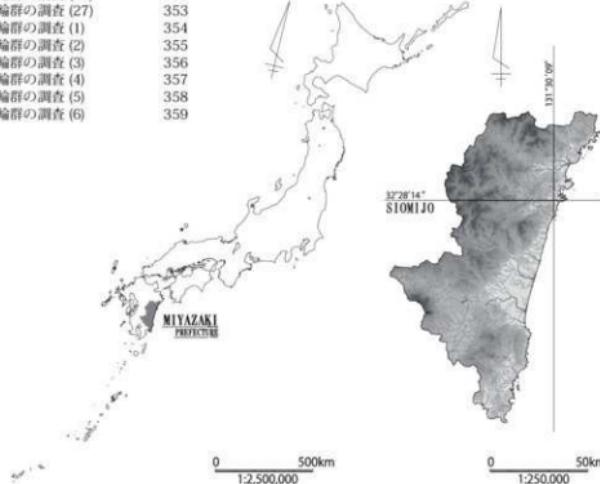
図版目次

【巻頭】

- 卷頭図版 1 塩見城跡から日向灘を臨む
卷頭図版 2 塩見城跡とその周辺
卷頭図版 3 南側曲輪群から西側曲輪群を臨む
卷頭図版 4 城の守り
卷頭図版 5 井戸と曲輪
卷頭図版 6 道路状遺構 (SG1) と掘立柱建物群
卷頭図版 7 道路状遺構 (SG2) と曲輪群
塩見城出土遺物

【巻末】

- | | | | |
|-----------------------|-----|-----------------------|-----|
| 写真図版 1 西側曲輪群の調査 (1) | 327 | 写真図版 34 南側曲輪群の調査 (7) | 360 |
| 写真図版 2 西側曲輪群の調査 (2) | 328 | 写真図版 35 南側曲輪群の調査 (8) | 361 |
| 写真図版 3 西側曲輪群の調査 (3) | 329 | 写真図版 36 南側曲輪群の調査 (9) | 362 |
| 写真図版 4 西側曲輪群の調査 (4) | 330 | 写真図版 37 南側曲輪群の調査 (10) | 363 |
| 写真図版 5 西側曲輪群の調査 (5) | 331 | 写真図版 38 南側曲輪群の調査 (11) | 364 |
| 写真図版 6 西側曲輪群の調査 (6) | 332 | 白磁 (1) | 365 |
| 写真図版 7 西側曲輪群の調査 (7) | 333 | 白磁 (2) | 366 |
| 写真図版 8 西側曲輪群の調査 (8) | 334 | 白磁 (3) | 367 |
| 写真図版 9 西側曲輪群の調査 (9) | 335 | 青磁 (1) | 368 |
| 写真図版 10 西側曲輪群の調査 (10) | 336 | 青磁 (2) | 369 |
| 写真図版 11 西側曲輪群の調査 (11) | 337 | 青磁 (3) | 370 |
| 写真図版 12 西側曲輪群の調査 (12) | 338 | 青磁 (4) | 371 |
| 写真図版 13 西側曲輪群の調査 (13) | 339 | 青磁 (5) | 372 |
| 写真図版 14 西側曲輪群の調査 (14) | 340 | 青磁 (6)・褐釉陶器 (1) | 373 |
| 写真図版 15 西側曲輪群の調査 (15) | 341 | 褐釉陶器 (2)・その他 | 374 |
| 写真図版 16 西側曲輪群の調査 (16) | 342 | 備前焼 楠鉢 (1) | 375 |
| 写真図版 17 西側曲輪群の調査 (17) | 343 | 備前焼 楠鉢 (2) | 376 |
| 写真図版 18 西側曲輪群の調査 (18) | 344 | 備前 瓦・壺 (1) | 377 |
| 写真図版 19 西側曲輪群の調査 (19) | 345 | 瓦・壺 (2) | 378 |
| 写真図版 20 西側曲輪群の調査 (20) | 346 | 土器・瓦 (1) | 384 |
| 写真図版 21 西側曲輪群の調査 (21) | 347 | 瓦 (2) | 385 |
| 写真図版 22 西側曲輪群の調査 (22) | 348 | 土器・瓦製品 (1) | 386 |
| 写真図版 23 西側曲輪群の調査 (23) | 349 | 土器・瓦製品 (2) | 387 |
| 写真図版 24 西側曲輪群の調査 (24) | 350 | 銅製品・古錢 | 388 |
| 写真図版 25 西側曲輪群の調査 (25) | 351 | 銅製品・鉄製品 (1) | 389 |
| 写真図版 26 西側曲輪群の調査 (26) | 352 | 木製品 (2) | 390 |
| 写真図版 27 西側曲輪群の調査 (27) | 353 | 木製品 (3) | 391 |
| 写真図版 28 南側曲輪群の調査 (1) | 354 | 石器・石製品 (1) | 392 |
| 写真図版 29 南側曲輪群の調査 (2) | 355 | 石器・石製品 (2)・貝製品 | 393 |
| 写真図版 30 南側曲輪群の調査 (3) | 356 | 五輪塔 (形態と加工痕跡)・動植物遺体 | 394 |
| 写真図版 31 南側曲輪群の調査 (4) | 357 | | |
| 写真図版 32 南側曲輪群の調査 (5) | 358 | | |
| 写真図版 33 南側曲輪群の調査 (6) | 359 | | |



第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とする総延長約436kmの高速自動車国道で、九州島の東岸部4県（福岡・大分・宮崎・鹿児島）を南北に縦断する。宮崎県においては、平成元年に延岡～清武間が基本計画区間に決定された。

このうち、西都～清武間に所在する遺跡の記録保存措置は平成13年度に、県境～北川間及び都農～西都間にについては同21年度に全て完了している。

中山遺跡・塩見城跡の所在する門川～日向間（約14km）については、日本道路公团（現西日本高速道路株式会社）の遺跡分布調査依頼を受けて、宮崎県教育委員会は平成16年に7遺跡174,000m²の埋蔵文化財包含地の所在を回答した。

これを受け、同年11月には門川～日向間を担当する同公团延岡工事事務所との工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

さらに、平成17年に「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公團と県文化財課との間でなされた。

この結果、発掘調査の対象面積が当初の174,000m²から91,400m²に縮減された。中山遺跡は14,800m²、塩見城跡は12,500m²が調査対象となる。

しかし、更なるコスト縮減が図られた道路建設の詳細設計に基づく協議（平成19年5月）により、中山遺跡においては、遺跡主要部分の850m²が当面の調査対象から外れることになり、調査対象面積は13,950m²に変更となった。

塩見城跡でも詳細設計による協議等や高速道路に付随する工事用道路建設に伴う記録保存措置を新たに要請される等により調査対象面積の増減を繰り返したが、最終的には11,300m²となった。

上記の経緯をへて、平成17年度にトレンチを主体とした調査が両遺跡で開始され、中山遺跡では平成18年度に、塩見城跡は平成19年度より面的な調査を実施するに至った。この中山遺跡については、その遺跡の立地や性格から、塩見城内の曲輪群の一部と認識されるに至った。

(著付)

2 塩見城跡・中山遺跡における既往の調査歴 今回の発掘調査以前の調査概要について述べる。

塩見城跡の主郭部分については平成13年度に、主郭部の公園整備に伴い日向市教育委員会によってトレンチ調査が実施された。素掘り・礫群・礎石の掘立柱建物跡と16世紀後半の火災を受けた痕跡が検出された。

出土遺物は13世紀から16世紀代の陶磁器を主体とする青花、青磁、白磁等の貿易陶磁、備前焼等の国産陶器などである。

また、塩見城跡の南側に位置する中山遺跡については、宮崎県教育委員会によって平成14年に国道327号線の高速道路道路関連緊急整備事業に伴い発掘調査が実施された。調査区内の平坦面より近世墓が28基検出された。錫杖を副葬品とする墓穴も認められている。

さらに、国道327号線の改良工事に連動した市道付替え工事に伴う発掘調査が中山遺跡西側において、日向市教育委員会により実施された。この調査では五輪塔や板碑等が出土し、これら石塔群（18基）は塩見城跡主郭部の城山公園内に移設されている。

(今塙屋)

第2節 調査の組織

中山遺跡・塩見城跡の調査・整理報告の調査組織は、以下の通りである。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮園 淳一（平成17年度）

清野 勉（平成18・19年度）

福永 展幸（平成20・21年度）

森 隆茂（平成22・23年度）

副所長 加藤 悟郎（平成18～20年度）

北郷 泰道（平成22・23年度）

副所長兼総務課長 長友 英詞（平成20・21年度）

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫（平成17・18年度）

総務課長 宮越 尊（平成17～19年度）

矢野 雅紀（平成22年度）

坂上 恒俊（平成23年度）

主幹兼総務係長 石川 恵史（平成17年度）

高山 正信（平成18～21年度）

副主幹兼総務担当リーダー 長友由美子（平成22・23年度）

調査第一課長 高山 富雄（平成17・18年度）

長津 宗重（平成19～23年度）

主幹兼調査第二課長・担当リーダー 著付 和樹（平成17～23年度）

現地調査

中山遺跡（平成17～19年度）

主　査　田中 敏雄　　（平成18・19年度）
主　査　島木 良浩・白地 浩（平成19年度）
主任主事　嶋田 史子　　（平成19年度）
主　事　岡田 諭　　（平成17年度）
主　事　渕ノ上隆介　　（平成17・18年度）
主　事　小船井 順・児玉 幹・日高 優子
（平成19年度）

調査員　石津 晴菜　　（平成18年度）

塩見城跡（平成17・19～21年度）

主　査　島木 良浩　　（平成19年度）
主任主事　今塙屋毅行　（平成20年度）
主　事　渕ノ上隆介　（平成17・19～21年度）
主　事　小船井 順・田中 達也・堀口 恒史
（平成19・20年度）
主　事　児玉 幹　　（平成19～21年度）

整理作業・報告書作成

中山遺跡（南側曲輪群）

主　査　田中 敏雄　　（平成19～23年度）
主　査　明石 宏一　　（平成23年度）
主任主事　嶋田 史子　　（平成19・20年度）
柳田 晴子・今塙屋毅行（平成23年度）
主　事　児玉 幹・渕ノ上隆介
（平成19～21年度）
主　事　川俣 哲子　　（平成23年度）

塩見城跡（西側曲輪群）

主　査　田中 敏雄　　（平成22・23年度）
主　査　松田 博幸　　（平成22年度）
主任主事　今塙屋毅行・原口耕一郎
（平成23年度）
主　事　児玉 幹・渕ノ上隆介
（平成19～21年度）
主　事　小船井 順・川俣 哲子・田中 達也
山本 光俊　　（平成23年度）

特別調査員（所属は調査当時・五十音順）

千田嘉博（奈良大学文学部）・宮武正登（佐賀県教育庁）・森村健一（東洋陶磁学会、関西近世考古学研究会）

調査指導・協力等（五十音順）

大分県教育委員会・小田原市教育委員会・九州国立博物館・霧島市教育委員会・国立歴史民俗博物館・長崎純心大学・二十六聖人記念館・都城市教育委員会・日向市教育委員会・山口県教育委員会・山口市教育委員会

第3節 地理的環境

1 遺跡周辺の地形と地質

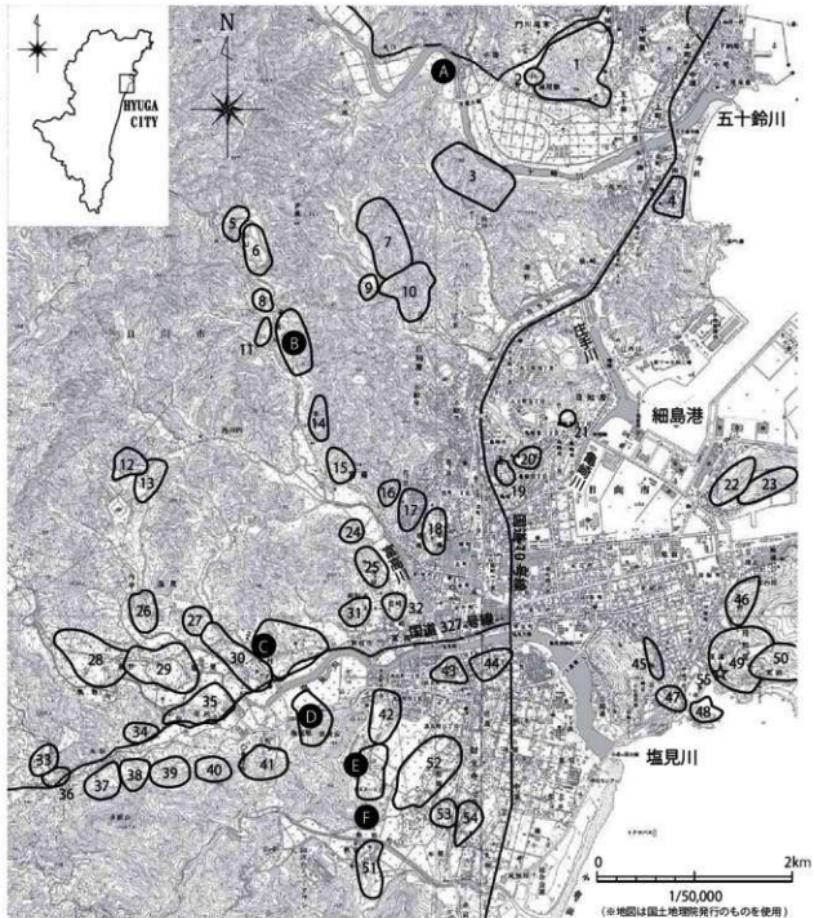
日向市の位置と地勢 中山遺跡・塩見城跡が所在する日向市は、九州島の東海岸に位置し、西に九州山地を控え、東は日向灘に面する地勢をなす。現在の中心市街地は、塩見川下流域の沖積低地に広がる。
遺跡周辺の地形 中山遺跡・塩見城跡は、宮崎県日向市大字塩見にある。この塩見地区は、東側は開けた地形となるが、三方を山に囲まれており、その南面を塩見川が東流している。両遺跡は塩見川中流域の左岸に広がる丘陵（標高約30～70m）部の南端に立地し、日向市街地から西へ約2kmの地点にある（第11図）。また、中山遺跡南端に広がる丘陵部は、かつて塩見川まで迫っていたという。その対岸は字名が「瀬ノ口」であり、これより上流は浅瀬であったと考えられる。

塩見川が形成する平野 塩見川の両岸には河岸段丘が形成され、富高川と合流後は沈水性の平野を発達させている。海岸沿いには、牧島山、米ノ山、櫛ノ山といった標高100～190mの低山塊が点在している。これらは、かつて島々であったが塩見川の埋積作用によって陸続きとなったものである。なお、耳川は市内で最も流域面積の広い河川で、九州山地の三方山を水源とし、山陰の冠岳の麓で大きく南に流路を変え、日向市南部の美々津で日向灘に注いでいる。

複雑な海岸線 日向市の地勢を特徴づけるもの一つである。耳川河口より南側は、宮崎平野部から続く直線的な砂洲海岸であるが、それより北はリアス式海岸による岩礁帯が卓越する。塩見川河口付近のみ小倉ヶ浜に代表される砂州海岸となる。この塩見川河口一带は、ハマグリの名産地で『日向地誌』に「蛤七千二百殻」の記事が読み取れる。

さらに河口の北側に位置する細島地区には、県内屈指の細島港が所在する。天然の良港であり、日本各地と東南アジアをつなぐ航路の経由地としての重要な港湾として期待されている。

日向市の地質 塩見川を境として北と南で大きく異なる特徴を有する。塩見川に接する永田一中村一新財市一岩崎一花ヶ丘一亀崎一梶木地区を結ぶ線から北側は、西南日本外帯に属する四十万層群の砂岩または頁岩で、それより南は尾鈴山火砕流堆積物である。耳川中流域では阿蘇4火砕流堆積物もある。



東九州自動車道（門川～日向間）関連遺跡（図中●）

- A. 分藏遺跡 B. 板平遺跡 C. 塩見城跡・中山遺跡 D. 権現原遺跡 E. 池ノ下遺跡 F. 大谷戻遺跡
- 1. 城山遺跡 2. 門川城跡 3. 新城跡 4. 門川南町遺跡 5. 山口遺跡 6. 黒原遺跡 7. 古屋敷遺跡 8. 北川内遺跡 9. 髪屋敷遺跡 10. 小庄手遺跡 11. 谷川遺跡 12. 黒象遺跡 13. 池田原遺跡 14. 和田遺跡 15. 宮ノ尾遺跡 16. 谷口遺跡 17. 西草場遺跡 18. 富高古墳群 19. 越シ遺跡 20. 後陣遺跡 21. 寺ノ上遺跡 22. 煙浦遺跡 23. 西ノ原遺跡 24. 横道遺跡 25. 古市ヶ原遺跡 26. 黒岩遺跡 27. 高平城跡 28. 奥野A遺跡 29. 奥野B遺跡 30. 中村遺跡 31. 烏の巣遺跡 32. 岩崎遺跡 33. 平原遺跡 34. 片白遺跡 35. 笹河遺跡 36. 仙洞庵遺跡 37. 上永田遺跡 38. 下永田遺跡 39. 甲附遺跡 40. 出兼遺跡 41. 清水遺跡 42. 比良遺跡 43. 山下遺跡 44. 長江遺跡 45. 竹ノ上遺跡 46. 平野遺跡 47. 野首遺跡 48. 日知屋城跡 49. 深溝遺跡 50. 荒浜遺跡 51. 秋留遺跡 52. 松原遺跡 53. 木原遺跡 54. 六反田遺跡 55. 伊勢ヶ浜古墳群

第1図 遺跡分布図

第4節 歴史的環境

1 塩見城築城以前（原始・古代）

塩見城築城以前の状況について塩見川流域（支流の富高川、奥野川流域を含む）を中心とした遺跡と遺物の概要を簡単にふれる（第1図）。

旧石器時代 塩見川左岸の河岸段丘上の奥野A遺跡（28）で始長Tn火山灰（AT）直下の層から流紋岩製の剥片が出土した。富高川左岸の河岸段丘上に立地する板平遺跡（B）でAT直下の層より流紋岩やホルンフェルス、珪質頁岩の剥片や石核が出土している。

寺ノ上遺跡（21）では、AT火山灰直上の暗褐色層中より、5基の石器ブロックと4基の礫群が確認されている。瀬戸内技術に類する横長剥片を用いたナイフ形石器や剥片尖頭器、スクレイパー等の製品とともに、剥片、石核、敲石等石器製作に関連する遺物が出土している。

縄文時代 後陣遺跡（20）では、縄文時代早期の集石遺構が62基が、近接する越シ遺跡（19）も集石遺構19基が検出されている。板平遺跡では集石遺構36基と炉穴55基が検出されている。

縄文時代前期から中期については今のところ表掲資料のみが知られており、断片的である。

縄文時代後期の遺跡は、板平遺跡例が挙げられる。太郎追式や三万田式系統の土器が出土しており、石組遺構や土坑群も認められる。

弥生時代 弥生時代前期～中期前半に位置付けられる下城式や亀ノ甲タイプの甕が板平遺跡で出土している。日向市南部、石並川に面した落窓遺跡2号建物跡からは鋤先口縁の須玖式系甕が出土しており中期に位置付けられる。また、越シ遺跡では弥生中期とされる祭祀遺構（土坑）が確認されている。

後期の遺構は、板平遺跡で後期後半段階の免田式土器甕に類似した土器が伴う竪穴建物跡がある。終末期では越シ遺跡の内部突出壁を有する竪穴建物跡2軒や後陣遺跡の竪穴建物跡が挙げられる。なお、終末期の周溝状遺構は、日向市南部の百町原遺跡例がある。

古墳時代 富高古墳群（18）と伊勢ヶ浜古墳群（55）と集落遺跡の調査例が知られている。

富高古墳群は富高川の左岸丘陵上に立地する。富高2号墳は全長83mを測る前方後円墳で、彷彿四神四獸鏡や鐵製武具等が副葬された中期前半の古墳である。鈴鏡塚古墳は八鈴鏡や鐵製武器や工具等が副葬される後期前半に属する古墳である。

塩見川河口付近の伊勢ヶ浜の北岸には、古墳時代終末期に営まれた伊勢ヶ浜古墳群がある。円礫等を積み上げた横穴式石室を内部主体とする。同7号墳からは鉄鉢が出土している。

集落遺跡の調査としては、板平遺跡が挙げられる。古墳時代前期～後期にかけての竪穴建物跡が26軒検出されている。特に、谷部包含層から出土した緑色凝灰岩製の車輪石の出土は出色な存在である。

古代 越シ遺跡では、平安時代前半の土器師壺を伴う集石とピットが多数検出されている。环は合口状で5組と単獨で1個が配置されており、何らかの祭祀による痕跡と考えられている。

なお、日向市美々津地区は『延喜式』記載の「美福駅」に比定されるという。
(今塙屋)

2 塩見城築城以後（中世・近世）

塩見城跡それ自体の歴史的意義は、本書の第Ⅷ章第2節にて詳述されている。ここでは塩見城を巡る時間的経過と当該期の遺跡調査例の概要を記す。

a) 塩見城をめぐる支配権

塩見城の築城（土持氏時代）「塩見」は鎌倉時代よりみえる地名で、塩見郷や塩見荘とも称されていた。その拠点たる塩見城跡は、南北朝期に土持氏により築城されたと伝えられるが、詳細は不明である。

この土持氏には、土持「七頭」と呼ばれる縣・財部・槐島・大塚・垂水・清水・時任の七党があり、日向市域はその中でも高鍋城を居城とする「財部土持」氏の支配下にあったとされる。財部土持氏は、長禄元年（1457）の小浪川の戦いにおいて伊東氏に敗北を喫し、以後没落して塩見城を含めた日向市域の城館は、伊東氏が領有するところとなった。

一方、土持氏宗家にあたる「縣土持」氏は現在の延岡市域を中心として天正6年（1578）に大友氏によって滅ぼされるまで権勢を誇り、中世末期まで伊東氏と対立関係にあったとされる。

「三城」の成立（伊東氏時代） 小浪川の戦いの後、日向市域は伊東氏の領有下となり、縣土持氏との境界ともなる。この地域は天然の良港として知られる細島港を抱える等、軍事・経済の拠点として重要性を増していく。塩見城をはじめとして、日向市日知屋字伊勢道の日知屋城（48）、門川町門川尾末字城屋敷の門川城（2）、東郷町山陰の山陰城（第2図25）等は、「伊東氏四十八城」に数えられ、特に塩

見城、日知屋城、門川城は「三城」と呼称され、伊東氏領国の中の北の要として重要視された。伊東氏の支配は約120年間にも及び、塩見城には右松氏、日知屋城には福永氏、門川城や山陰城には米良氏等の有力家臣が居城して地域の掌握に努めていた。

しかし、伊東氏は元亀3年(1572)の木崎原合戦や天正4年(1576)の高原城をめぐる攻防戦で島津軍に大敗を喫し、以後衰退の一途をたどる。島津氏の勢力は、はやくも天正5年(1577)には宮崎平野部に及び、伊東氏は本拠地の都於郡城を捨てて大友氏を頼って落ち延びるに至った。

豊後計略の拠点（島津氏時代） 伊東氏の豊後落ち以後、塩見城を含めた日向地域の諸城も島津氏の支配下となった。「三城」の地頭として吉利忠澄が補任されるが、塩見城に在番しつづけている。門川城や日知屋城には改めて地頭が任じられた。また、宮崎地頭である上井覚兼も塩見にたびたび訪れて地域支配の足固めを進め、さらに天正14年(1586)には、島津義久が塩見城に滞在し、越年したとされる。

島津氏においても「三城」は地域支配の要であり、さらには豊後進出の重要な拠点でもあった。なかでも塩見城の重要性は強く認識されていたようである。

九州仕置と領主の交代 島津氏は天正14年(1586)に閑白に就任した豊臣秀吉と対決姿勢を強め、軍事衝突に発展する。豊臣秀吉の九州進出は島津氏側に軍事的緊張を強いたようである。

例えば、細島地区の妙国寺に隣接する「細島番城」は『上井覚軒日記』の天正14年8月29日条にみる細島警備強化と関連付けられる城館とされる。

しかし、島津氏は天正15年5月、豊臣秀吉の軍門に下ることになった。同氏による日向地域の支配は、わずか10年間で終焉を迎えることとなる。

豊臣秀吉による九州仕置ののち、高橋元種領となり、三城はその支配下に置かれることとなる。なお、高橋氏統治下における在城城主等は詳細な文献がなく、明らかではない。約20年後の元和元年(1615)に塩見城を含めた諸城は、一国一城令によって廢城となつたと考えられる。

その後、延岡藩主は高橋氏から有馬氏へと交代するが、その有馬氏も元禄5年(1692)に越後へと転封されると、日向地域の大半が天領となつた。代官所は富高に置かれた。塩見城一帯の地域は塩見村と呼ばれ、近代を迎えることとなる。

b) 城館関連遺跡

現在、日向市と門川町域には城館の存在が31箇所確認されている（第2図）。このうち、塩見城の周辺には、発掘調査された城館関連遺跡として日知屋城跡(13)と高平城跡(18)が位置している。

日知屋城跡は、塩見川河口に面した櫛ノ山が日向灘に突き出す端部に築城される「海城」である。溝状遺構やそれに伴う列石、石敷遺構が確認され、掘立柱建物跡、柵列跡等が検出され、青花や青磁、白磁等の貿易陶磁器とともに、備前焼、土師器皿、硯、土鍤等豊富な遺物が出土している。遺構や遺物は中世後半の年代と考えられている。

高平城跡は、塩見城跡西方の中村・奥野地区にある。標高約31mの丘陵状地形の西端部に立地する「平城」で、平坦な丘陵端部を堀で分割し、曲輪を設ける構造である。主郭相当の曲輪からは掘立柱建物跡7棟を含む柱穴群と溝状遺構、土坑が検出された。特に土師器皿が多く出土している。

なお、日向市東郷町所在の山陰城に隣接する西城跡(26)や、日向市と門川町境にある新城跡(9)は広大な縄張りを有するが、文献等で歴史的経過の追跡が困難な城館跡群である。
(潤ノ上)

c) 集落跡

中世 板平遺跡では掘立柱建物跡14棟が検出され、貿易陶磁器も出土した。日向市北部の庄手地区遺跡においても輸入陶磁器の出土が認められる。

近世 板平遺跡では大型建物跡1棟と作業小屋と目される掘立柱建物跡10棟が検出されている。また、日向市東郷町の鶴野内中水流遺跡では、18~19世紀の掘立柱建物跡11棟が検出され、竈小屋や石積土坑の上屋と目される建物も含まれる。

さらに、日向市南部の美々津町に所在する別府遺跡では石敷道路が検出されている。所属年代は不明確だが、近世に遡る可能性が指摘されている。

3 塩見城跡周辺の寺社と石塔群

寺社 曹洞宗の水月寺や浄土真宗の正法寺のほか、栗尾神社や比留巻神社等の寺社がある。

正法寺と栗尾神社は、塩見城南西の低位丘陵上にある。前者が元禄元年(1688)、後者が天正元年(1573)に建立されたといふ。比留巻神社の建立は、天正元年に塩見城主右松四郎左衛門が城の鬼門除けに勧請した説と天正元年に那須運平が創建したとする説が

ある。この栗尾神社と比留巻神社は塩見城主郭の南西に位置し塩見城の裏鬼門の方角である。

水月寺は塙見城跡の東側に所在する。この場所は、かつて光嚴寺が存在していた。光嚴寺の開基は長禄元年（1457）とされ、明治34年（1901）に無住の寺となったという。水月寺は、寛文5年（1665）に開山されたのが始まりとされる。二度の焼失の惨禍等を経て現在の位置に至る。

その他、日向市内には定善寺、本善寺や妙国寺といった日蓮宗系の寺院が多い。これらの寺は僧侶日睿の登場以降、日蓮宗富士門流宗徒の活発な活動と関連付けられる。

日向市細島地区に位置する妙国寺の庭園は、県内唯一の国指定名勝で、江戸時代中期の作庭とされる。

石塔群『日向市史』資料編には、水月寺墓地内(光嚴寺跡)に47基(板碑28、五輪塔18、宝鏡印塔4、無縫塔2)、水月寺山門前に2基(六地蔵幢、市営城山墓園内に18基(中村地区の観音堂周辺・財光寺地区の比良石塔群からの移転)が現存するという。城山公園内には国道327号線の改良工事による移設(観音堂周辺)された18基がある。

水月寺墓地内（光嚴寺跡）の石塔には元亀元年、天文2・8・17年、天正10～12・15年銘があり、1530～1590年代の時間幅に収まる。また、水月寺山門前の六地藏幡は市内に残る数少ない例で、そ

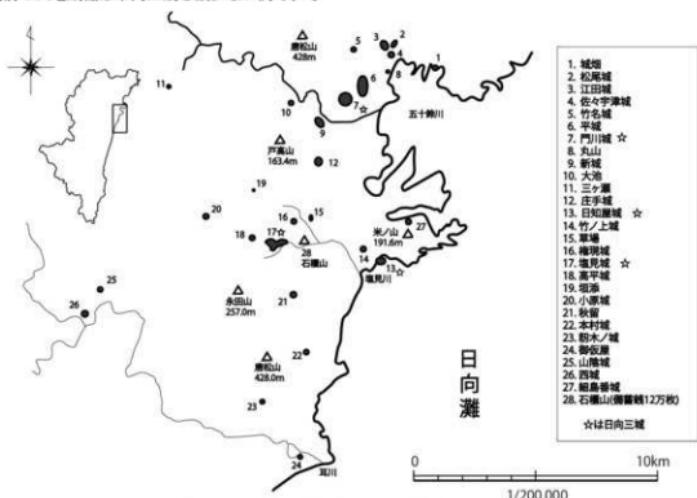
の1基には元亀3年(1572)と「喜屋妙歓大姉」の銘が読み取れる。右松氏ないし伊東氏家中の有力者や関係者と考えられる。

その他にも本山定善寺、本善寺、西川内觀音堂や日知屋城跡等にも石塔群がある。題目板碑や五輪塔には在地産の阿蘇漆結凝灰岩が使用されている。

(今臨屋)

【引用参考文献】

- 宮崎県立向市教育委員会 1985「日向市遺跡詳細分布調査報告書」
日向市教育委員会 1986「別府遺跡発掘調査報告書」
日向市教育委員会 1986「後陣遺跡・越え遺跡」
日向市教育委員会 1991「富高古墳2号墳」範囲等確認調査報告書
日向市教育委員会 1993「日知屋城跡」
宮崎県立向市教育委員会 1994「百町原地区遺跡」
宮崎県立向市教育委員会 1995「寺ノ上遺跡」
日向市史編さん委員会 2009「日向市史」資料編「日向市
宮崎県立向市教育委員会 1999「国指定 名勝 妙国寺庭園」
宮崎県立向市教育委員会 2000「庄手地区遺跡」
宮崎県教育委員会 1999「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書」
1 地名表・分布地図編
宮崎県教育委員会 1999「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書」
II 詳説編
宮崎県埋蔵文化財センター 1999「鶴野内中水流遺跡」「宮崎県埋
藏文化財センター発掘調査報告書」第16集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008「板平遺跡」「宮崎県埋藏文化財
センター発掘調査報告書」第176集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011「板平遺跡(第3・4次調査)」「宮
崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第199集



第2図 塩見城跡周辺の城館分布図

第Ⅱ章 発掘調査・整理作業の方法と経過

第1節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方法と経過

a) 中山遺跡（第4図 南側曲輪群）

調査区の設定と経過 調査は調査対象地の買取状況や建設工事に基づいて3カ年度に分割して実施した。平成17年度（平成17年12月1日～12月22日）は一部買収が終了した箇所についてトレント主体の調査を行った。その結果、当初、耕作のための造成面と考えられていた平坦面に柱穴群と遺物が確認され、面的に広げる必要性が高まった。

この調査結果を受けて平成18年度（平成18年9月25日～19年3月30日）は調査区内で検出された平坦面を「段」と呼んで、各段を1～7段に区分して面的な調査を進めた。しかし工事の関係上、調査区内を工事用道路が貫く形となり、さらに用地買取済箇所が部分的であったため調査区が細分され、逐次的に調査せざるをえない状況となり、調査区全体の地形や遺構の全貌を一度に面的に把握するには困難であった。

平成19年度（平成19年4月5日～12月20日）実施分については、用地買収とその立木伐採が全て終了したので現地形の把握が可能となった。そこで改めてA～V区までの22調査区に区分した。

なお、用地買収の関係で調査できなかった箇所については追加調査（平成20年6月30日～7月11日）を実施した。

現地調査は、道路建設の詳細設計に基づく協議（平成19年5月）で当面の調査対象から外れる遺跡主要部分の850m²を残して終了した（本書「補記」参照）。

調査の方法 平成18年度調査では、堆積が約0.2m程度と比較的薄く、遺構面が岩盤面であることや、重機の搬入路が限定されていたので、一部を除いて人力による掘り下げを行った。平成19年度は、重機の搬入が可能となったので、表土・耕作土及び自然堆積層の上位層を重機にて掘削した。

基本層序と遺構検出面 概ね8層に区分される（第1表）。基本的に小調査区（平坦面）では耕作土層（II層）直下が褐色土層（VI層：地山）となる状況で、鬼界アカホヤ火山灰層以下の自然堆積層は斜面地や平坦地でも局所的に認められる程度であった。遺構検出はこの褐色土層面で行っている。

遺構（柱穴）の埋土 中山遺跡で検出された遺構は、そのほとんどが柱穴であった。その柱痕跡（黒褐色系）

は、地山の土色との判別が比較的平易であった。この柱穴掘り方埋土は、地山由来の褐色土主体で岩盤破砕礫が多く混入する性状であった。そのため地山面との差異が容易には判別しづらく、かなり硬質でもあった。炎天下の中での乾燥した状態下では、柱穴輪郭の検出と精査には困難が伴い、柱穴一基ずつ半観察して埋土状況を確かめながら完掘を目指した。柱穴底面には硬質な充填土（褐色・黄褐色系）や根固め石も認められた。

遺物包含層の扱い 遺物は表土・耕作土中より出土したものが主体で、その時期も多岐にわたる。取り上げは、遺物の残存状況が良好なもの、もしくは柱穴等の遺構内出土の遺物を除いては調査区ごとに一括した。ただし、重機使用による表土剥ぎを実施した結果、調査年次ごとに取り上げた遺物に若干の多寡が生じたことは否めない。

b) 塩見城跡（第4図 西側曲輪群）

調査区の設定と経過 塩見城跡は中世山城として認知される周知の遺跡で、縄張り図からも遺構の存在が確実視されていた。そこで平成17年度（平成17年11月14日～18年1月24日）は、縄張り図の作成とトレント主体の調査を実施した。地表面観察では確認出来ない曲輪の存在や多数の柱穴が認められた。

平成19年度（平成19年7月2日～3月31日）は、用地買収の進捗および建設工事を勘案して、調査対象区を1～4の「調査区」に、各尾根に挟まれた「谷部」については谷1～4と設定して面的な調査を進めた。

以後、調査は平成20年度（平成20年4月7日～10月31日）と平成21年度（平成21年7月21日～9月30日）と合計4次にわたる。このうち平成21年度の調査は、市道付け替えに伴うものである。

調査の方法 曲輪と想定された平坦面の主軸と直交するトレントを設定して調査を開始した。調査区内では、曲輪の斜面部には比高差20mを超える急傾斜地も存在する。この箇所については安全面を考慮し部分的トレント調査に留めざるを得なかった。

第1表 塩見城跡基本土層図

層No	層名	属性	備考
I層	表土	表土	
II層	暗褐色土	耕作土	遺物包含層
III層	アカホヤ火山灰	堆積土	
IV層	黒褐色土	堆積土	
V層	褐色土	堆積土	
VI層	褐色土	地山	
VII層	黄褐色土	地山	
VIII層	岩盤	地山	四十万層群

基本層序と遺構検査面 第Ⅲ章にて記載する「水の手」以外は概ね3層の堆積構造である（第1表）。基本的に耕作土層（Ⅱ層）直下が岩盤（Ⅶ層：地山）である。Ⅱ層とⅢ層に後世の造成土が認められる場合もあった。おもに遺構検査は岩盤面で行った。

遺構（柱穴）の埋土 中山遺跡同様、検出された遺構のほとんどが柱穴であった。柱穴掘り方の埋土は、地山由来の岩盤破砕礫が主体の褐色土や岩盤風化土（黄白色系の粘質・砂質土）が混入する土質で、中山遺跡よりは精査しやすい硬さである。ただ、柱痕跡は埋土が黒染め程度であるので判別しにくい。

遺物包含層の扱い 平坦面には概ね10~20cm程度の薄い遺物包含層が堆積していた。包含層中からは古墳時代から現代に至るまでの遺物が出土したが、原位置性は低いと考えられたため、中山遺跡同様、完形に近い状態で出土した一部の遺物を除き、区画や層位ごとの一括遺物として取上げを行った。

（今塩屋・田中敏）

2 遺構等の記録について

地形と遺構の記録 中山遺跡と塩見城跡の調査では、電子平板やトータルステーションによる三次元記録の手法を用いて地形測量や遺構平面図の作成を進めた。ただし、遺構図については使用機器の特性や使用者の技術的制約により、遺構図の一部や土層断面図については人力による実測方法を用いた。

地形測量における等高線については、電子平板を用いて約1~2m間隔での任意のメッシュデータを記録し、ソフトウェア上で等高線を作成した。

電子平板使用に伴うデジタル機器の種類と台数は、下記のとおりである。

・遺構くん〔（株）CUBIC 社製〕	2台
・トレースくん〔（株）CUBIC 社製〕	1台
・TOUGHBOOK〔Panasonic 社製〕	2台
・BLUETOOTH無線機	2組

（測ノ上）

掘立柱建物の調査 今回の「塩見城跡」・「中山遺跡」の調査では、194棟を数える掘立柱建物跡が検出された。現地復元が46棟で、残りは遺構分布図（1/20）を用いた図上復元で補完した。しかしながら、柱穴は超過密な分布を示すので、現地復元は容易ではなかった。そのため、柱穴の土層断面図は、それぞれ任意の方向にて図化記録せざるを得なかつた。

（今塩屋）

第2節 整理作業の方法と経過

整理作業は、平成19年1月より、当センター本館にて開始した。遺物の水洗からトレースまでと、遺物の写真撮影等、全ての整理や収蔵前整理の作業は平成22年3月に終了した。デジタル編集作業を含む報告書作成の作業は、翌23年9月に終了した。

1 調査報告にあたって

現地調査時点においては、日向市および宮崎県教育委員会による遺跡詳細分布地図に基づいて塩見城跡の主郭部南側を通る市道から北側を「塩見城跡」、市道から南側を「中山遺跡」と認識していた。

しかし、発掘調査や縄張り図作成（第191図）の結果から中山遺跡は広い平坦面を有する曲輪群や道路状遺構も有することが判明した。本来的には塩見城域内として捉えられると判断されるに至った。

したがって、本書では、「中山遺跡」「塩見城跡」を主郭部との方位的位置関係から、

「塩見城跡」⇒「塩見城跡西側曲輪群」（第Ⅲ章所収）
「中山遺跡」⇒「塩見城跡南側曲輪群」（第Ⅳ章所収）
と読み替えた上で、その調査成果を報告する。

2 遺構の認識と名称について

遺構略号 本書で報告する遺構略号は以下のとおりとする。ただし、遺構略号は本文および遺構図中の煩雑さを防ぐために使用するもので、東九州自動車道関連の発掘調査で共通的なものに限る。そのため「曲輪」、「堀切」、「横溝」や「土塁」など山城特有の遺構名稱は特に略号を付加していない。

S A = 積穴建物跡 S B = 挖立柱建物跡

S C = 土坑 S D = 土坑墓 S E = 溝状遺構

S F = 井戸跡 S G = 道路状遺構 S I = 集石遺構

なお、「S R = 横列 S S = 石積遺構 S X = 不明遺構」は、本書のみで使用した略号である。また、掘立柱建物跡や柵列とした遺構には門や木戸が、溝状遺構には連絡通路的な性格が想定される場合がある。遺構群の組み合わせから、振り込みのない平坦面上に道路や通路的意味が想定される場合もある。これらについては本文中でその性格に言及する。

遺構番号 塩見城跡は山城跡という特性上、丘陵尾根上に連続して展開する平坦面（曲輪）の集合体が、堀切と自然の障害である谷地形によって大きく区分される特徴を持つ。そこで、曲輪の集合体を一つの曲輪群とみなした。各曲輪群の呼称においては、

古絵図や伝承、小字名等から名称を与えるべきであるが、現時点では曲輪名のある絵図は確認出来ず、現存する小字名ではある程度の地割を反映するに留まるため、改めて適宜、番号を振った。

したがって、曲輪の番号やそれに付随する遺構番号は以下の基準に則って与えることにした。

- ・主郭部に近い曲輪群から順に A～M 群とする。
- ・曲輪群内の各曲輪については曲輪 A-1、A-2 という順に主郭側から番号を振り分ける。
- ・各曲輪内の個別遺構の番号、例えば掘立柱建物は曲輪 A1-B1 の様に曲輪ごとに番号を付す。
- ・堀切や堅堀については、堀切 A1 の様に付随する曲輪の番号を付す。
- ・曲輪群どうしを関連づける遺構（通路 / 道路状遺構等）は独立させて遺構番号名を付す。

なお、調査区内の谷地形部については、曲輪 B 群と曲輪 A 群間の部分は、地元住民への聞き取りや井戸跡が検出されたことから「水の手曲輪」とした。また、曲輪 D 群東西にある谷地形は、「谷部」と呼称した。

3 遺構実測図の掲載について

全ての遺構図について個別に掲載すると膨大な頁数となるため、必要最小限の掲載にとどめた。したがって、全ての遺構に関する詳細については、遺構配置図と遺構一覧表を参照されたい。

4 遺物の図化・掲載について

遺物は、遺構の時期と性格を示すものを基本とし、遺跡の変遷や時期的な性格を考える上で必要と判断されるものを選択して図化・掲載した。

しかし、掘立柱建物をはじめ数多くの遺構が検出されたが、遺構に伴う遺物は包含層出土分に比べて格段に少なかった。さらに出土遺物は多種類多岐に及ぶので、系統的な分類に基づく報告が必要である。そこで、遺物については第VI章において一括して掲載と報告を行った。なお、遺物の出土位置や状況は、第III・IV章において必要な限りの言及に留めている。

5 遺物の整理

塩見城跡南側曲輪群（中山遺跡）の調査では、現地調査時の調査区割に基づいて遺物注記を進めたので、本報告における曲輪名称と遺物の注記が異なる。この対応関係については第2表を参照されたい。

第2表 中山遺跡における調査区の対照表

H18年度	H19年度	本報告分	
		第4図	第63図
1段目	A区	曲輪D	A・B・C区
2段目	D2区	曲輪E	D1・F1区
3段目	F2区	曲輪F	D2・F2・E区
4a段目	G2区	曲輪G	G1区
4b段目	I区	曲輪H	G2・G3・I・J区
5a段目	L区	曲輪I	M区
5b段目	N区	曲輪J	L・N区
5c段目	K区	曲輪K	K区
6段目	P区	曲輪L	Q区
7段目	Q区	曲輪M	P区

なお、平成14年度に調査が行われた中山遺跡出土遺物との混同を避けるために、今回の調査出土分については「H中山」と別途注記名を冠している。

6 報告書原稿の作成

報告書はDTPによる作成を基本とし、Adobe社製の各種ソフト（IllustratorCS2・PhotoshopCS2・InDesignCS2）によるデジタル製図、レイアウト等の編集作業を行った。データはデジタルと紙出力の両方とも収蔵している。

（今塩屋・田中敏）

第3節 教育普及活動

発掘調査中、調査後に次のような教育普及活動を実施した。

平成18年度

中山遺跡新聞の発行 発掘調査中に近隣の小中高校へ配布（平成18・19年度実施：全5号）、現地説明会（中山遺跡）

平成19年度

報道発表（中山遺跡：龍首水注）、現地説明会（中山遺跡）

平成20年度

現地説明会（塩見城跡）、報道発表（中山遺跡：土製聖人像）

平成21年度

出前講座1（会場：塩見小学校、対象：小学5・6年生）、

出前講座2（会場：日向市中央公民館、対象：日向市高齢者クラブ）、遺物展示1（会場：宮崎県総合博物館）、遺物展示2（会場：日向市立図書館）

平成23年度

遺跡報告会（会場：日向市大王谷コミュニティセンター、対象：一般市民）

（田中敏）

第Ⅲ章 西側曲輪群の調査

第1節 調査の概要

曲輪群の位置 曲輪A～C群は、主郭部（城山公園）から西側に派生する尾根上に広がる。一方、曲輪A・B群に挟まれた谷地形に「水の手」曲輪、南側に「谷部」（西側谷部）が位置する（第3・4図）。

これら曲輪群は、第IV章で報告する南側曲輪群と比較して狹小な曲輪が鎖状に連続するあり方を示す。また、曲輪A・B群は水の手曲輪を介して対称的な位置関係にあり、その配置は平面X字状となる。

調査の概要 曲輪A群は8段の曲輪からなる。このうち主郭部側寄りの4箇所の曲輪（A1～A4）が調査された。調査の結果、帶曲輪3箇所・堀切2条・堅堀1条・土塁1箇所が検出され、掘立柱建物跡30棟・柵列15条が復元された。曲輪A3では、埋没した状態の薬研堀状の堀切が確認された。この堀切は尾根を完全には切断せず、陸橋として削り残す。堀切と掘立柱建物跡との重複関係も認められた。

曲輪B群は、現状では6段の曲輪からなる。主郭部側の4箇所の曲輪（B1～B4）が調査対象となる。調査の結果、帶曲輪2箇所・堀切1条・堅堀1条・土塁（岩盤削り出し）1箇所等が検出され、掘立柱建物跡26棟・柵列15条が復元された。曲輪B4では岩盤破碎礫主体の盛土下に掘立柱建物跡が検出された。

曲輪C群は、現状で4段の曲輪をなす。主郭部側の2箇所の曲輪（C1～C2）が調査された。堀切2条・堅堀4条が検出された。

また、曲輪B・C群の堀切を結ぶ横堀が検出された。底面が階段状に整形される箇所も認められた。

水の手曲輪では都合4面の遺構面が検出され、少なくとも3回の造成が認められた。遺構は、石積遺構2基・溝状遺構3条・井戸跡1基・炉跡3基が検出され、掘立柱建物跡20棟・柵列16条が復元された。

石積遺構1は、石垣状の石積み部前面に堀と土塁が二重に配されており、いわゆる虎口状構造をなす。複数回の改修・改造の痕跡も認められた。

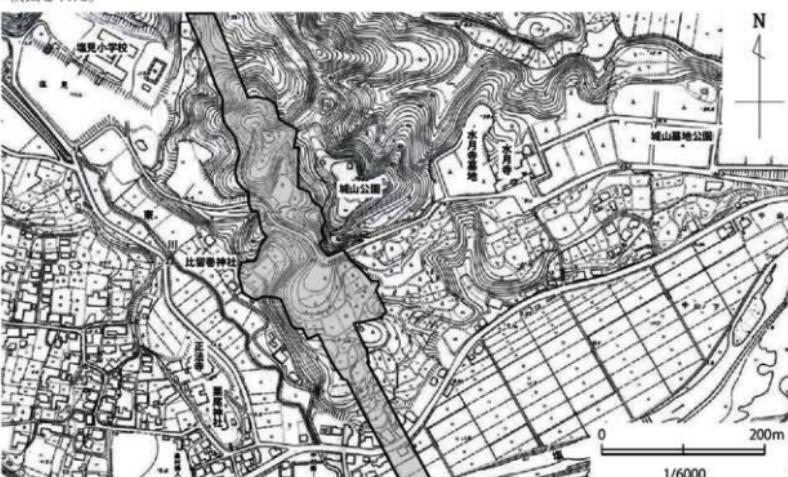
井戸は円形石組であり、壁体の一部は開いて溝状遺構と接続する。井戸壁体自体は、曲輪面の造成に伴って2回のかさ上げがなされ、溝状遺構も3条にわたって作り変えられたことが判明した。

また、井戸と溝状遺構との接続部は台形や方形の石敷となる。

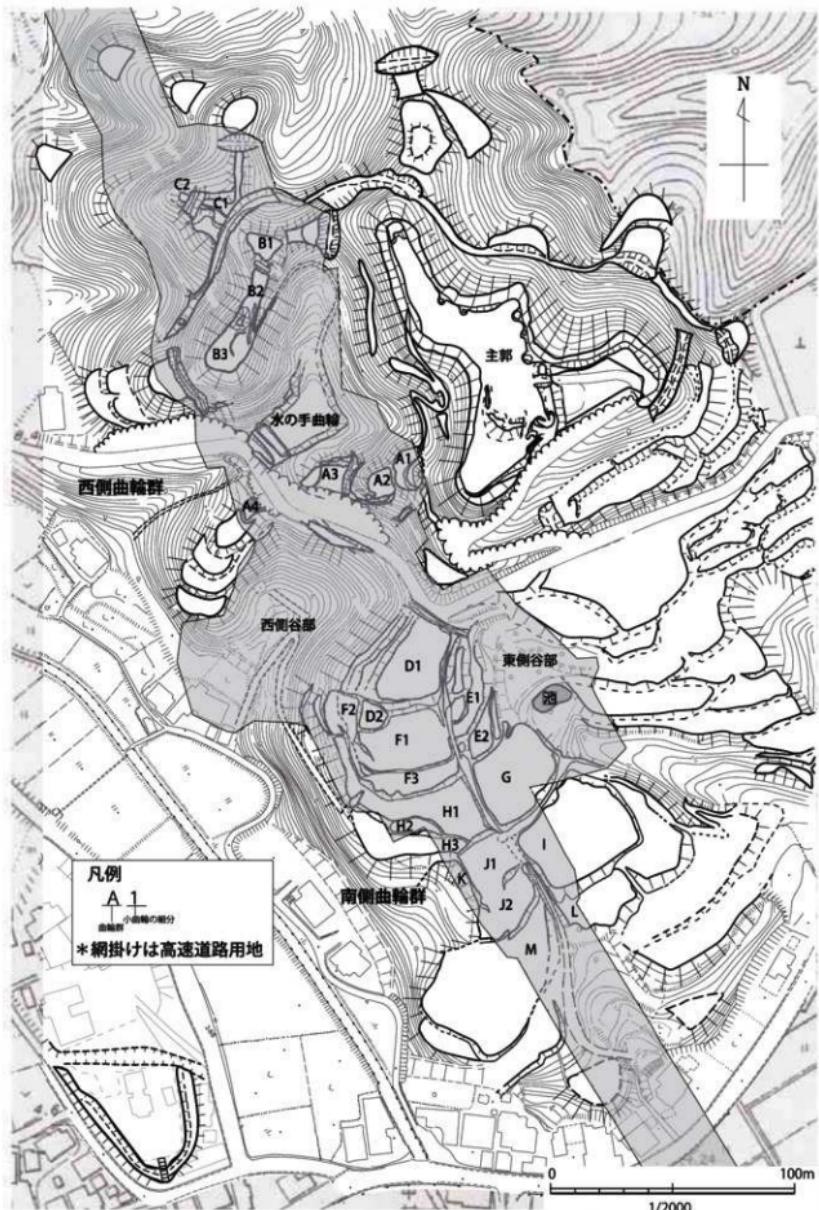
西側谷部の調査では、近代以降の造成に伴う岩盤削り出しの平坦面や造成土が確認された。

なお、各曲輪の面積、遺構の一覧については、第3～6表を参照されたい。

（今塙屋）



第3図 塩見城跡周辺地形と高速道路用地の位置



第4図 塩見城跡内調査区と曲輪の関係

第2節 曲輪A群

概要 曲輪A群は主郭南西端から西に延びる尾根上に展開する曲輪群である。調査区内で検出された平坦面4箇所を、標高の高い側から曲輪A1～A4とした(第4図)。曲輪A4は市道により他の曲輪と分断されていた。

曲輪A群では曲輪4箇所、帶曲輪3箇所、堀切2条、豎堀1条、土壘1箇所、掘立柱建物跡30棟、柵列15条が検出された。曲輪A1～A3を結ぶ通路状の平坦面も認められた。

曲輪A1 (第7～9図)

位置と構造 曲輪A群の最高所に位置し、標高は約54m、主郭部との比高差は約19mである。曲輪D群の堀切を眼下に臨む。曲輪A1南側の斜面では豎堀(豎堀A1)、曲輪東端の主郭側斜面には、堀切(堀切A1)が位置する。

曲輪A1は、土壘を幅の狭い平坦面が2段に囲む構造である。平坦面の上段は長さ約17m、最大幅約3m、下段は長さ約27m、最大幅約4mである。この上段を曲輪A1a、下段を曲輪A1bとする。曲輪に面した法面は急斜面である。

層序 岩盤を削り出して曲輪面とする。曲輪面上には第1～5層が堆積しており、第2b層中の一部には大きめの礫を含む(第9図a-b, c-d)。

遺構 土壘と柱穴が66基検出された。このうち復元できたのは掘立柱建物跡4棟、柵列5条である。

土壘 曲輪A1の東端に位置する。岩盤を削り残した土壘で、長さ11m、幅3.2mを測る。

掘立柱建物跡 曲輪A1aに2棟(SB1, SB2)、曲輪A1bに1棟(SB4)ある。各棟とも曲輪面の中央に陣取る位置関係にある。SB1とSB2は切り合い関係にあり、SB1がやや南にずれる。

SB3は堀切A1南側の幅狭な平坦面上に位置し、SR5と平面的に重複する。

柵列 SR1～4は曲輪A1平坦面の周縁を囲繞するように巡る。SR3はSR4と接続するかもしれない。

SR5は堀切A1の南側に位置する。柱穴列は等高線と直交して並び、南側曲輪群との連絡を阻む。

通路状遺構 堀切A1の南側および豎堀A1の東側には、幅狭な平坦面が南北に延びる。この平坦面の東側斜面にはバックホーのパケット痕が数箇所認められたので、調査着手時点では、後世の造成によるものと考えられた。

調査の結果、平坦面は堀切A1と曲輪A1bへと統き、その分岐点にSB3とSR5が検出された。平坦面南側には帶曲輪群も存在した。従って、重機による造成以前にも平坦面、すなわち南側曲輪群と連絡する通路状遺構が存在したと考えられる。平坦面を封鎖する位置にあるSB3は門状遺構と捉えられる。

堀切A1は曲輪A1a南側の通路状遺構に面するので、堀切を介した主郭部方面への往来は可能である。

遺物 曲輪面および堆積土からは、福建広東窯白磁碗(6)、備前焼擂鉢(393)、土師皿(582)、錢貨(833・835・838)が出土した。14～15世紀の遺物が比較的多い。6は15世紀前半、393は16世紀中頃～17世紀初頭の年代に比定される。土壘周辺では、直径5～10cmの大団塊(ノジュール)が111個出土した。

豎堀A1 (第7～9図)

位置と構造 曲輪A1南側の基部に位置し、北東側に堀切A1がある。現地形では南側の斜面に等高線と直交する溝が中腹まで認められたので、トレント主体の調査を行った。北側上部付近の岩盤面は60°の傾斜で下方に続く。北東隅は丸く90°に屈曲するので、豎堀の端部と考えられる。豎堀A1は堀切A1とは連続性のない、独立した位置関係となる。

層序 1cm程度の細かな破碎礫が互層上に厚く堆積する自然堆積層である(第9図e-f)。

遺物 豊堀A1より福建広東系白磁皿(75)、青磁、備前焼窯、土師器皿等が出土した。

堀切A1 (第7～8図)

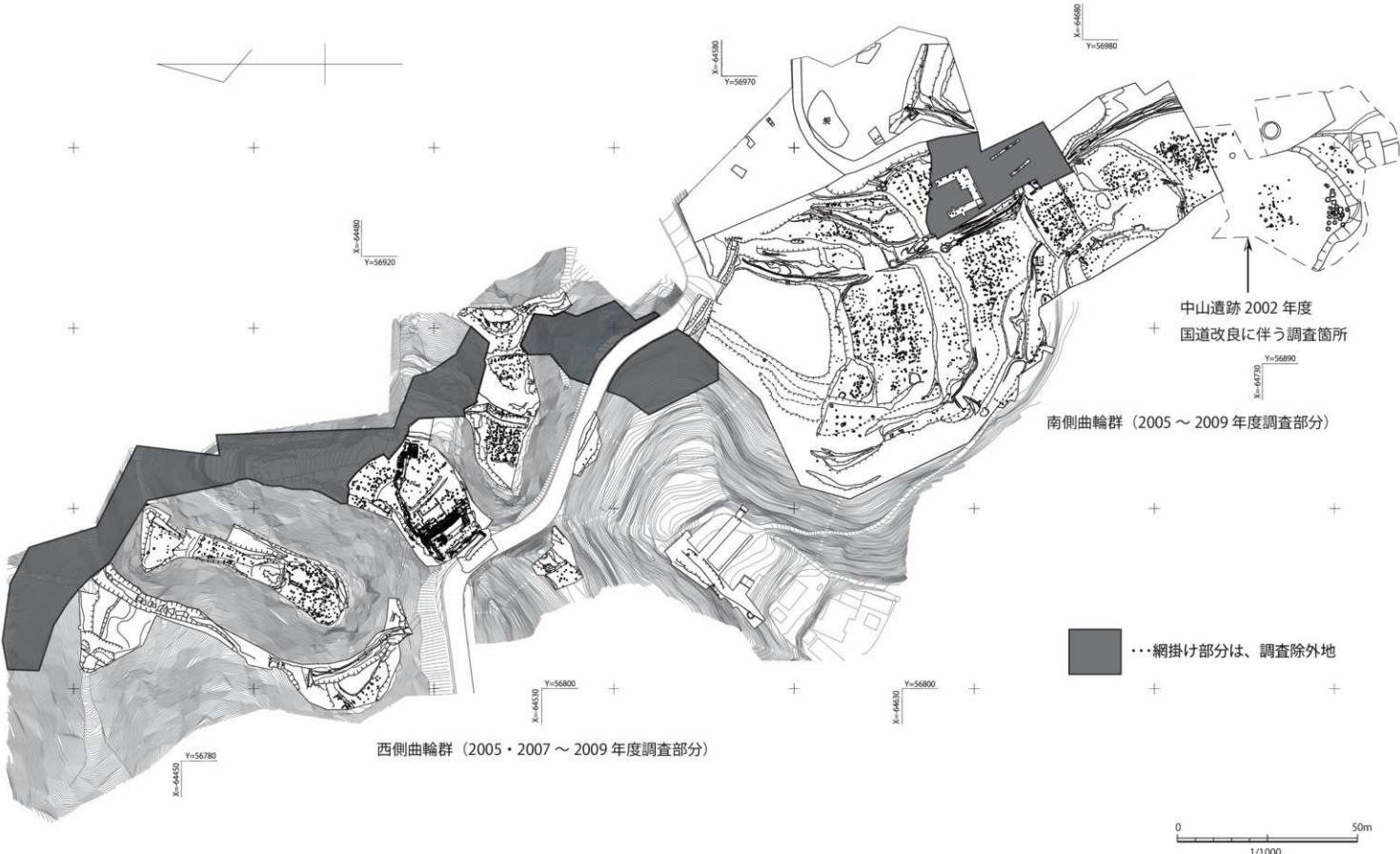
位置と構造 曲輪A1の東側に位置する。西側に岩盤を掘り残した土壘、東側は主郭部に続く斜面部に面する。堀切は土壘の背面を切断して、斜面と曲輪を分離している。

全長は16m、上幅は推定で2m(土壘頂部付近)、曲輪A1側の深さは1.5m測る。断面形はV字で、その堀底は60°の角度で開く、薬研堀の形態である。

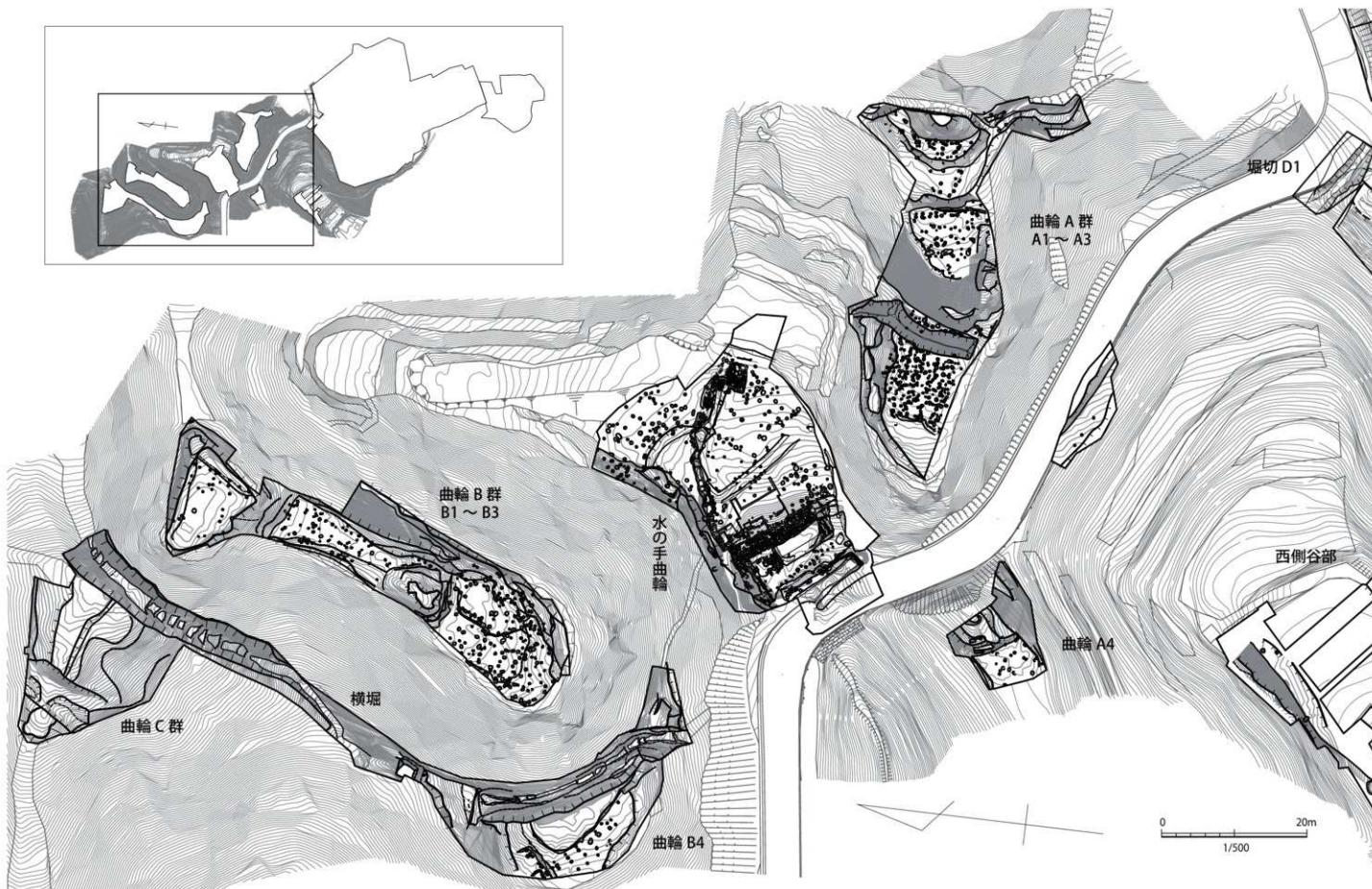
この堀切の大部分は調査区外であり、堀切の南北に開く開口部付近のみが調査対象範囲であった。

層序 岩盤破碎礫を主体とする自然堆積層が確認され、第6層を除いて全てが主郭側斜面からの流れ込みであった(第9図g-h)。なお、第9層は炭化物を含む層である。

遺物 第2層より錢貨(未流通)(817)が出土した。



第5図 塩見城跡全体遺構配置図



第6図 西側曲輪群遺構配置図

曲輪 A2 (第7~9・19図)

位置と構造 曲輪 A1 の下段に位置し、標高は 51 m、曲輪 A1 との比高差は 3 m である。

遺構面は奥行 9.6 m、幅 11 m で、曲輪 A3 側の斜面は急斜面だが一部傾斜が緩くなる箇所がある。

層序 第 1 ~ 4 層が堆積しており、遺構面は岩盤面を平坦に削り出している (第9図 k-j)。

ただし、曲輪南東部の一部は遺構面よりもや高くなってしまっており、本来の遺構面の高さであったとすれば、平坦面は拡張等の変容を受けている可能性がある。

遺構 通路状遺構や柱穴 81 基が検出された。復元できたのは、掘立柱建物跡 4 棟、柵列 7 条である。

掘立柱建物跡 SB1 ~ SB4 は曲輪東側にある。SB1・SB2・SB4 はほぼ同軸方向に重複する。身舎面積は曲輪 A1 よりも大きく、SB1・2・4 は庇を有する。

柵列 SR1、SR2 は掘立柱建物跡と曲輪 A1 からの斜面の間に位置し、SR1 は南側斜面のスロープ状平坦面に接続する。SR3、SR5 は曲輪西側にあり、SB1 ~ SB3 に伴うものと推定される。

通路状遺構 曲輪 A2 の南側斜面では、岩盤面を削り出した 4 段のステップとスロープ状の平坦面が検出された。ステップとスロープは、曲輪 A3 と曲輪 A2 をつなぐ通路面の役割を果たしたと考えられるので、これらの遺構群を通路状遺構とした。全長 15.8 m、最大幅 2.2 m を測る。

曲輪 A3 側から数えたステップの 1 段目では柵列 (A3-SR2) が位置する。ステップとの位置関係から SR2 は、城戸の性格が想定される。

ステップ 2 段目では路肩を一部補強した盛土層 (第3 ~ 10 層) が確認された (第9図 k-l)。ステップ 3 段目は狭小な通り場面である。ステップ 4 段目の肩部は L 字形に掘り込まれ広い平坦面となる。

遺物 遺物は掘立柱建物跡の柱穴内から多く出土した。SB1 からは、景德鎮窯青花碗 (210~214)、SB2 は青磁碗 (134)・備前焼擂鉢 (387)・瓦質土器 (661)・土鍤 (749 ~ 753) が出土した。SB3 柱穴から土鍤 (748)、SB4 柱穴からは邵武四都窯白磁皿 (25) も出土した。(210) は打ち欠きのある碗である。

遺構面や堆積層からも遺物は出土している。青磁碗 (88・106・110)・香炉 (196)、景德鎮窯青花皿 (235)、備前焼燭口壺 (457)、土鍤 (754・755) 等である。これらの遺物は、14 ~ 16 世紀と幅広い年代観を示す。

(児玉、田中達)

曲輪 A3 (第7~10・11・19 ~ 21図)

位置と構造 曲輪 A2 の下段に位置し、標高は約 44 m、曲輪 A2 との比高差は 7 m、水の手曲輪とは 11 m を測る。曲輪の南側は市道建設により大きく失われていた。栗尾神社方面の集落や塩見川本流に広がる水田地帯が望める好地でもある。

曲輪面は長さ 22.6 m、現存幅 11.2 m で、曲輪 A 群中最大規模である。岩盤を削り出す 3 段の平坦面から成り、東側から曲輪 A3a (長さ 15.1 m)、曲輪 A3b (同 6.1 m)、曲輪 A3c (同 1.4 m) とする。曲輪 A3c の平坦面は幅狭な犬走り状である (第12図)。

また、曲輪の北縁部に狭い平坦面 (帶曲輪 A3)、曲輪 A2 との境には完全に埋没した状態で検出された堀切 (堀切 A3) が位置する。この堀切の東側肩部は削平され、その面に柱穴が並んでいた。

層序 曲輪 A3b 部分では 2 層の旧表土 (第5・7層) が確認された (第12図 b-c)。第 7 層は岩盤を削り出した面 (地山) 上に、第 5 層より上層は、柱穴が掘り込まれる第 3・4 層が堆積する。また、第 3 層の上面は曲輪 A3a の遺構面の高さに揃う。

遺構 柱穴 260 基が検出され、掘立柱建物跡 19 棟、柵列 2 条が復元された。柱穴は曲輪 A3a 側に偏在し、曲輪 A3b は第 3 層面の数基に過ぎない。曲輪 A3b-c は遺構の空白部といえる。

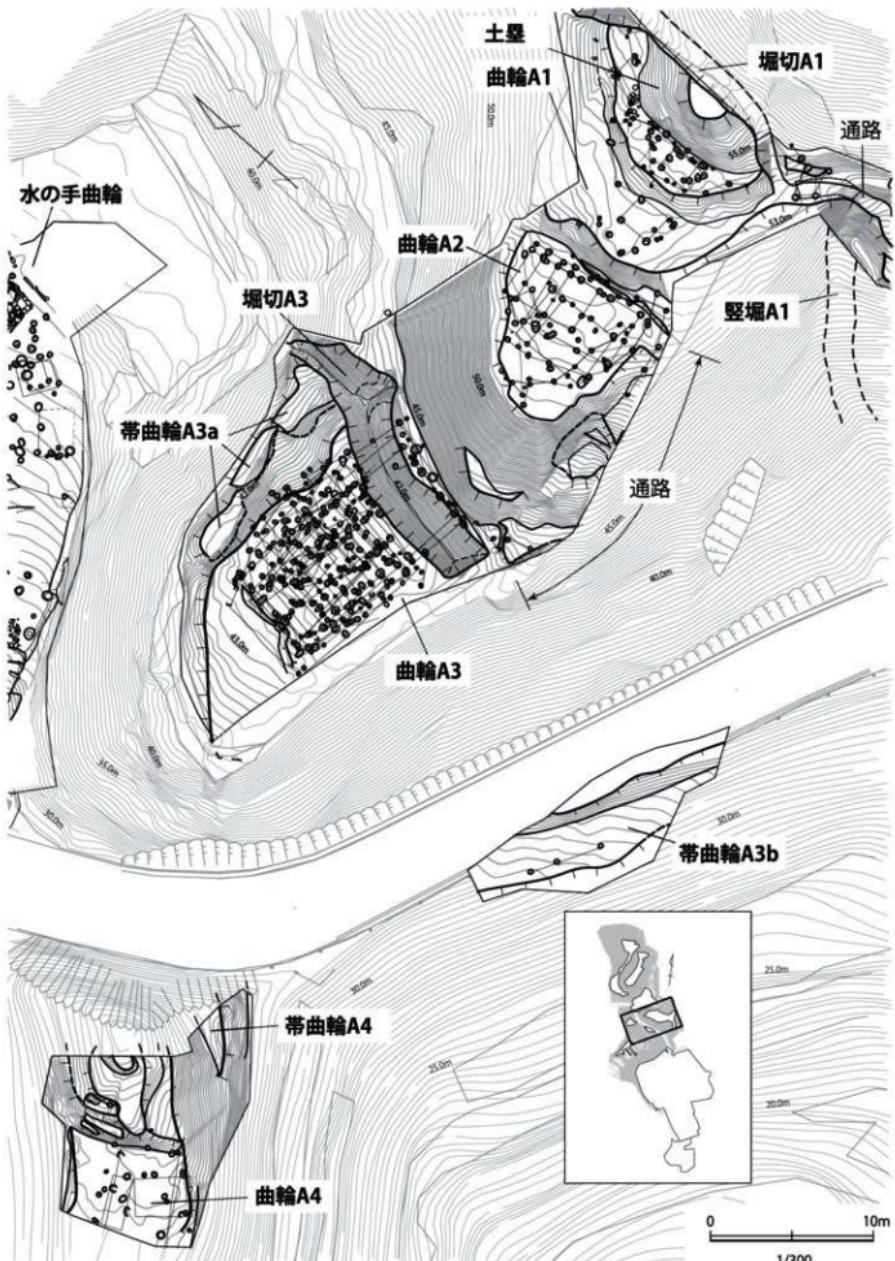
掘立柱建物跡 身舎面積は SB11 (41m²) が最大で、SB12 (36m²)、SB16 (30m²)、SB2-13・15 (15 ~ 20m²) と続く。残る 12 軒は 10m² 前後と小型の建物である。SB12 は 3 × 3 間の総柱建物で、側柱建物の SB11 とともに曲輪 A3 内で中心的な建物跡である。

掘立柱建物跡は主軸方向から 6 群に分類できた。
①西方向に振る (SB3・4・8・10)、②東西方向に近い (SB13・18)、③東西方向 (SB4・16・17・19)、④南北方向 (SB2-5・6・11・12・15)、⑤北から東に振る (SB1)、
⑥東方向に振る (SB7・9) である。

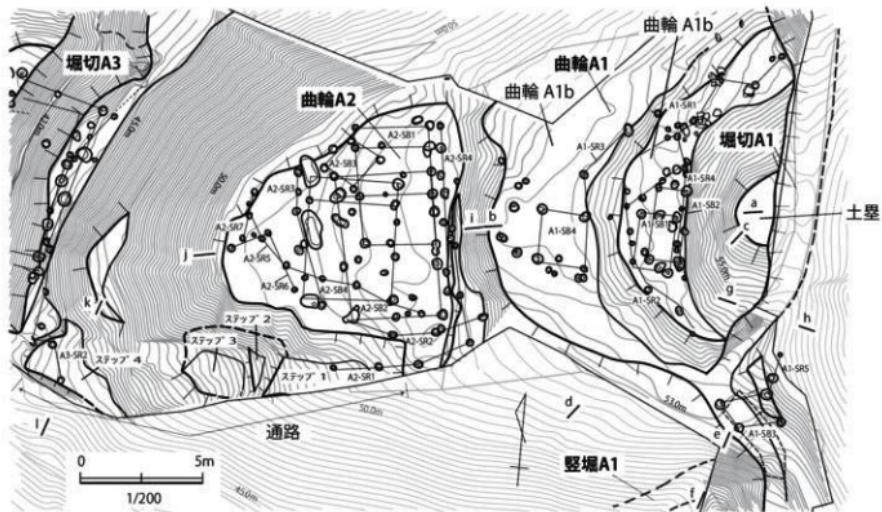
④群の SB11・15 と SB2・6 は、大小一对になると考えられる。なお、SB12 は SB2 との位置関係から④群に入れた。

なお、各群の変遷は、柱穴の切り合ひ関係から、①群 → ③群と④群 → ⑤群と、②群 → ④群の順とを考えられる。⑥群は切り合ひ関係がなく不明である。

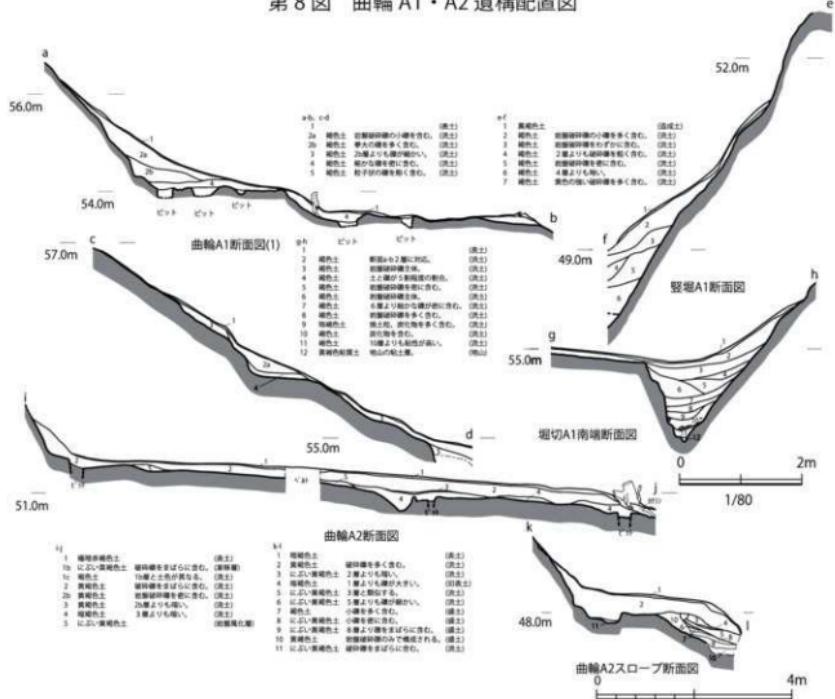
柱穴出土の遺物の時期は、①群 SB10 柱穴出土の青花皿 (243) は 15 世紀後半 ~ 16 世紀後半、③群 SB14 の青磁碗 (123) は 14 世紀中頃 ~ 15 世紀初頭を示す。



第7図 曲輪A群遺構配置図



第8図 曲輪A1・A2遺構配置図



第9図 曲輪A1・A2土層断面図

①群は他の群と建物主軸方向が大きく異なり、堀切 A3 に切られる関係にある。堀切 A3 の掘削時期は後述のように 15 世紀前半ないしそれ以後なので、①群はそれより遅る時期（14 世紀後半前後）となる。②・③・⑥群は堀切 A3 で隔てられ、建物主軸は堀切主軸と直交する。出土遺物の年代観も鑑みると堀切が機能した時期（15～16 世紀代）の建物跡群となる。

さらに④群 SB2 は、堀切 A3 をまたぎ、その東側桁行は、堀切肩部を削りとった平坦面上にある。④群 SB4・6・11 は堀切 A3 の肩部に接した位置に柱穴を穿つ。この SB11 柱穴出土の備前焼擂鉢（405）は 16 世紀中頃～17 世紀初頭の年代を示す。

のことから、④群は 16 世紀中頃以降の堀切 A3 埋没後に曲輪 A2 据や堀切肩部を切り開いた上で建てられた建物跡群である。

⑤群 SB1 は、堀切 A3 埋没後の建物跡で、後述のように堀切出土遺物の年代的下限は 16 世紀中頃となるから、SB1 はそれ以降の時期であろう。（川俣）

柵列 SR1 は曲輪全体を囲むように配置されていた。柱穴は第 3 層面（第 12 図 b-c）で検出された。

SR2 は通路状遺構のステップ一段目に位置し、堀切 A3 の東側肩部に沿って北方向に延伸する。

遺物 柱穴の出土遺物は、SB10 の景德鎮窯青花皿（243）、SB11 の景德鎮白磁皿（41）、備前焼擂鉢（405）、SB12 の景德鎮窯青花皿（236）、邵武四都窯白磁皿（56）、SB13 の砥石（II99）、SB14 の青磁碗（123）、SB15 の土鍤（766）等がある。

曲輪面出土の遺物は、福建広東系白磁碗（12）・景德鎮窯白磁皿（43）、青磁皿（148）、漳州窯青花皿（291）、備前焼甕（425）、瓦質土器の風炉（658）、土鍤（761～765）、挽臼（II52）などがある。

帶曲輪 A3a（第 7・10・11 図）

位置と構造 曲輪 A3 北側に位置し、3 段の幅狭な平坦面で構成される。平坦面は岩盤を削り出す。各段は連結して、西から東へと階段状に下る。帶曲輪 A3a と曲輪 A3 の比高差は 2～3 m で、最大幅 4.7 m、奥行 1.6 m である。

層序 平坦面上には第 3・7 層（旧表土）が堆積する。その間の第 4 層は、曲輪 A3 の遺構面と天端が揃うので、曲輪 A3a の拡張に伴う盛土層と考えられる（第 12 図 d-e）。

遺構 帯曲輪 A3a 西側では、炭化物と焼土の集中箇所が 1 基検出された。集中箇所は長径 0.5 m、短軸 0.4 m の略円形である（第 10 図）。

遺物 漳州窯青花碗（299）、景德鎮窯青花碗（208）、土師器皿（615）、土鍤（767・768）、鉄釘（897）等がある。

（田中達）

帶曲輪 A3b（第 7・13・14 図）

位置と構造 曲輪 A3 から西側谷部への南側斜面中程に位置する。曲輪 A3 の帶曲輪とする。調査区内では帶曲輪全体の構造は把握できなかった。標高は約 28 m、曲輪 A3 との比高差は 16 m である。

市道下の客土を除去すると、自然堆積層が確認され、その下面で岩盤削りだしの平坦面が検出された。その最大幅は 3.2 m を測る。それより 0.6 m ほど下段にも幅 0.3 m の平坦面が形成される（第 14 図）。

層序 上段の平坦面上には、マンガン沈着の砂質土が細かい単位で水平に堆積する（第 2～13 層）。下段の第 19・20・22 層の上面は水平面を形成するので、帶曲輪面として機能した可能性がある。

なお、第 13 層は第 15・18 層を水平に削り取る堆積なので、第 15～18 層は下段の平坦面を埋め立てた盛土とも考えられる。流入土の整地や盛土等で帶曲輪の機能を維持したようだ（第 14 図 n-o）。

遺構 第 5（II）層【第 14 図 l-m, n-o】の中央部分で焼土面 1 箇所、第 2 層面【第 14 図 l-m, n-o】で柵列（SR1）と焼土面が中央部分で 1 箇所、西端で 2 箇所重複して検出された。本節では第 5 層面の遺構を帶曲輪 A3b-1 期、第 2 層面の遺構を帶曲輪 A3b-2 期とする。焼土面に炭化物が多く含まれる。

なお、炭化物の AMS 年代測定結果は、1 期の焼土面は AD1510～1600 年・1610～1650 年、2 期面は AD1470～1640 年と出た。しかしながら、この結果から焼土面の時期を絞り込むのは難しい。

帶曲輪の機能 帶曲輪 A3b は谷部に面し、柵列も伴うので谷部方面を意識した防衛的機構と位置付けられる。また、炭化物や焼土の集中箇所は焚火や狼煙痕跡の可能性を考えられる。同じく帶曲輪 A3a にも認められるので、曲輪 A3 の南北に火を用いた施設が伴っていたことになる。

さらに、帶曲輪 A3b の東方向には曲輪 D 群の堀切が、正反対の西方向には、帶曲輪 A4 が位置する。各所ともに大きな高低差ではなく、堀切や帶曲輪の位

置関係から、帶曲輪A3bは曲輪A4と曲輪D群を往来する際の通路として機能していたと推測される。

つまり、曲輪A群の南側斜面には各曲輪間の連絡通路が設定され、さらに谷部方向に対する防御性も付加されていたと考えられる。

遺物 白磁碗(2)、青磁、青花、備前焼、土師器皿(592)、土錐(769・770)等が出土している。

堀切 A3 (第7・10・11図)

位置と構造 曲輪A3の東端に位置する。検出時点では完全に埋没していた。全長18.5m、上幅の最大幅は3.7m、深さは最大で2.75mを測る。

壁面の立ち上がりは70°の角度で開き、断面V字形を呈するので薺研堀といえる。ただし、底面は鋭角な掘り込みではなく、丸みを帯びている。

曲輪A2に沿って東側にやや湾曲する平面形であるが、南から12.2mの地点では約40°西側に屈曲する。また、底面のレベルは屈曲点までは一定で、それより北は緩く傾斜し、開口部付近は切り立つ。壁面は凹凸がない精美なつくりである。この屈曲点では、堀の角度は95°と広角になる。堀底からは茶臼(I151)が出土した。人為的に半分に打ち欠かれており、意図的に置かれた可能性が考えられる。

堀切肩部と曲輪A2との境付近は、狭い平坦面となり、SB1・2の柱穴が並ぶ。この平坦面は、曲輪面の拡張で堀切肩部を削平したためと考えられる。

なお、堀切の埋没面で構造検出を行ったが、柱穴埋土との差が認識しづらくて数基の検出に留まった。本来は多くの柱穴が存在したと考えられる。

一方、堀切の南端部は尾根を斬ち切らず土橋状に掘り残した構造となる。南側は市道による削平で不明であるが、恐らく上幅は2mを超えないであろう。土橋状部分の側面は約70°の傾斜角で堀底に至る。

この土橋状部分は、曲輪A2からの通路状遺構と接続することから通路としての機能が考えられる。また、敢えて掘り残した点は、帶曲輪A3b方面から水の手曲輪への進入を阻むためとも考えられる。

なお、曲輪A2とA1間は、通路状遺構の終点(A2-SRI-2付近)から曲輪斜面を介した連絡となる。

層序 繙の大さや堆積状況から大きく3つの層に区分される(A~C層)。いずれも破砕繙が多く含むが、A層は0.05~0.5m、B層は0.01~0.03m、C層は0.01m以下の細かい繙である。

このA層の上には2層(曲輪A3直上の堆積層)と表土が堆積している(第11図a-b~h-i)。

A層は大きな繙や細かい単位の繙の堆積である。B層は南端部から中央付近まで堆積し、多くの遺物が出土した。C層は細かい繙が均一に堆積する。東側方向からの堆積が主で、上面付近が水平方向に堆積する。C層はレンズ状堆積を呈するので自然堆積土と理解される。一方、A・B層については破碎繙の粒径が揃わずに混在した土が一気に堆積したような状況や土盛状の堆積層(第9~14層)の存在から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物 遺物はB・C層を中心とする武四都窯白磁皿(18・19・29)・小碗(36-37)や景德鎮窯白磁皿(47)、福建広東系白磁碗(7・10)、青磁碗(83-85・121・122)・瓶(201)・景德鎮窯青花碗、褐釉陶器天目碗、備前焼擂鉢(387)、土師器皿(563-590・608-614)、金属製の笄(859)、砥石、火打石や団塊(ノジユール)等が出土した。底面出土の茶臼(I151)もある。

白磁類は森田C・D・E類、青磁碗は上田B2類や上田D類、青花碗は小野C・E類があり、14世紀後半~16世紀後半の年代幅を示す。備前焼は15世紀代の特徴を示している。茶臼は15世紀後半~16世紀代に盛行した形態である。

(児玉・田中達)

堀切 A3 の時期 堀切C層出土の炭化物は、AMS年代でAD1400~AD1440年にあたる。このため、堀切は15世紀中葉頃には掘削されていたと推定される。堀切出土遺物の年代観と矛盾はない。

堀切が埋め戻された時期は、出土遺物の年代的下限を示す16世紀中~後半以降と推定される。

曲輪A3の変遷 曲輪面は、曲輪面の層位の関係(第12図b-c)から第5・7層を旧表土とすると、3時期(A~C期)の変遷が考えられる。

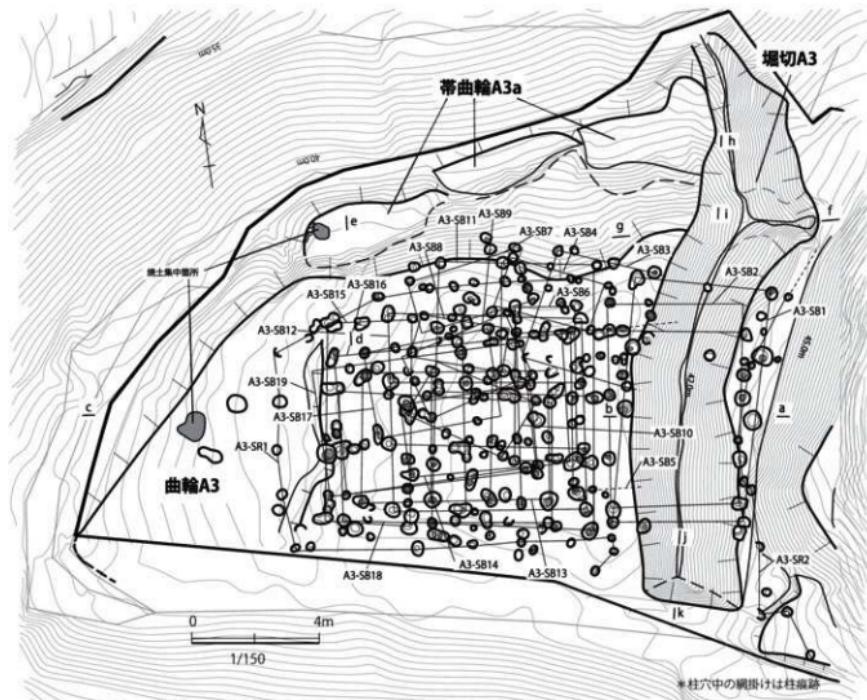
A期: 岩盤削り出しの曲輪面(第7層堆積以前)

B期: 曲輪A3bの傾斜面を盛土(第6層)して曲輪面を拡張(第5層堆積以前)

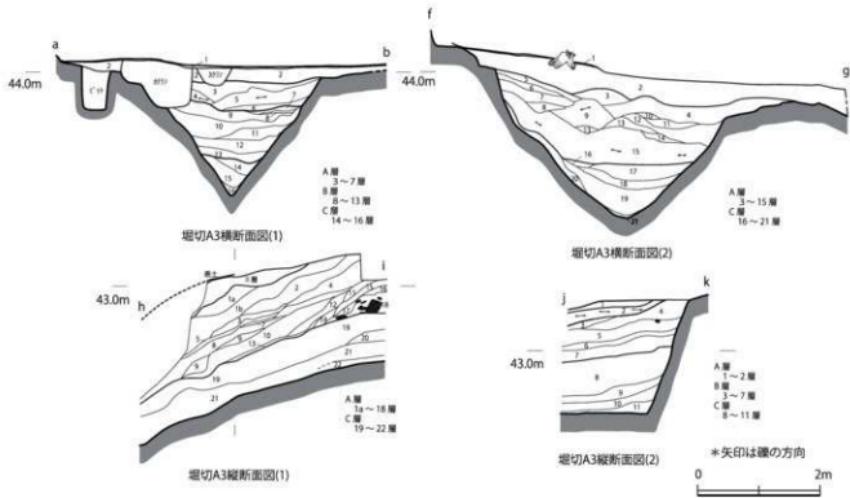
C期: 曲輪A3b面を再度盛土(第3~4層)して曲輪A3a面と一体化(曲輪A3aの拡張)

しかし、曲輪A3の各期と堀切A3や建物跡群との相互の時系列的関係は、詳らかにはできなかった。

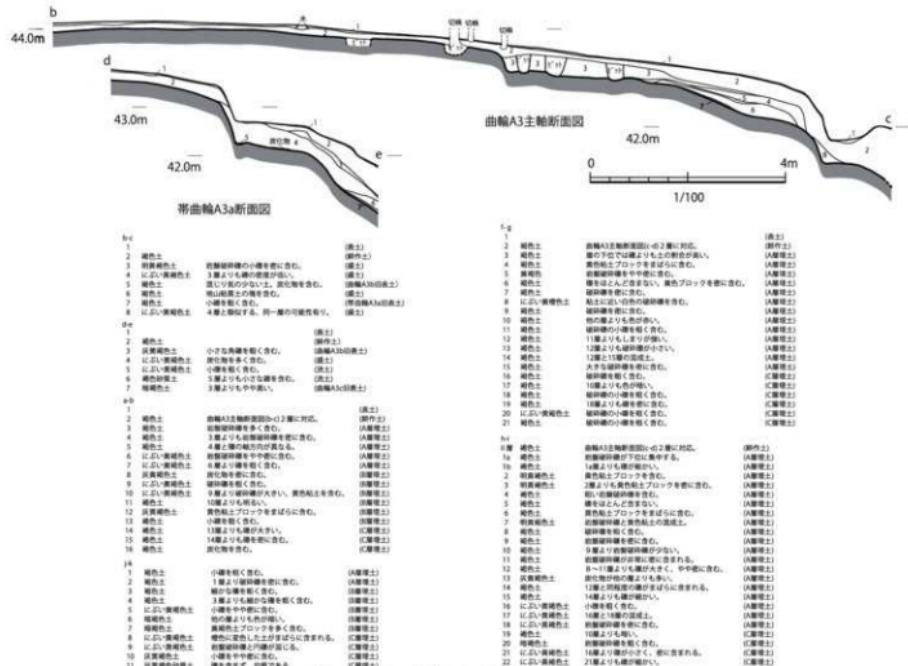
ただし、建物跡の①群に後出して堀切A3が掘削(15世紀中葉頃)されたこと、堀切の機能時には掘立柱建物跡の②・③群が存在していた可能性は指摘できる。



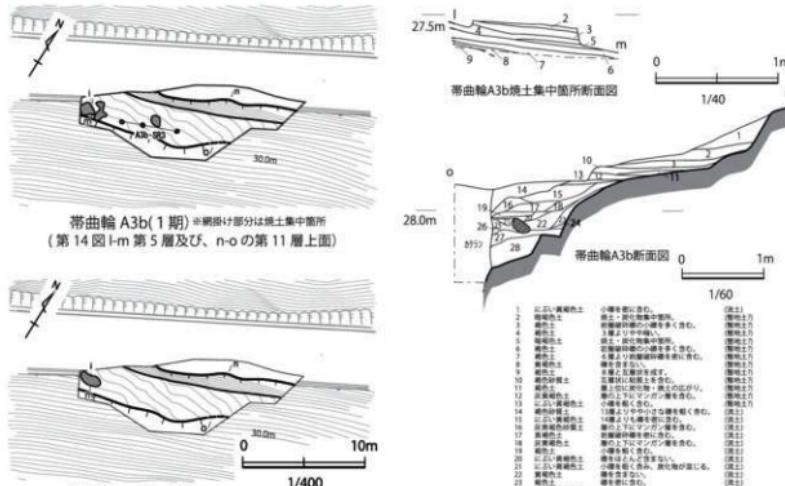
第10図 曲輪A3遺構配置図



第11図 曲輪A3土層断面図(1)

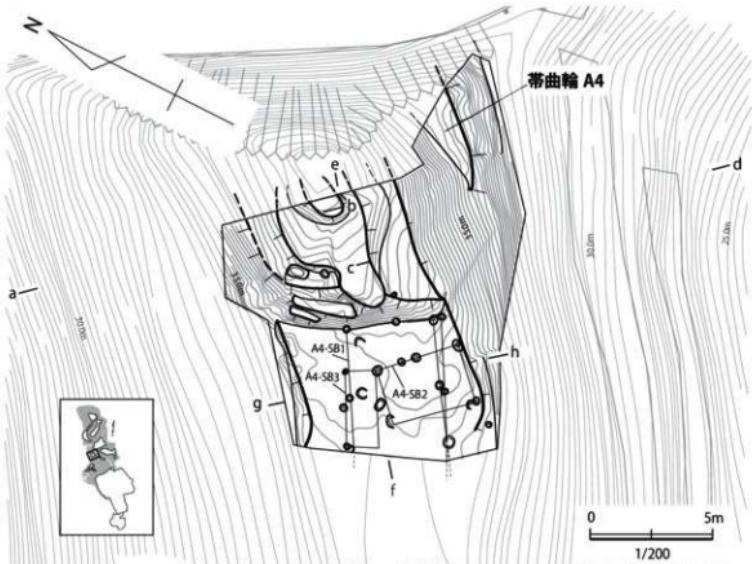


第12図 曲輪A3 土層断面図(2)

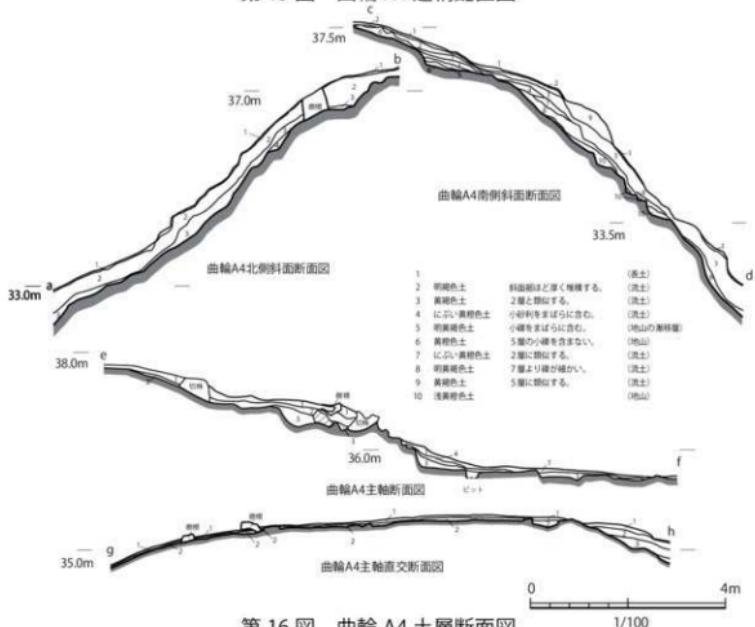


第13図 葉曲輪A3b 漆構配置図





第15図 曲輪A4遺構配置図



第16図 曲輪A4土層断面図

少なくとも、堀切 A3 の調査結果から、人為的に埋め戻され（16世紀中～後半以降）、堀切の東側肩部（曲輪 A2 側の斜面）をもカットするほどの土木作業量を伴った曲輪面の拡張が行われ、さらに SB1・2 等の建物跡の④・⑤群や SR1・2 が造られた過程が読み取れる。この曲輪面の拡張は、恐らく B 期または C 期の頃と考えられる。

（今塙屋、田中達）

曲輪 A4（第7・15・16図）

位置と構造 市道の南側に位置する。平坦面と土壁から成り立つ。平坦面の標高は約 35 m で、規模は長さ 5 m 以上、幅 7 m である。土壁部と平坦面の比高差は 3 m で、曲輪 A3 とは 9 m である。岩盤面を削り出した土壁部の背面（東側）は、市道により大きく改変されているが、周辺の地形から市道部分は堀切ないし豎堀が存在した可能性が高い。

北側は、水の手曲輪から続く谷部斜面に面し、約 40° の角度で谷底に向けて傾斜する。この谷底部分は、現況で幅 1 m 弱の平坦面が部分的に認められた。かつては平坦面を伝って行き来していたという。

南側斜面では、西側に向かい收束する平坦面（帶曲輪 A4）が位置する。南側斜面の中腹では帶曲輪状の平坦面が 2段確認されたが、これは植林等による後世の造成で形成されたものであった（第 16 図 c-d 3 層）。

層序 岩盤削り出しの平坦面と土壁上に薄く自然堆積層がのる（第 16 図）。

遺構 柱穴が 26 基検出された。そのうち、掘立柱建物跡 3 棟が復元された。

掘立柱建物跡 建物跡は曲輪中央部に位置する。この 3 棟は雁行形に重複するので、建て替えの関係と考えられる。

遺物 土壁より青磁碗（99-101）、平坦面より青磁碗（111-124・131）、褐釉陶器天目碗（306）、備前焼甕、瀬戸・美濃焼大皿（472）、肥前系陶器皿（512）、瓦質土器双耳釜（639-645）、土鍤（806）等が出土した。

帯曲輪 A4（第7・15・16図）

位置と構造 帯曲輪 A4 は市道による削平受けしており、規模等は不明である。遺物の出土はない。

なお、曲輪 D 群の堀切 D1 と帶曲輪 A3b とは、直線的な位置関係で標高もそれほどの高低差はないので、この 3 者は連続する可能性が高い。

層序 岩盤面削り出しの平坦面上に自然堆積層が 2 層堆積するのみである（第 16 図 e-f）。

団塊（ノジュール）について（第 17・18 図）

今回の塙見城跡の発掘調査においては、手の平に収まる大きさの団塊が計 167 点出土した。内訳は西側曲輪群 149 点、南側曲輪群 18 点である。団塊は調査地周辺の四万十層累群・日向層群に含まれるので、当初は自然遺物の混入であると考えられた。

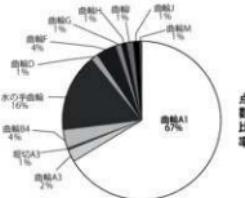
しかし、曲輪 A1 土壁周辺で団塊が集積している状況が検出されたので、意図的に曲輪面持ち込まれた可能性が高いと判断される。

各曲輪における出土個数比は第 17 図に、重量比は第 18 図に示した。出土個数比では曲輪 A1 と水の手曲輪に集中している。形態的には握り易い大きさと、適度な重量のものが多いことが特徴としてあげられる。

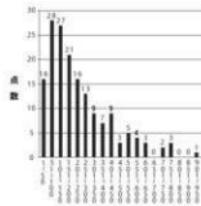
これらのことから、今回の調査で出土した団塊は、低所の曲輪や箇所からの侵入者に対して高所の曲輪を防衛するために使用・準備されたつぶて石と考えておきたい。

なお、平成 13 年度に日向市教育委員会が実施した塙見城主郭部分の調査では、主郭東側土壁の周辺に拳大程度の川原石を一箇所に集めた状況が確認されたという（『日向市史』2010）。調査者はこれらの見解として、防衛の際に眼下の敵に向けて投げるつぶて石とされている。

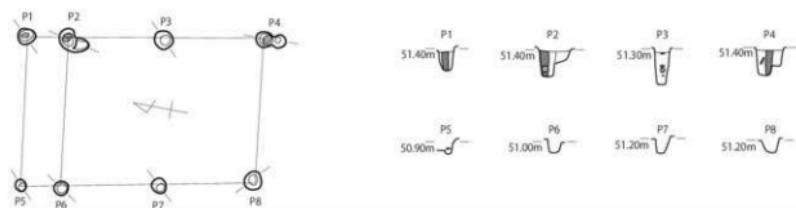
（田中達）



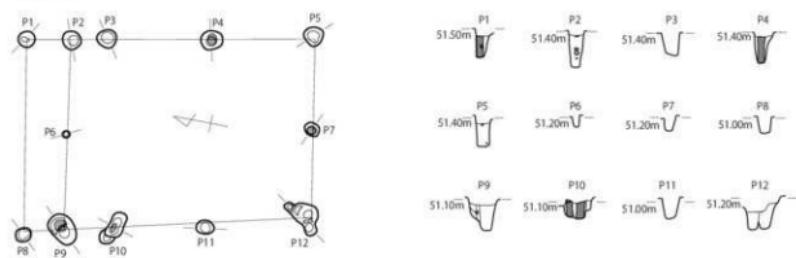
第 17 図 団塊（ノジュール）曲輪別出土個数比



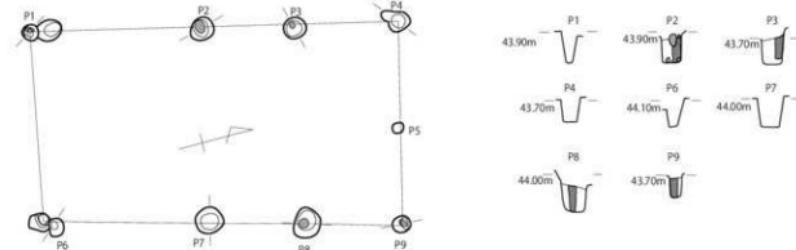
A2-SB1



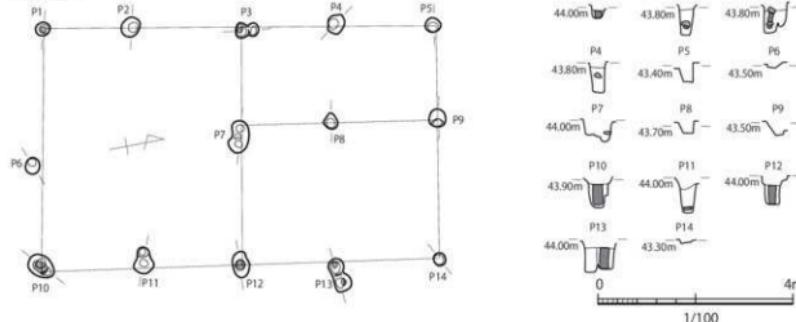
A2-SB2



A3-SB1

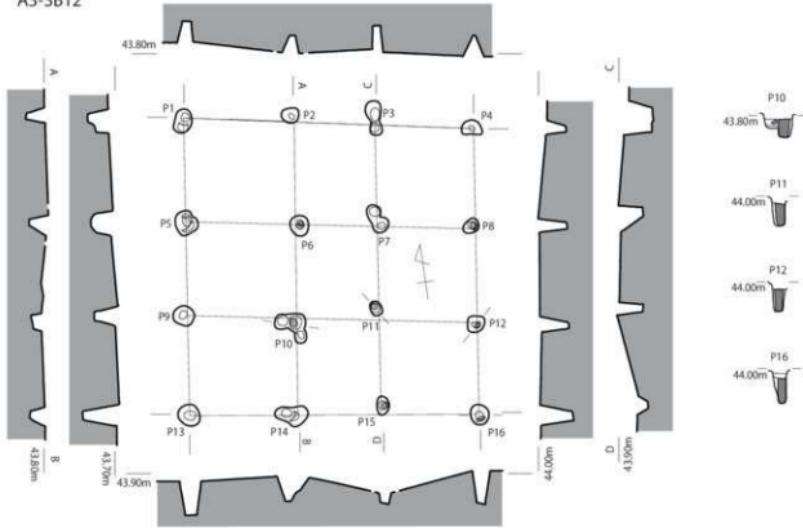


A3-SB11

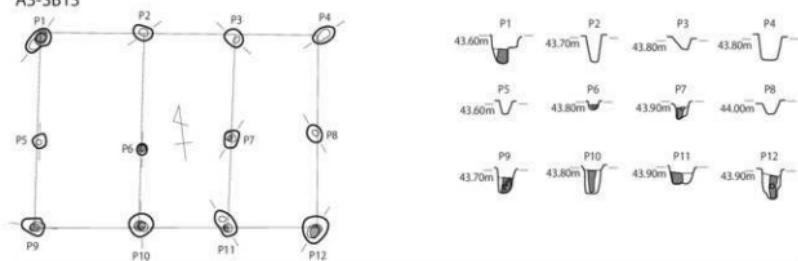


第19図 掘立柱建物跡実測図(1)

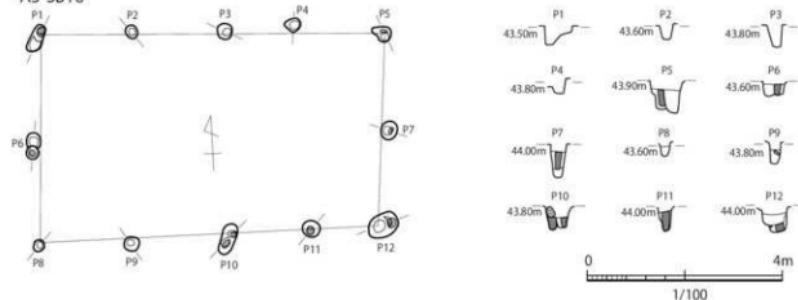
A3-SB12



A3-SB13

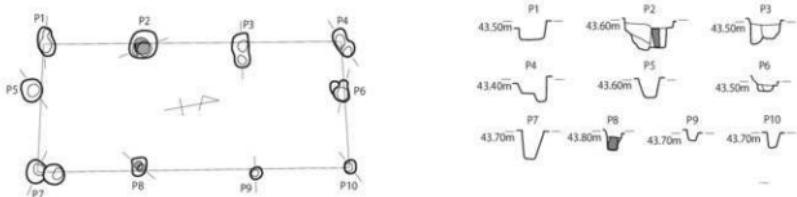


A3-SB16



第20図 掘立柱建物跡実測図(2)

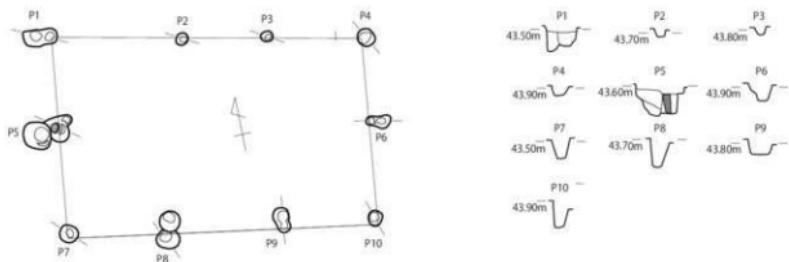
A3-SB15



A3-SB14



A3-SB18



0 4m
1/100

第21図 掘立柱建物跡実測図(3)

第3節 曲輪B群

概要 曲輪B群は主郭北西端の西側に南北に伸びる尾根上に位置する。主郭部とは東西に伸びる狭小な細尾根で接続するが、主郭部西側で堀切により切断されている。

調査区内では、平坦面が4箇所確認された。最高所から曲輪B1～B4とする。曲輪B1～B3は連続した平坦面だが、曲輪B4は曲輪B3との比高差が約12mあり、急斜面および堀切B4により隔てられている。この曲輪B4の西側には現況でも曲輪と考えられる平坦面が2段存在する。

曲輪B群においては、曲輪B1～B4の他、帶曲輪2箇所、土壘1箇所、堀切1条、豎堀1条、横堀1条、掘立柱建物跡26棟、柵列15条が検出された(第22図)。

なお、堀切B4、豎堀B4、横堀については、第5節において一括して報告を行う。

曲輪B1 (第22～24図)

位置と構造 曲輪B群の最高所に位置し、標高は62m、平坦面は東西に約15m、南北に約12mを測る隅丸三角形である。西側と北側は急峻な斜面で、北東隅のやや傾斜した平坦面から東側は調査区外の主郭部へと続く瘦せ尾根線となる。

また、平坦面南側は曲輪B2の平坦面向かって勾配の急な傾斜面となる。西側斜面下には堀切C1、豎堀C1a、C1bがある。

曲輪B1からは塩見小学校方面の東川流域の沖積地や曲輪C群を見下ろせる。また背後の険しい山地形や主郭部の背面を見上げる眺望がひろがる。

層位 平坦面及び斜面において表土直下に第2層・3層が堆積している(第23図a-b, c-d)。

遺構 柱穴が35基検出された。そのうち掘立柱建物跡1棟、柵列3条が復元された。

掘立柱建物跡 SB1は曲輪北東隅に位置し、南西角より板塀が続く。柱穴径は小さいので、櫓のような大型建物であった可能性は低いとみられる。

柵列 SR1は曲輪南西側、SR2は曲輪南東側にそれぞれ位置している。SR2はSB1の南に位置し、柵列東側は1段下がった平坦面となる。

遺物 出土は少量で、福建広東系白磁碗、青磁碗(128)、備前焼搗鉢、土師器皿(564-565)、土鍤(771-772)等が出土した。

128は14世紀中頃～15世紀初頭の年代観が与えられる。

曲輪B2 (第22～24・27図)

位置と構造 曲輪B1の南に位置し、標高は58mで、曲輪B1との比高差は約4mである。

平坦面は全長約27m、最大幅約6mと南北に細長く、東西を急峻な斜面に挟まれた馬の背状である。曲輪B2からの眺望は、前後を曲輪面や土壁で遮られて東西方向しか利かず、西側斜面下にある横堀やさらにその直下の谷地形を見下ろせる程度である。

層位 遺構面は岩盤を削りだした平坦面である。その上面に自然堆積層がある(第23図a-b, e-f)。

遺構 土壘、通路状遺構と柱穴77基が検出された。掘立柱建物跡4棟、柵列4条が復元された。

土壘 曲輪B2の南端部に位置する。岩盤面を削り残した円丘状の土壘で、曲輪B3との境にあたる。規模は長径10m、短径7.1m、高さ0.8mを測り、曲輪B3側から出入りする際の障壁となる。

掘立柱建物跡 平坦面北側にSB1・2が、中央部付近にSB3・4が位置する。それぞれ総柱建物と側柱建物が重複関係にあり、南北に2棟が並立する位置関係であった可能性が考えられる。

SB1・2は曲輪B1の南斜面裾際の位置に柱穴が穿たれており、東西方向は平坦面の落ち際までを身舎部分とする建物跡である。SB3・4も同様で四壁周囲の空間に余裕のない占地のあり方である。

柵列 SR1はSB1、SB2の西側を迂回するように位置する。SR2はSB1の東側にあり、SB2と切り合い関係にあるため、SB1に伴う柵列と考えられる。SR2柱穴から砥石(1203)が出土している。

通路状遺構 曲輪B群では2本の幅狭な平坦面が検出された。平坦面の一つは、曲輪B2の東側斜面から曲輪B3方向に抜ける、勾配の大きい登山道のような上り坂、もう1つは曲輪B3のSB1付近で分岐して、曲輪B2の土壘東側にあるSR4に沿ってSB4へと到る緩いスロープ状である。これら平坦面は水の手曲輪方面から曲輪B群へ、さらに曲輪B2-B3へと分岐する所以通路状遺構とみなした。

曲輪B2東側斜面側の通路状遺構は、分岐点からの長さ20m、幅0.8～1.4mで調査区外へと延伸する。通路面上に堆積する第5層中からは多くの炭化物が検出された(第23図g-h)。AMS年代測定では、AD1260～1300という結果が得られている。

出土遺物は、漳州窯青花皿(286)、褐釉陶器天碗(304)、土師器皿(555)、銭貨(809)等がある。

曲輪 B3 (第 22 ~ 25・27 ~ 29 図)

位置と構造 曲輪 B2 の南側に位置し、標高約 57 m で南端部にかけて緩く傾斜している。南側の水の手曲輪との比高差は 23 m、西側の曲輪 B4 との比高差は 12 m で、急峻な斜面で囲まれている。

標高は曲輪 A1 とほぼ同程度である。奥行き 17.3 m、幅約 13 m で曲輪 B 群最大の面積を誇る。曲輪 B2 とは明確な段差なく接続する。平坦面の中央付近から南側に僅かな段差があり 1 段低くなっている。

曲輪の南東隅には、南側に下る 2 段の平坦面（帯曲輪 B3a、B3b）がある。後述のように、この帯曲輪群は曲輪面の拡張に伴い埋め立てられていた。

層位 表土直下に第 2 層が堆積しているが、斜面にかけて堆積が厚くなる（第 23 図 a-b, i-j）。

南東側の縁辺部では表土下より岩盤破碎礫を伴う層が堆積しており、これを除去すると岩盤削り出しの平坦面が 2 箇所段状となる帯曲輪（帯曲輪 B3a、B3b）が検出された。なお、曲輪南東側斜面では平坦面といった遺構は確認されなかった。

遺構 通路状遺構および柱穴が 198 基検出された。そのうち掘立柱建物跡 19 棟、柵列 8 条が復元された。掘立柱建物跡の軒数は、曲輪 B 群において最多であり且つ集中している。（田中達）

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は曲輪 B3 の平坦面落ち際を囲繞する柵列の内部に密集・混在した状態で建ち並ぶ。広大とはいえない平坦面に集中して建てられるあり方は、曲輪 A3 と同様である。水の手曲輪や西側谷部方向を意識したものと理解される。

身舎面積は、SB4 (28m²)、SB14 (20m²) が大きい部類である。以下、15m²が 4 棟、10 ~ 13m² は 7 棟と続き、10m²以下の小型建物は 5 棟を数える。

これらの掘立柱建物跡の建物主軸方向に着目すると、東西方向と南北方向の 2 者あるが、さらに座標北に対する振れ方から 5 グループに分類された。

①群 (SB5・15・19)、②群 (SB3・4・13・17)、③群 (SB1・2・9・18)、④群 (SB6・7・8・10)、⑤群 (SB11・12・14・16) である。各群の前後関係は、柱穴の切り合い関係に乏しいため不明である。建物の配置は、建物主軸が平行もしくは互いに直交する建物が 2 棟一対となって配置されていたと考えられる。

なお、帯曲輪 B3a・b との柱穴の切り合い関係から、少なくとも SB5 ~ 7 は帯曲輪が埋め立てられた後に建てられた掘立柱建物跡である。（川俣）

柵列 柵列は曲輪 B2 の土壁を起・終点にして曲輪 B3 の縁辺をぐるりと廻るもの、曲輪 B3 東縁に沿う直線的なものに二分別される。帯曲輪 B3a・b にあたる柱穴は、調査中のミスにより見逃してしまった。本来は、柵列は帯曲輪を埋め立てたあと曲輪面を囲繞するように設けられたものと考えられる。

通路状遺構 曲輪 B3 の東縁、特に SB1 から SB5 付近にかけては幅 1 m 弱の平坦面が検出された。この平坦面は曲輪 B2 から続く通路状遺構とみなせる。

なお、SR8 は、通路状遺構を塞ぐように平坦面の両端に柱穴が配置されるので、門跡の可能性もある。

遺物 SB4 の柱穴から青磁碗 (189)、SB7 は青花碗や褐釉陶器四豆壺、SB9 で白磁碗と青花碗と鉄製紡錘車 (902)、SB13 で福建広東系白磁皿 (69)、SR1 の柱穴より青磁皿 (159)、青花碗、SR2 は福建広東系白磁皿 (54) や青磁碗等が出土した。15 世紀後半～16 世紀後半の年代幅に収まる遺物群である。

曲輪面での出土量は曲輪 B 群中最多である。貿易陶磁器類や国産陶器類とともに、平瓦 (696)、土鍤 (773 ~ 782)、錢貨 (815・816・821・824 ~ 826・832)、鉄製鍋 (906) や砥石 (1173) の出土が注目される。年代は 14 世紀後半～16 世紀代と幅広いが、15 世紀後半以降の遺物が中心である。

帶曲輪 B3 (第 22 ~ 24 図)

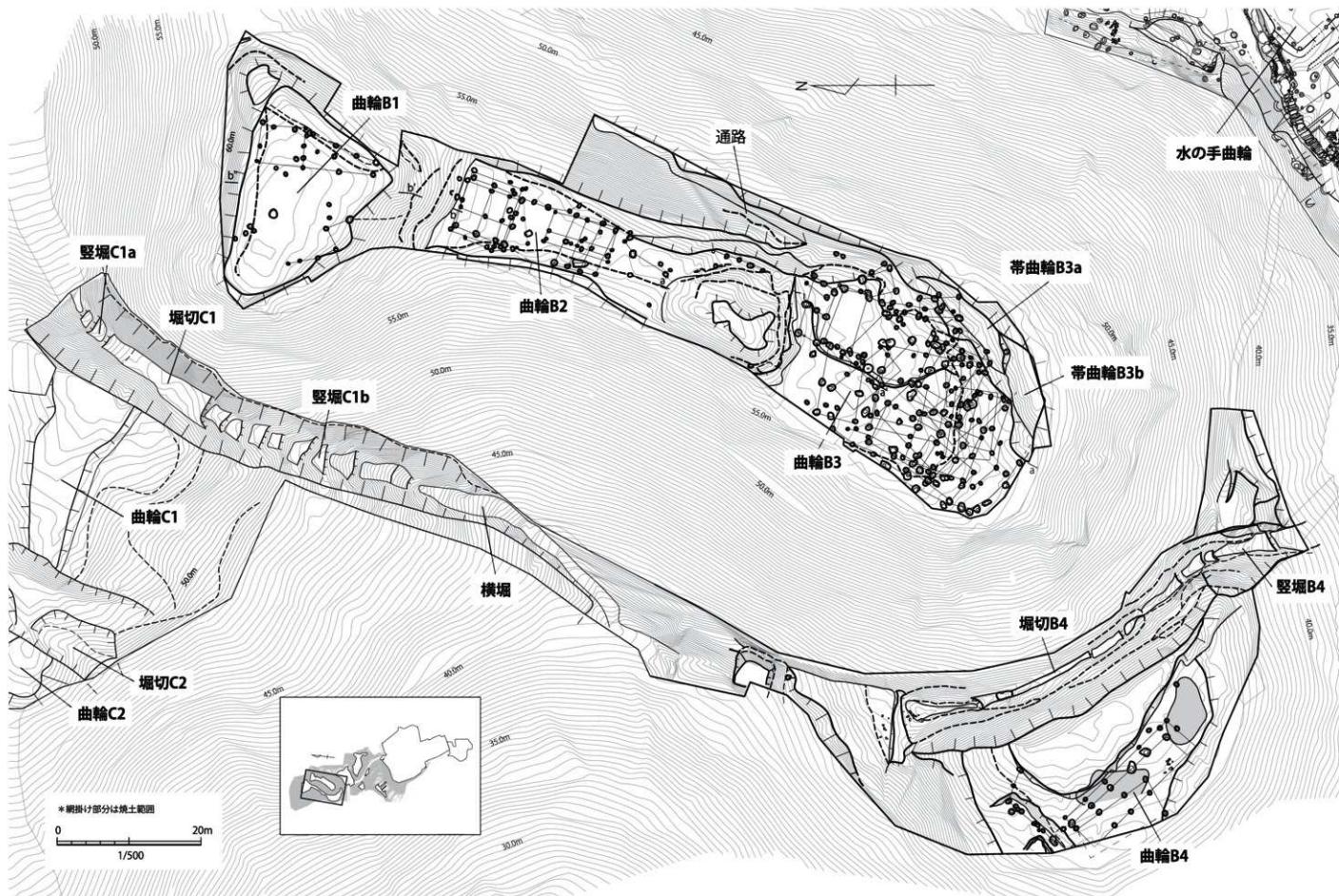
位置と構造 曲輪 B3 の南東隅に位置する帶曲輪である。底面は 2 段で西側が一段低い。この帶曲輪の東側を帯曲輪 B3a、西側を帯曲輪 B3b とする。

帶曲輪 B3a の規模は幅約 9 m、奥行き約 2 m である。曲輪 B3 との比高差は、1.3 m で南にやや傾斜する。帶曲輪 B3b は幅約 8 m、奥行き約 2 m を測り、帶曲輪 B3a との比高差は 0.6 ~ 0.7 m である。

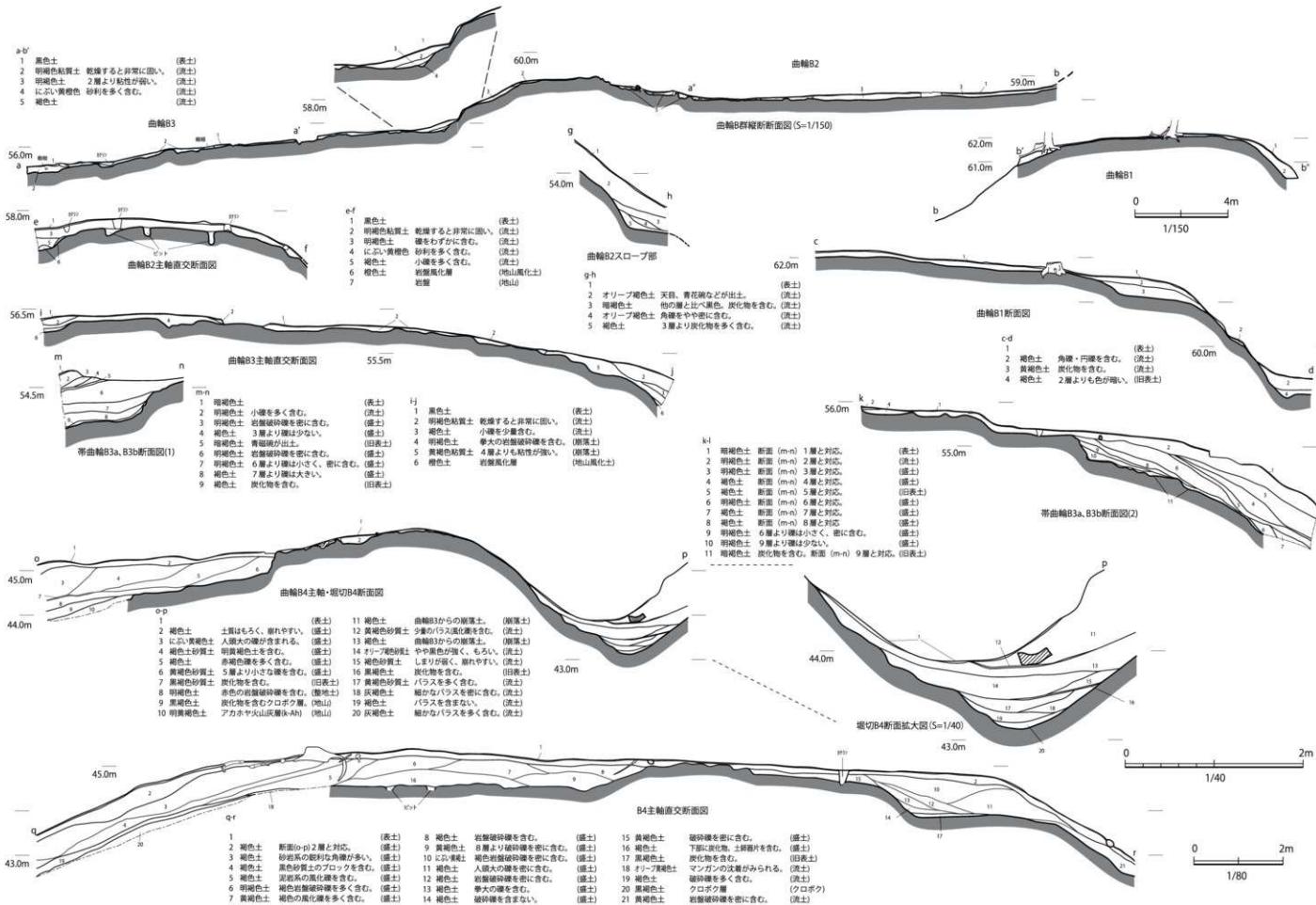
帶曲輪 B3a、B3b とともに、柵列や焼土面の広がりといった付属施設は確認されなかった。

層位 帶曲輪の底面直上と堆積層の中位付近に褐色ないし暗褐色土の腐植土層が堆積する（第 23 図 k-l 第 5・11 層、m-n 5・9 層）。この腐食土層は旧表土と考えられ、その 2 層間は岩盤破碎礫主体の砂礫層が堆積する（第 23 図 k-l 6~11 層、m-n 6~8 層）。

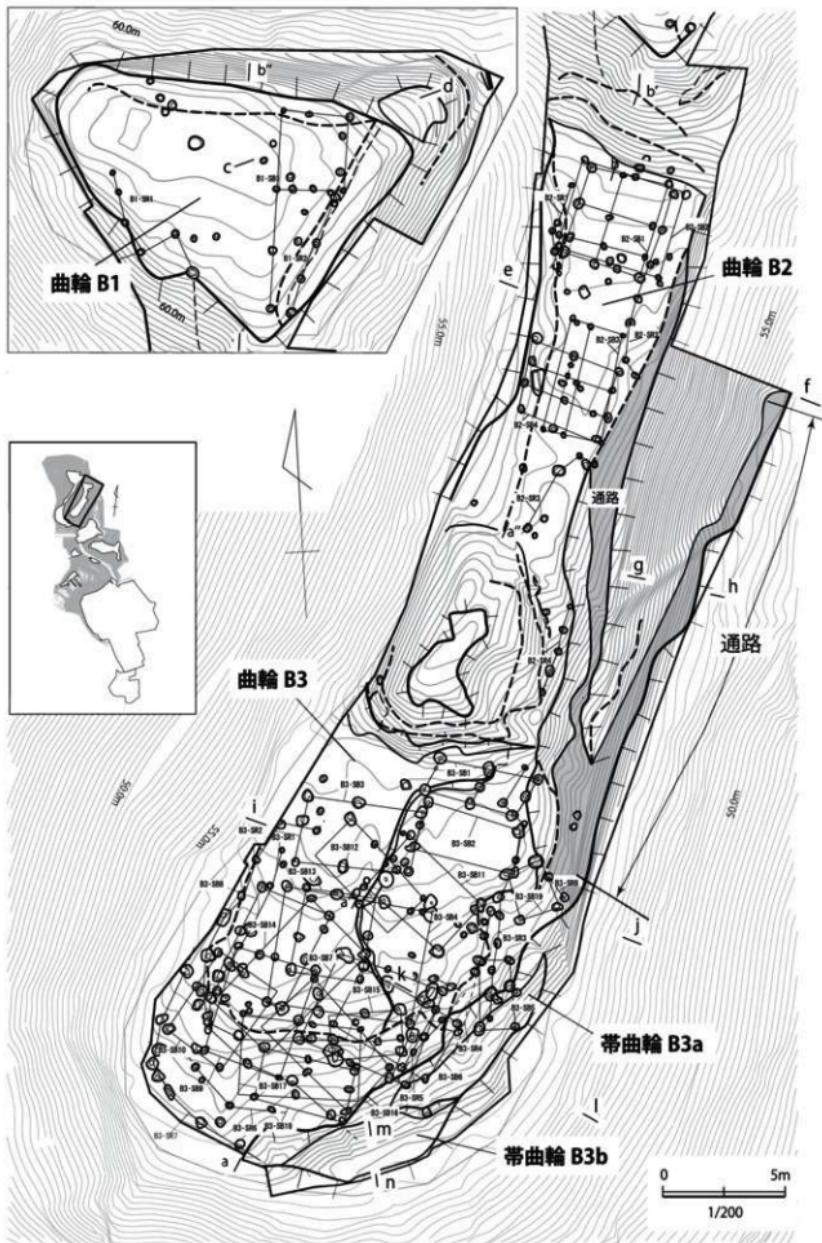
この砂礫層の上面は曲輪 B3 の遺構面に連なり、掘立柱建物跡 (B3-SB5 ~ 7 など) の柱穴も検出された。砂礫層は曲輪 B3 の拡張によって埋戻された盛土であったと判断される。



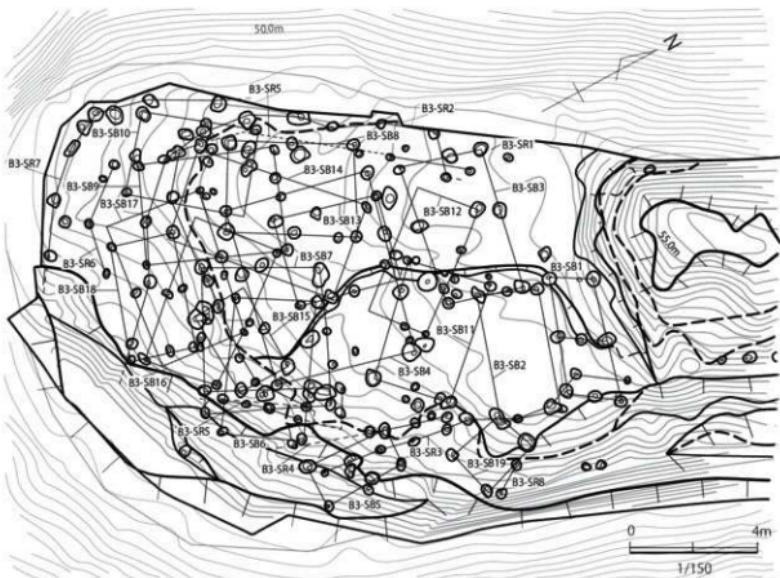
第22図 曲輪B群遺構配置図



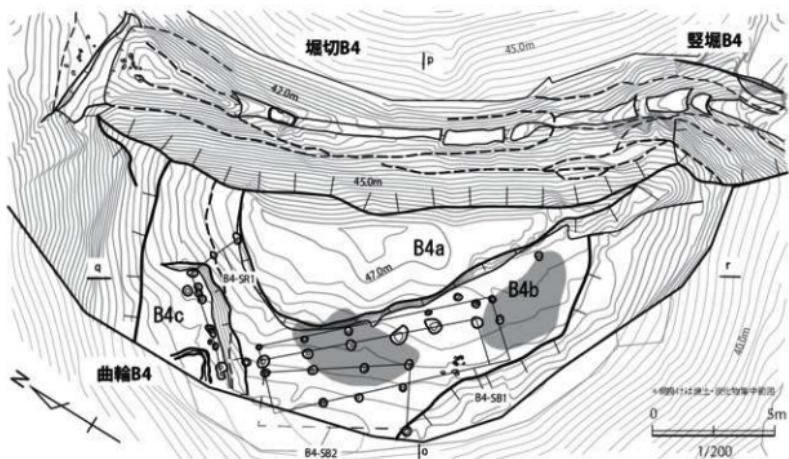
第23図 曲輪B群土層断面図



第24図 曲輪B1～B3 遺構配置図

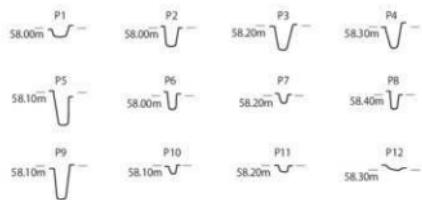
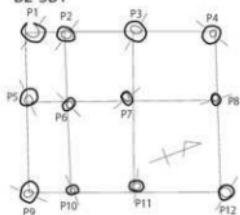


第25図 曲輪B3 遺構配置図

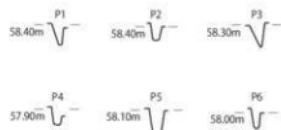
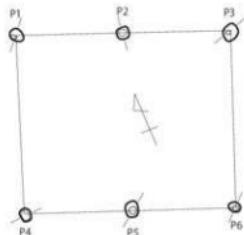


第26図 曲輪B4 遺構配置図

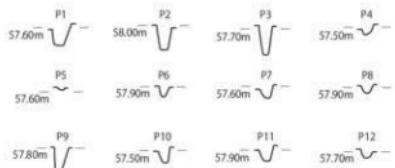
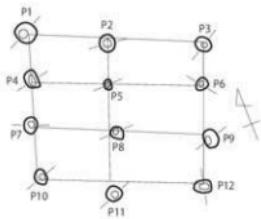
B2-SB1



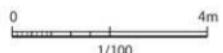
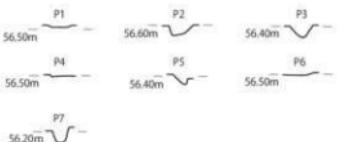
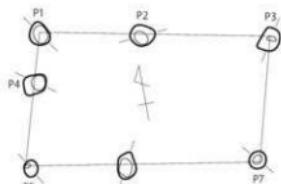
B2-SB2



B2 - SB4

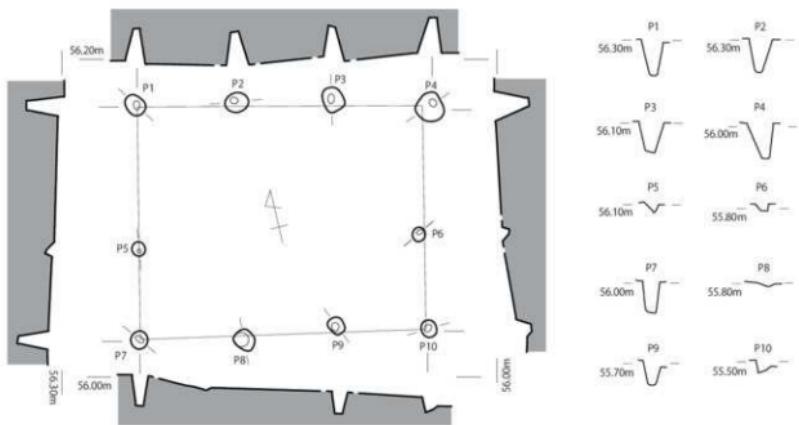


B3 - SB3



第 27 図 掘立柱建物跡実測図 (4)

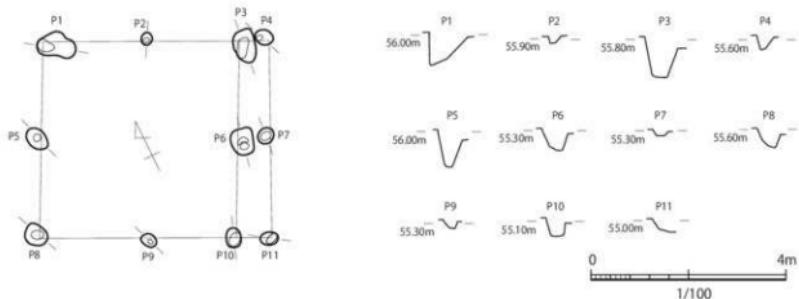
B3-SB4



B3-SB6

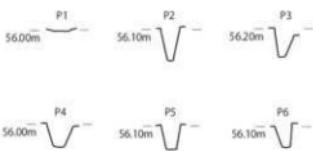
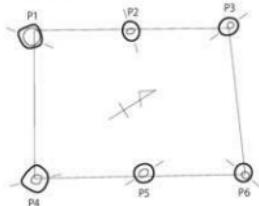


B3-SB7

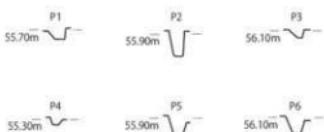
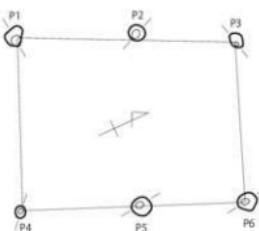


第28図 掘立柱建物跡実測図(5)

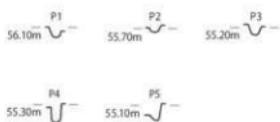
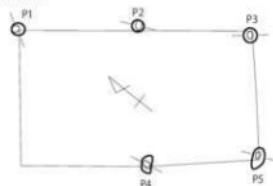
B3-SB8



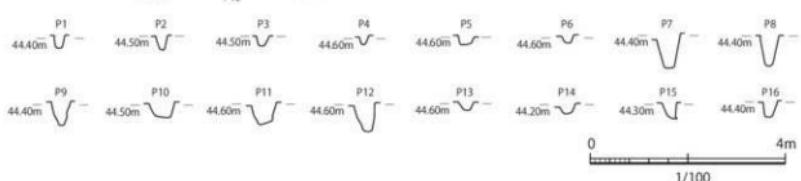
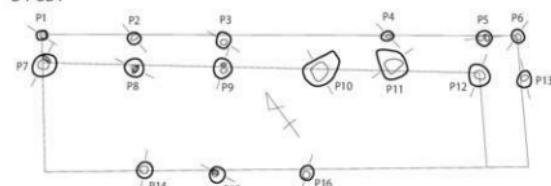
B3-SB9



B3-SB15



B4-SB1



第29図 掘立柱建物跡実測図(6)

遺物 帯曲輪B3bの第5層（旧表上）の上面において青磁碗（112）、土師器皿（587・615）が出土した（第23図m-n）。112は上田C2類に相当し、14世紀後半～15世紀前半の年代に比定される。

曲輪の拡張時期 帯曲輪B3が埋め戻され曲輪B3が拡張されたのは、遺物の年代から15世紀前半以降となる。なお、帯曲輪と建物主軸が揃う掘立柱建物跡は、⑤群のみであり、帯曲輪との同時性を想定できる。（田中達）

曲輪B4（第22・23・26・29図）

位置と構造 堀切B4の西側に位置する。曲輪B4と曲輪B3との比高差は12mと高低差が著しく、造成時はかなりの土木量であったと推察される。

曲輪B4は調査時点では平面半月形の平坦地であったが、その西側下面から2段の平坦面が検出された。これらの平坦面を高所から曲輪B4a・B4b・B4cと区分する。

曲輪B4aは堀切B4の西側に面し、長さ16.2m、最大幅9.2mの平面直角三角形状である。フラットな平坦面ではなく、丸く盛り上がる。

曲輪B4bは曲輪B4aを取り巻くように南北18.8m、東西9.2mに渡り平坦面が西側へと広がる。

曲輪B4cは曲輪B4北西部の最下段にある狭隘な平坦面である。これは、南西部に連続する曲輪へと接続する施設の可能性があるが、詳細は不明である。

層位 曲輪の底面は基本的に岩盤を削り出して形成する。曲輪B4bでは、中央付近から西側では鬼界アカホヤ火山灰層（第10層）と腐食土層（第9層）の上に明褐色土（第7層）を整地層として平坦面を形成する（第23図o-p）。

さらに、曲輪B4b、B4cでは底面直上に岩盤破砕層などを密に含む層（第23図o-p第3～6層、qr第3～17層）が厚く堆積していた。堆積土は曲輪B4b・c全体を覆い、曲輪B4aの高さに抑えられて平坦面となる。この堆積土は盛土と考えられる。

岩盤破砕層主体の盛土によって曲輪B4b・cが埋め戻されて曲輪B4aと一緒に化した平坦面に造成される時期は、後述するAMS年代測定から少なくとも14世紀後半よりも後出すると推定される。

遺構 曲輪B4b・B4cの底面で柱穴が37基検出され、掘立柱建物跡2棟、柵列1条が復元された。

しかし、曲輪B4b・B4cに盛土した後の平坦面からは、柱穴等の遺構は検出されなかった。

掘立柱建物跡 SB1は東・南側に庇を持つ建物である。その南東隅の柱穴付近では土師器皿（599）に伴って銭貨12枚が数枚ずつ重なった状態（839～842）、で出土した。銭貨の種類は、開元・元祐・政和・至元通寶等である。SB2とSB1は切り合い関係であるが、柱間隔や主軸方位の相異から建て替えとみられる。SB1・2の身舎内（第7層上面）で、炭化物や焼土の広がりが確認された。炭化物のAMS年代測定の結果では、AD1290～1370の年代が得られている。SB2の柱穴内より土師器皿（597）が出土している。

柵列 SR1は曲輪B4北西部に位置し、南西から北東へ伸びる。北端から東へ屈曲しB4a裾部へと至るが、曲輪間移動のための動線を塞ぐ位置に相当するため門跡の可能性も考えられる。SR1の柱穴内より土師器皿（583）が出土している。

遺物 上記以外にも、曲輪面を覆う表土層（第2層）から銭貨（810）、曲輪B4b・cを埋める盛土層（第4層）から景德鎮窯白磁小杯（67）や青磁皿（165）等が出土した。曲輪の盛土層（第23図o-p第3～6層、qr第3～17層）の出土遺物として、福建広東系白磁皿（68）、景德鎮窯青花碗、土師器皿（570・598）、鉄製鎌（900）や刀子（904）、団塊6個等がある。

（小船井、田中達）

第4節 曲輪C群

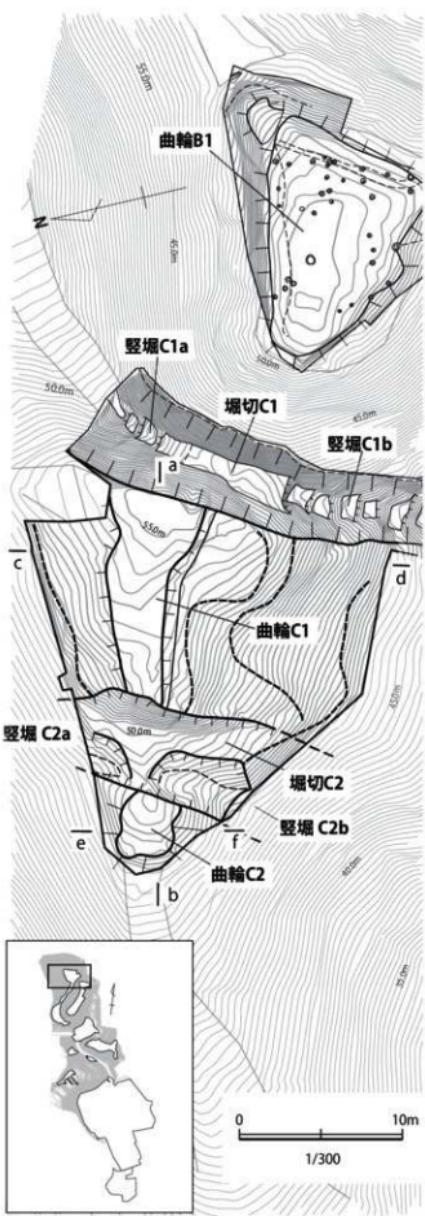
概要 曲輪C群は、曲輪B1から西に延びる尾根上に位置する。曲輪2箇所、堀切2条、柵列4条が検出された。曲輪面は最高所より曲輪C1～C2とした。曲輪C群の曲輪面は、岩盤を削り出して平坦面とするが、他の曲輪に比べて起伏に富み、造作は難である。また、掘立柱建物跡や柵列の存在は確認されず、遺物の出土も僅少であった点は、他の曲輪群とは異なる様相である。

なお、堀切C1、堅堀C1a、C1bについて「第5節堀切群」にて報告を行う。

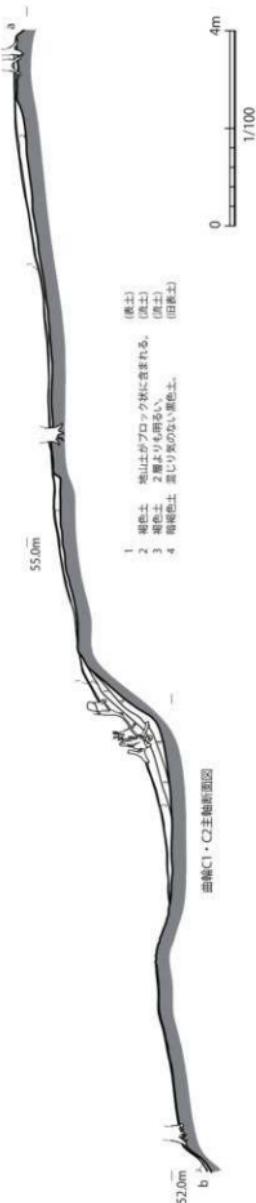
曲輪C1（第30・31・32図）

位置と構造 曲輪C1は、堀切C1西側に位置し、頂部の標高は約55mで、曲輪の全長は約13m、最大幅約5mを測る。曲輪B1との比高差は約7mで落差があり、造成にあたっては相当な土木量であったと推察される。

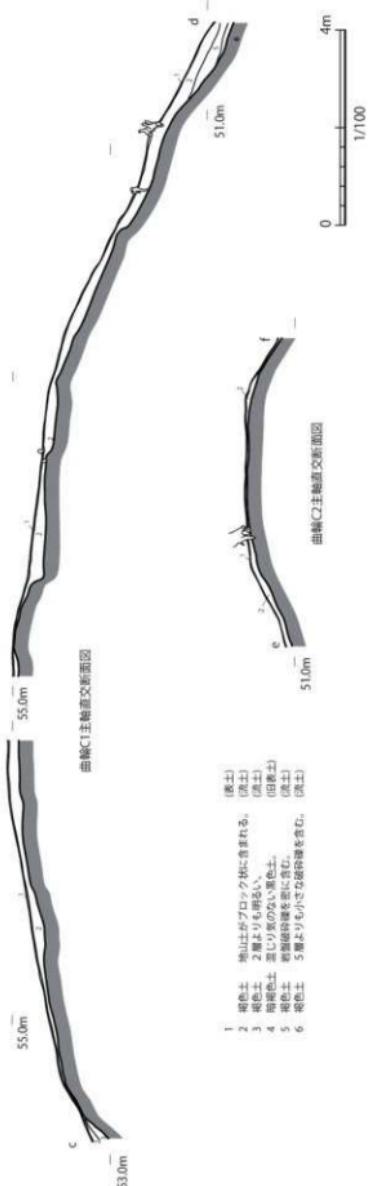
北側斜面は谷に面した急斜面で、南側斜面は平坦



第30図 曲輪C群遺構分布図



第31図 曲輪C群土層断面図(1)



第32図 曲輪C群土層断面図(2)

面より緩やかに傾斜して中腹付近より急斜面となる。これら北側・南側の急斜面は、一見切岸状を呈するが、斜面の崩落によるものかもしれない。

なお、柱穴等は検出されず、遺物もなかった。

層位 表土および流入土が全体に薄く平坦面直上に堆積し、斜面部分も流水堆積のみで、盛土等は確認されなかった(第31図a-b、第32図c-d)。

曲輪C2 (第30-31・32図)

位置と構造 堀切C2西側に位置し、標高約52m、曲輪C1との比高差は3mである。

曲輪面の規模は東西約4m、南北約4mを測る。曲輪面には面積が狭く、柱穴や遺物は検出されなかった。曲輪面の南北は急斜面に囲まれる。曲輪の西側は細尾根が続く地形となる。

層位 曲輪C1と同様で表土や流入土が薄く堆積するのみである(第31図a-b、第32図e-f)。

堀切C2 (第30-31図)

位置と構造 曲輪C1、C2を分断する堀切である。曲輪C2側の肩部には豊堀C2a-C2bが位置する。

堀切は調査の都合上、全長のうち約10m分のみを精査した。上端幅は約6.5m、底面幅は4mを測る。堀切の断面は浅い皿状で、曲輪C1側の壁面高は2mだが、曲輪C2側は0.3mである。立ち上がりの角度も曲輪C1側が急である。

堀切C2は曲輪C群にある薬研堀や、後述の堀群の箱堀(第5節参照)とは形状や深さが異なる。

層位 曲輪C1側からの流入土(第2~4層)が堆積していた(第31図a-b)。

遺物 堆積土より砥石(I201)が出土している。

豊堀C2a/C2b (第30図)

位置と構造 堀切C2の西側肩部に寄った位置にある2条の豊堀である。北側を豊堀C2a、南側を豊堀C2bとする。豊堀は、堀切C2の西側の底面をさらに掘り込む構造である。ただし、豊堀C2と堀切C2の収束部分の関係は明らかにしえていない。全長は、調査の都合上不明であるが、南北の斜面を等高線に直交する方向に延伸するようである。頂部の辺は、どちらも1.4mの長さを測る。なお、遺物は出土していない。

(児玉・田中達)

第5節 堀群

概要 曲輪B1～B3と曲輪B4・曲輪C群との間には、堀切・豎堀・横堀といった6箇所の堀が列状に連結して尾根筋や斜面部を南北に貫く（第22図 豊堀C1a、堀切C1、豎堀C1b、横堀、堀切B4、豎堀B4）。

豎堀C1a・bは堀切C1の両端に、豎堀B4は堀切B4の南側に接続し、横堀は豎堀C1bと堀切B4を連結させる構造である。

6箇所の堀は、場所ごとに異なる名称や機能を持つが、互いに連結して堀の集合体をなしているので、本節では「堀群」として報告する（第33図）。

豎堀 C1a（第22・33・34図）

位置と構造 豊堀C1aは曲輪C1北東側にあり、南端は堀切C1に接続する。調査範囲は接続部分のみに限られた。岩盤を掘削して形成される豎堀である。

豎堀の規模は、全長約4m以上、上幅約6m、下幅1.5mで、壁面の角度は40°で開く箱築研磨状の豎堀である。底面には、少なくとも2段以上のステップがある。堀切C1方面へ出入り可能にする階段構造であり、堀切C1と一体化した構造である。

層位 曲輪B1側からの流入土が堆積していた。第3層部壁面は段状で、第3層下面は水平となる。

のことから、第4層堆積後に箱築研磨状に再掘削された可能性を指摘できる（第34図a-b）。

豎堀 C1b（第22・33・34図）

位置と構造 豊堀C1bは堀切C1の南側に位置し、南端は横堀に接続する箱築状の空堀である。全長は23m、上幅約4m、下幅2m、曲輪C1側の深さは2mを測る。東側肩部の検出は、斜面上の堆積土が崩落する危険性があるため部分的に留めた。

豎堀の底面には、8段のステップの階段がある。豎堀C1bの横堀側からの仰角は約50°で、かなりの急傾斜なので階段が設けられたであろう。

豎堀C1bは、堀切C1と一体化して北側曲輪群や横堀方向からの往来が可能となる構造である。

豎堀の断面形は逆台形で、北側堀底は狭く、南側堀底は広い。西側は岩盤を削り残した土壠となる（第34図e-f）。

層位 東側斜面からの流入土の堆積が主で、第6層では岩盤破碎繰を多く含む（第34図g-h）。

遺物 永楽／宣徳通寶の銭貨(818-820)等がある。

堀切 C1（第22・30・33・34図）

位置と構造 曲輪C1の東側に位置する。南北端は豎堀C1a、C1bに接続する。全長約8m、上幅約5m、下幅1.5m、曲輪C1側の深さは1.25mを測る。

断面形は、岩盤面を掘り込んだ逆台形で、壁面の立ち上がりの角度は50°の箱堀状である。

層位 自然堆積層である（第34図c-d, e-f）。

遺物 堆積土中より備前焼甕片が出土した。

横堀（第22・33～35図）

位置と構造 堀群の中央部に位置し、曲輪B2の西側斜面裾を横断する。横堀両端は、豎堀C1bの最下段のステップと堀切B4の土橋状部分となる。

規模は、全長約30m、上幅は約3m、下幅は1m弱である。上幅は南に下ると2m程度と狭くなる。断面形は逆台形である。横堀の中央付近では、西側の谷部に向けて緩くカーブする（第33図j付近）。この箇所は谷部側への分岐点であろう。深さは1mと浅めである。この箇所から、豎堀C1bに向けた仰角は40°～45°で、堀底は北進するにつれ急傾斜となる。

横堀の最深部は、豎堀状の方形掘込み部となり（第33図k-l付近）、堀底は一旦遮断される。方形掘込み部の東辺は長さ2.5mで幅2mの平坦面がつく。

層位 基本的には3cm未満の破碎繰と黄褐色砂質土が互層状に堆積していた。第28・29図の上面を結ぶラインは逆台形状を呈するので再掘削されたものと考えられる（第34図j）。

横堀肩部は、主に岩盤掘削で形成されるが、谷部頂部に面する横堀西側肩部は盛土で形成される（第34図i-j）。旧表土（第43層）上に斜め方向に盛土（第33～42層）して、立ち上がりが緩やかな壁面とする。

遺物 青磁碗(109)・盤(190)・香炉(195)・景德鎮・津州窯青花(241-246・252-296)・褐釉陶器壺(329)・備前焼播鉢(351-369・380)・甕(426)・瀬戸・美濃焼四耳壺(476)・土師器坏皿(561-574～576-591-593)・土師質播鉢(653)等が出土した。

下層の出土遺物は第29～32層出土の備前焼播鉢(351)をはじめ14世紀後半～15世紀前半の年代を示すものが多い。中層（第28・29層よりも上位）は241や251のように16世紀中～後半の遺物が多く出土した。

堀切 B4 (第 22・33・35 図)

位置と構造 曲輪 B4 の東側にある。全長 25 m、最大幅 4 m、深さは曲輪 B4 側で 2.75 m を測る。

横断面形は V 字形で、壁面の立ち上がりの角度は 35° の薬研堀である。南端部付近は底面が広くなる。縱断面形は、堀切中央付近が最高所の下弦形である。

堀切の北端は、地山（岩盤）を土橋状に掘り残す。この土橋南側では、堀底が平面撥形に開口した空間となる。降雨による貯水が可能な構造である。この部分では地輪が 1 点出土している（第 54 表）。

層位 基本的には流入土による自然堆積層である。黄褐色～褐色の上層（第 2～7 層）は砂質土に 0.5～3 cm 程度の破碎礫が多く混じる。中層（第 8～10 層）は炭化物を局所的に含む。暗褐色の下層（第 11～14 層）は微細な破碎礫が主体である。

なお、第 8 層の上面ラインをたどると、堀切東側の壁面に段がある。箱堀状に再掘削された可能性がある（第 35 図 q-r）。

遺物 邵武四都窯白磁皿（24）、福建・廣東窯系白磁皿（74）、青磁碗・皿（84・103・116・157・168）、景德鎮窯青花碗（213・216）、褐釉陶器四耳壺（314）、瓦（695）等が出土した。なお、整理作業における注記ミスで豎堀 B4 出土遺物と混在してしまった。

曲輪 B4a との関係 曲輪 B4a と堀切 B4 の位置関係は、曲輪 A1 と堀切 A1 の関係に類似し、その曲輪 B4a の縱横断面形は丸く盛り上がっていた。

曲輪 B4a は本来、岩盤削り出し土壠であったが、曲輪 B4b-c を埋め戻して新たな平坦面が造成される際に削平されたものと考えられる（第 26・23 図 o-p）。

豎堀 B4 (第 22・33・35 図)

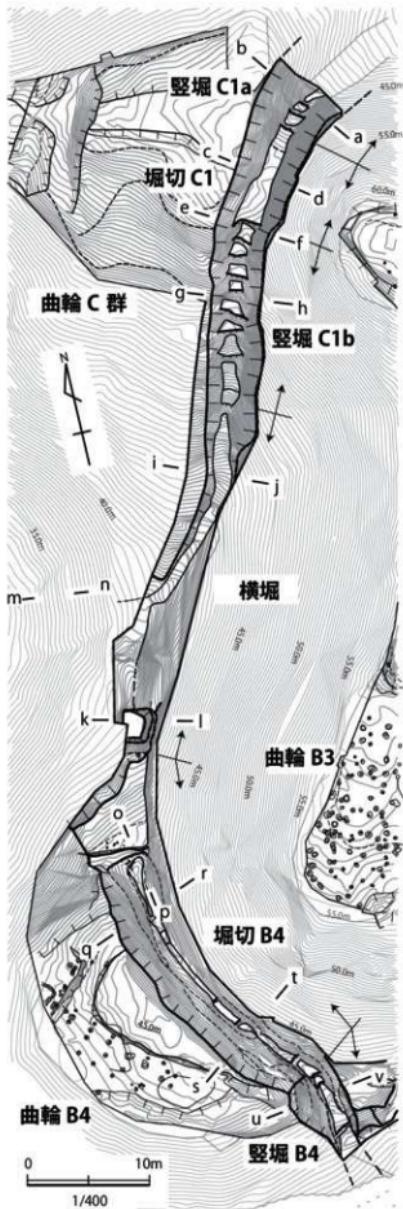
位置と構造 堀切 B4 の南側に接続する。現存長は 8 m、最大幅 3 m、深さ 1.5 m である。断面は逆台形で壁面立ち上がりの角度は 35° の箱堀を呈す。南端に向けては、次第に掘り込みが浅くなる。

堀底は、岩盤を掘削したやや幅広の溝状で、堀切 B4 との接続部分は階段状となる。

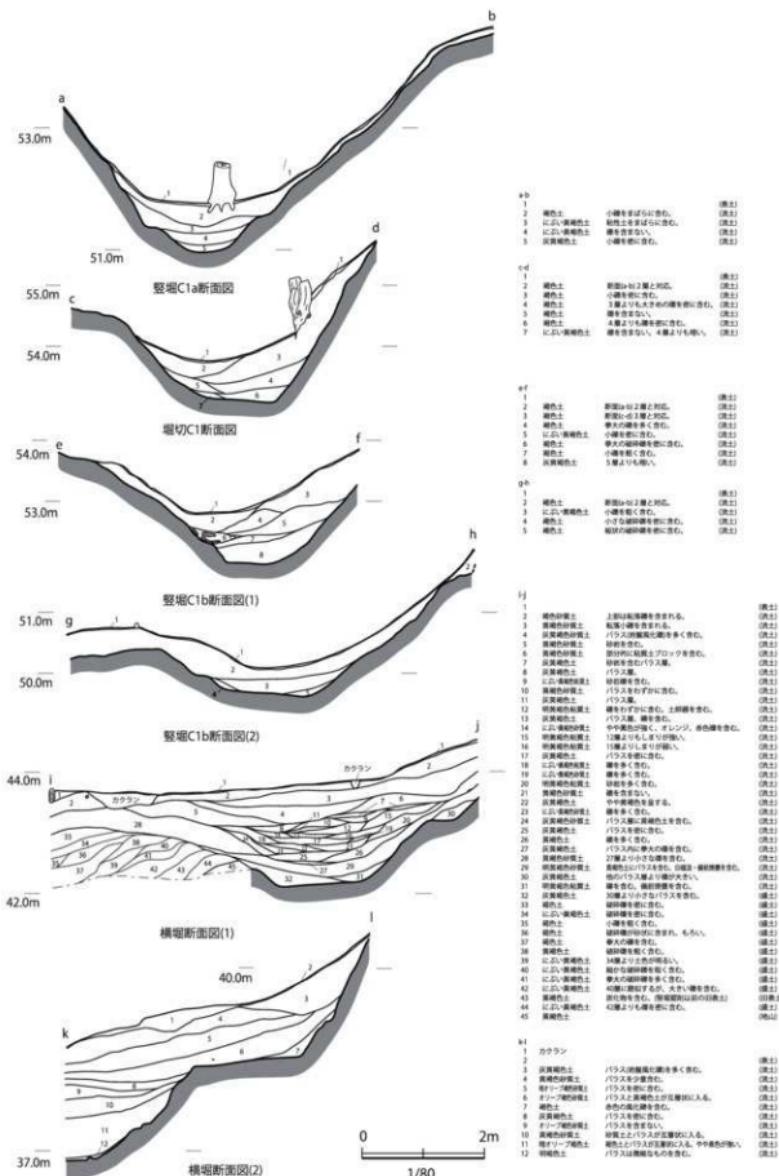
層位 豊堀北側は堀切 B4 と同様の堆積状況で、第 3・4 層上面の東側壁面は段状となる。このため豎堀の北側付近は、堀切 B4 と同様に箱堀状に再掘削された可能性が考えられる（第 35 図 u-v）。

遺物 遺物への注記ミスにより、堀切 B4 出土分と混在してしまっている。

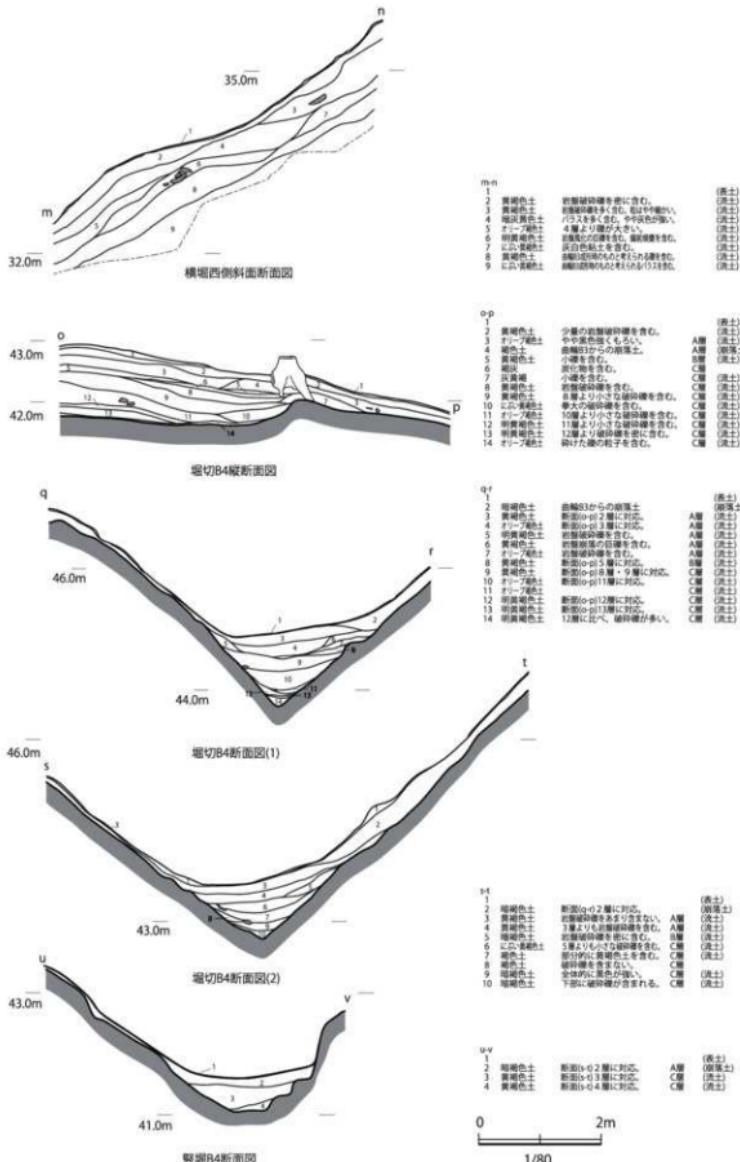
（小船井・田中達）



第 33 図 堀群分布図



第34図 堀群土層断面図(1)



第35図 堀群土層断面図(2)

第6節 水の手曲輪（第36～60図）

1 調査の概要

曲輪の位置と遺構 水の手曲輪は、主郭部へと大きく入り込む谷地形の最深部に位置し、三方を曲輪A群・主郭部・曲輪B群に囲まれる。水の手曲輪と主郭部最高点との比高差は約32mで、西側の沖積地面とは約30m、曲輪A群・B群とではそれぞれ約10m、22mを測る（第4図）。

遺構は、石積遺構（SS）2基・井戸跡（SF）1基、窪地状遺構1箇所、炉跡3箇所、溝状遺構（SE）3条、掘立柱建物跡（SB）20棟、柵列（SR）16条と切岸3箇所である（第37・42図）。

なお、調査対象地のうち一部は今回の調査から外れている。詳細は巻末の「補記」を参照されたい。

調査時は梅雨と夏季の時期にあたり、降雨後は遺構の水没や断ち割り断面の土層から滲出する地下水の激しさに悩まされた。炎天下になると土は固結してコンクリート様となり、精査に苦労した。（堀口）

遺構面の認識 調査の結果、表土下約2mから始まる自然堆積と上層の盛土の交互層が把握され、遺構の検出面（遺構面）が5面確認された（第36・37・42図）。

調査区東端に位置する井戸（SF1）は、井戸枠に付属する石敷部を伴う遺構であるが、この石敷部は層位を越えて2面検出された。さらに井戸に接続する溝状遺構（SE）は遺構面毎に3条検出された。

この井戸枠石積みには、石積み手法と使用石材の差が読み取れる横方向目地が2箇所確認され、この部分の標高は各遺構面と対応するので、都合2回の高上げが行われたと判断される（第36・45図）。

遺構面と遺構の関係 水の手曲輪で確認された5面の遺構検出面のうち、最も古い検出面を第Ⅰ期面とし、最も新しい面を第Ⅴ期面とした。また、遺構に周期的な変遷のある場合は、「期」に区分した。

遺構面と遺構の関係は以下に整理されるが、遺構の番号は第Ⅴ期面より順に割り振った。

各遺構面と検出された遺構との関係

第Ⅰ期面・窪地状遺構（A期）

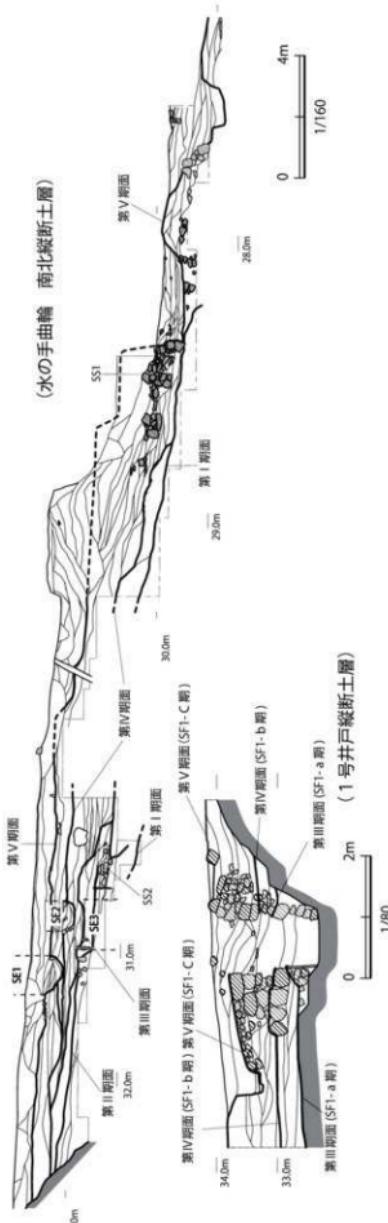
第Ⅱ期面・窪地状遺構（B期）とSS2

第Ⅲ期面・窪地状遺構（C期）、SF1（a期）とSE3

第Ⅳ期面・SF1（b期）とSE2

第Ⅴ期面・SF1（c期）、SS1（i・ii期）、SE1、

SB1～15、SRI～17、切岸1～3、1～3号炉跡



第36図 各遺構面の層位の関係

2 第Ⅰ期面（第37～39図）

（1）遺構面の状況

第Ⅰ期面では、北から南に傾斜する平面形の窪地状遺構が検出された。これを窪地状遺構とする。遺構の性格は谷部の最奥部にあたる自然遺構と考えられ、時期的な変遷からA～C期に区分して報告する。

調査は期間や掘削深度の関係から、窪地状遺構の中央部は面的な精査、周辺はトレンチ掘削で進めた。
遺物の取り上げ 窪地状遺構の中心部分を平面的にⅠ・Ⅱ・Ⅲ区に分割し、層位的に上・中・下層の三区分した上で遺物を取り上げた（第38図）。

（2）窪地状遺構（A期）

堆積層と遺構の画期 無遺物層である緑灰色の固結した砂質土層（第39図第46層）より上層が窪地状遺構の堆積土層である。窪地状遺構中央部の底面は、標高31.0m前後で、現地表下2mにあたる。

この遺構内堆積層の東側付近では、木杭（1006）付近から斜めに土層を切り込む、不（非）整合面が認められる（第39図）。この不整合面から続く第24層の直上に2号石積遺構（SS2）が構築される（第38図a-b）。この堆積層の不整合はSS2構築時に窪地状遺構内を再掘削（深浚）した結果と考えられる。

窪地状遺構A期（SS2構築前）の堆積層を、SS2構築面直下の層（第38図の第24層=第39図の第45層=第44図第87層）から第39図の木杭1006や1010の打ち込み面（第9・11層）以下の層とする。Ⅰ区やⅢ区東側の堆積層の中層付近は、砂質土と粘土層の交互層となる（第39図第13～21層）。また、炭化物層（第22層）や焼土層（第23層）も検出された。この第22層出土炭化物のAMS年代は、 355 ± 20 年BP（AD1450～1530、1550～1640年）である（第VII章）。

なお、窪地状遺構B・C期はSS2構築後と区分する。
A期の遺物 A期に伴う遺物は、Ⅰ区の中・下層（第39図第9層より下）を中心Ⅱ・Ⅲ区の最下層出土品も含まれ、備前焼甕（410）等が出土した。また、窪地状遺構の最下層（第45層）と対応するSF1地山層（第45図第37層）からは備前焼擂鉢（358）や青磁碗（108）等が出土している。

木製品は、Ⅰ区中層付近から漆器椀（937）・折敷（950）・曲物の側板（963）・糸巻き（976）や木杭12本等が出土した。動植物遺存体は、Ⅰ区中・下層より動物骨の管骨、桃や梅の種実が数点出土した。

3 第Ⅱ期面（第37～40図）

（1）遺構面の状況

第Ⅱ期面で検出された遺構は、2号石積遺構（SS2）とその前面に広がる窪地状遺構（B期）である。第Ⅱ期面は、表土下約2m、第Ⅲ期面より約1m下面にある。調査に際しては、遺構面の西半部は、トレンチによる部分的掘り下げに留めた。

SS2より北東側（主郭側）の遺構面（第37図）は、岩盤面から続く2段構成のテラス状の平坦面（第44図の第65a～67層の上面）となり、SS2に接続する。SS2より南側は緩やかな傾斜面の谷地形となる。

第65～68層は盛土層と考えられ、SS2を軸線として曲輪面の北半分は埋め立てられて平坦面にされる。

第66層の段落ち部分では0.2～0.5m程の川原石が密に入っている。これは土留めを意図していると思われる。

（2）窪地状遺構（B期）

構造 窪地状遺構の北縁に護岸壁としてSS2が構築され、その周辺に杭列が配される時期をB期とする。

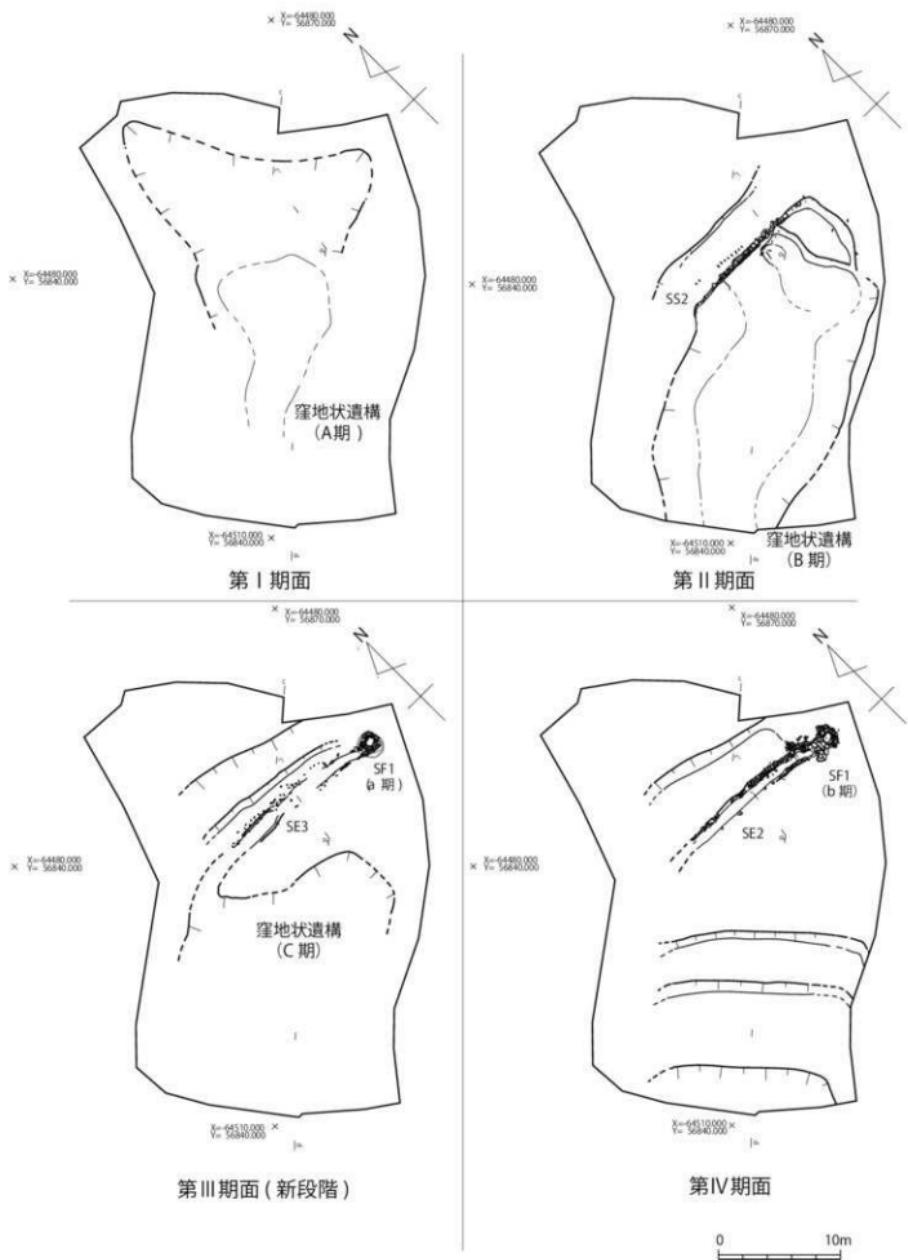
窪地状遺構は、A期より埋没が進んで調査区の南半部に偏在する。その頂点付近は、テラス状の平坦面を一段有しており、それより南西側に向けて大きく直線的に広がる。底面はゆるやかな平坦面が続くが部分的にスリバチ状に深くなる（第37～39図）。
木杭列 木杭列は平面的には、窪地状遺構の最東端部分とテラス状平坦面の上端に3条検出された。SS2の北側背面上にも1条認められる（第38～39図）。

木杭は、層位的に第9～11層（第39図）及び第67層（第44図）の上層から打ち込まれる。

窪地状遺構を囲む木杭列とSS2背面上の木杭列は、平面的位置関係や層位的にもセット関係とみなされ、窪地状遺構の最東端（谷頭）を三角形に取り囲む。これら木杭間の距離は窪地状遺構側で約0.5～0.8m、SS2側で0.3mと粗密がある。

木杭の残存（遺存）長は、平均して28.9cmである。残存部は土中遺存した部分なので、しっかりと打ち込まれていたようである。なお、先端部以外は特に加工は施されず、樹皮が付いたままの木杭がほとんどである。木杭の直径は平均して4.9cmと細く、城域内に自生する低木類の樹幹と変わらない。

これらの木杭列は、防衛的な意味の柵列と理解されるが、地盤の強化や土砂や枯葉などの流入を防ぐ維持管理の機能も担っていたと考えられる。

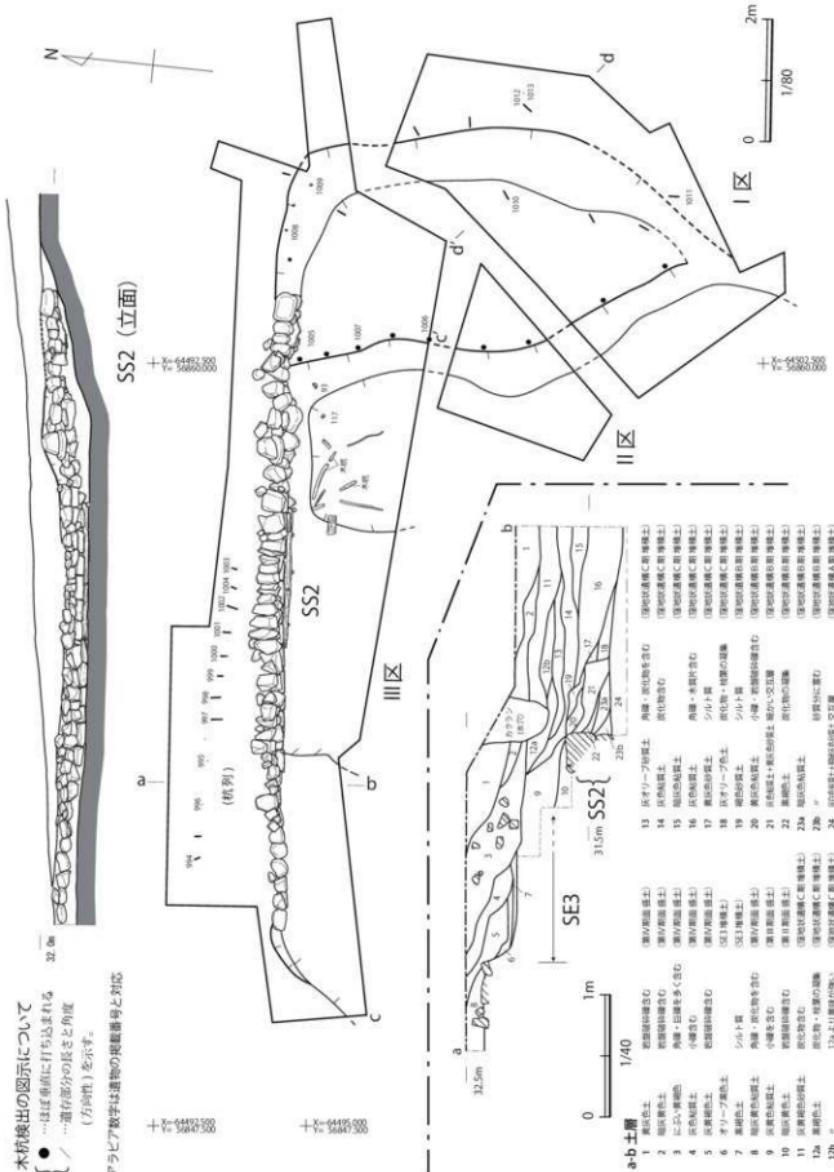


第37図 水の手曲輪 第Ⅰ～Ⅳ期面の遺構配置図

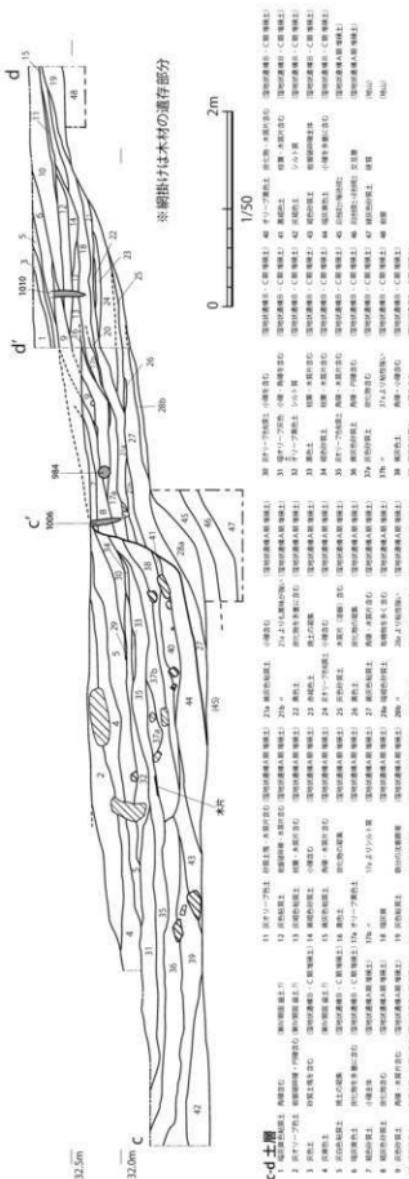
木杭検出の図示について

…は車両に打ち込まれる
…遺存部分の長さと角度
(方角性)を示す。

*アラビア数字は遺物の掲載番号と対応



第38図 水の手曲輪窪地状遺構（B期）平面図



第39図 水の手曲輪 窪地状遺構土層断面図

(3) 2号石積遺構 (SS2)

規模と構造 SS2は窪地状遺構の北縁辺に護岸壁として位置する。全長10.4m、最大幅0.75mを測る。

SS2の軸線は、ほぼ東西方向を指向する。SS2の埋没後に構築される井戸跡 (SF1) や溝状遺構 (SE1 ~ 3) の方向性はSS2の軸線に並行しており、わずかに位置を違えるのみである。SS2の軸線は第Ⅲ期面以降、遺構構築の位置決定に大きく影響している。

石積み SS2中央部分は地輪や火輪の部材を底石（基底面）にして、その上に2段に0.2~0.5mの大川原石を積み上げる。一方、東西端部分は1段ないし2段の川原石を積み上げるが、小さい石の上に大きな石が積まれるなどバランス性はない。

中央部の石積みは平面的・立体的に直線的で面を揃えた意図を感じるが、東西端部分は蛇行して孕みが生じる粗雑な工法である（第40図）。

胴木（横木）構造 SS2中央付近の基底面には胴木（横木）構造が確認された。長さ約2.6mに揃えられた三本の丸木を並べた上に石積みされる（第40図）。SS2前面側の胴木（993）は他2本（991・992）と異なり、柱材の転用で重量感があり剛性も高い。

石積みの順序は、胴木の上には大きさの不揃いな地輪5枚と、屋根部を平坦に切り取られた逆位の火輪1枚が並べられた後に、細長い河原石を胴木に対して縱位方向に揃えた2段の石積みとなる。

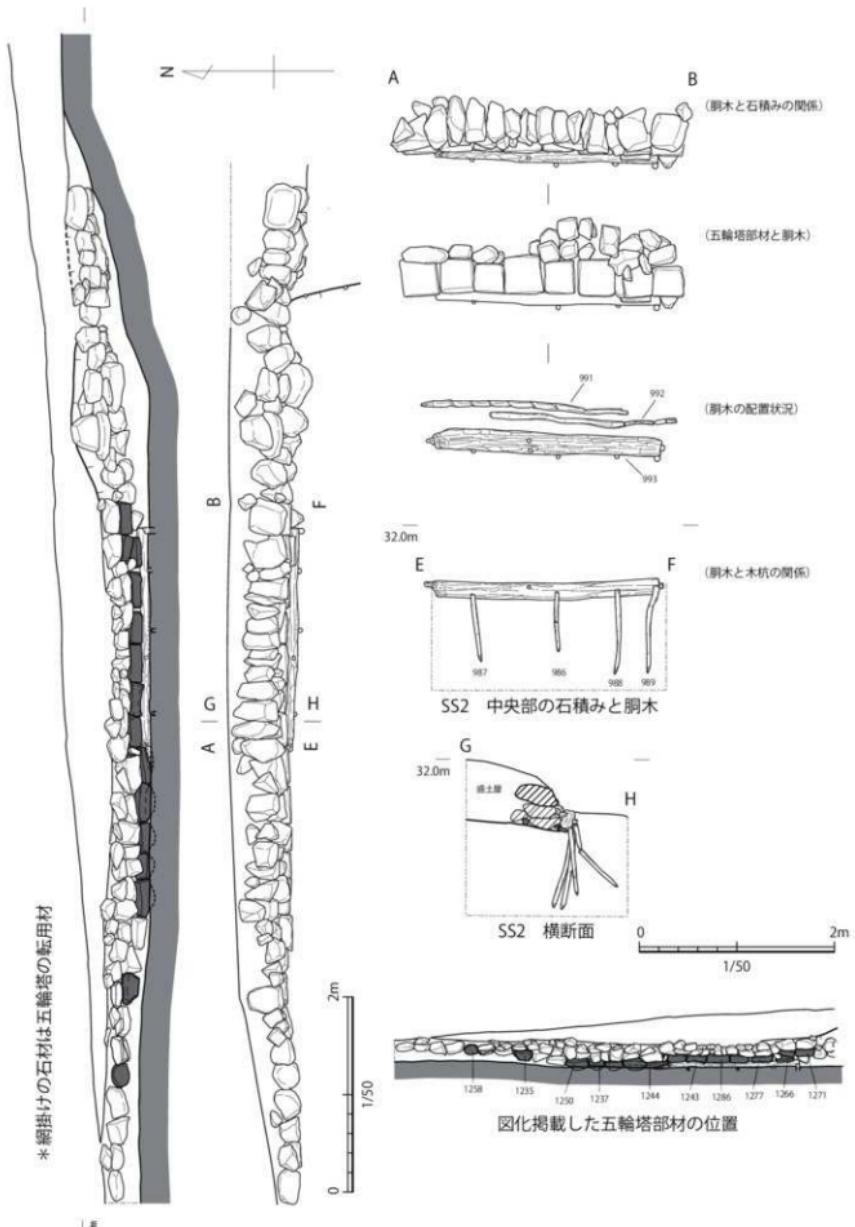
胴木（993）の前面には4本の木杭（986~989）が垂直方向に打ち込まれており、胴木全体が迫り出さないようストッパーの機能を果たす。木杭の端部は、胴木の中程付近の高さに揃えられている。

胴木構造の箇所は、SS2の中央部かつ谷地形の最深部である。SS2背面からの土圧や地下水圧による石積みの崩壊や、石積み自体の不等沈下を防ぐ目的で胴木構造が採用されたと考えられる。

五輪塔の転用 胴木構造の西側部分にも火輪5枚を逆位にして基底面とする。屋根部分は地山面に沈みこんでいる。このように、五輪塔の部材が石積みの基底石に転用されるのはSS2の中央部のみである。

石積部の背面 控え積みの石（第40図）と盛土（第38図第10層、第44図第67~68層）が確認された。盛土の上面は第Ⅱ期面のテラス面となる。

第69層（第44図）は黒褐色土で、有機物が凝集する層である。原形は留めていないが、横木との関係から敷葉がなされていた可能性がある。



第40図 水の手曲輪 SS2 実測図

炭化物層と焼土層 木杭(1010)の上面には、焼土層(第5層)と炭化物の凝集層(第6層)が堆積する(第39図)。この第6層出土炭化物のAMS年代は 305 ± 20 年BP(AD1490~1650年, AD1520~1580年)の測定結果が出た(第VII章)。この第6層より上位の堆積層は、間層(第3層)を挟んで第IV期面の盛土層(第1・2・4層)となる。第III期面ないし第IV期面の造成時には火災などにより杭列としての機能を終えていたようである。

(4) 窪地状遺構とSS2の出土遺物

遺物とその年代 窪地状遺構(B期)に伴う堆積層はⅡ・Ⅲ区の下層(SS2側)にある。Ⅱ区下層出土の備前焼窯(418)は15世紀中頃~16世紀初頭、鳴口壺(456)は16世紀初頭~17世紀初頭となる。

木製品も多く出土した。動植物の遺存体は、SS2前面の床面より巻貝やマツカサ、Ⅱ区中・下層で巻貝と二枚貝、Ⅱ・Ⅲ区の下層で管骨、Ⅲ区中・下層で肩甲骨や巻貝と二枚貝がある。また、Ⅱ・Ⅲ区を通じて茅や笹竹の根や広葉樹の枝葉等も出土した。

SS2前面の床面出土の青磁碗(93)は15世紀後半~16世紀前半の年代観を示す。

SS2本体の遺物は胴木(991~993)と木杭(986~989)及び五輪塔の部材がある。991は鳥の略まった跡か卯頭に残る木杭の転用である。長さは2.15mと長い。993は柱材の転用である。ホゾの反対側の小口部分は既に腐朽した状態で転用されたようである。986~989の長さは0.7~1mを測る。986~989-992-993の法量から、1~2mクラスの木杭の存在が伺える。

なお、五輪塔部材の詳細は第VI章を参照されたい。
SS2の構築時期 窪地状遺構(B期)を含めたSS2の構築時期や木杭列の時期は、青磁碗(93)や備前焼窯(418)・鳴口壺(456)の年代観が検討材料となるが、遺構内混入の時期も考慮する必要がある。

現時点においては、出土遺物の年代的下限である16世紀初頭段階の時期を充てておきたい。

窪地状遺構(A期)の時期 前項にて窪地状遺構(A期)の次段階であるB期の始まりは、16世紀初頭段階と導かれた。前述のようにA期に伴う出土遺物の年代観は概ね14世紀前半~15世紀前半代を示し、第22層(第39図)出土炭化物のAMS年代は第6層よりも約50年程古い測定結果が得られている。

このことから、窪地状遺構(A期)の存続幅は14世紀代~15世紀後半代とみなされる。

4 第III期面(第37~41図)

(1) 遺構面の状況

この遺構面は、表土下約1.4m、第II期面より約0.6m上の位置にある。窪地状遺構(C~D期)、1号井戸跡(SF1)、3号溝状遺構(SE3)が検出されたが、掘立柱建物跡等は確認されない。第III期面の南半部についてはトレンチによる精査を進めた(第37図)。

遺構面の構造 SS2上位面には、砂礫交じりの灰色・黄灰色の粘質土層(第38図第9層、第44図第59~61層)が厚く堆積し、SE3の構築面となる。

SE3の北側は幅0.8mのテラス面が接続し、さらに北側の主郭部方向に向けて緩い上り勾配の傾斜面となる(第44図第58層上面)。

窪地状遺構の護岸 SE3の構築面は、窪地状遺構側では第70層上面(SS2中央部分)へと続く。この第70層は灰色粘質土で、それよりSS2側の第71~72層といった粘質土と砂質土が縞状に堆積する層とは異なる。第70層より上位は水平堆積、窪地状遺構側(南側)はレンズ状堆積をなしていた。

さらに、第59~61・70層の縦断面形は階段状を呈することから、窪地状遺構の北岸(縁)は盛土造成(生活面の嵩上げ)に伴ってSS2から階段状の護岸に改修されたものと判断される。なお、SS2の南側部分は自然堆積土を段状に削り取って(第38図第19~21層)、新たな護岸面に作り変えられる。

つまり、第III期面はSS2の埋没時点(第38図第19~21層、第44図第71~72層)において、第II期面のテラス部(SS2上面部分)を埋め立てて平坦面を広げ、窪地状遺構の北岸を階段状の護岸(窪地状遺構C期)とする生活面である。護岸面の平面的な検出は、部分的に留まざるをえなかった(第37図)。

(2) 窪地状遺構(C期)

土層堆積と木杭列 SS2から階段状の護岸面に改修された以降は、基本的に砂質土と粘質土の交互堆積による自然埋没が進む。つまり、滌水と流水作用を繰り返しながら埋没したと考えられる(第39図第11~18層及び第44図第75~81・83~86層)。

これらの堆積土はヘドロ化し、卵の腐ったような激しい臭いがあり、枝葉の凝集して堆積する層もあった。

また、窪地状遺構C期に新たに打ち込まれた木杭列は確認されなかつた。B期に伴う木杭(第39図の1010)より上面の土層堆積状況から、窪地状遺構C期には木杭列の役割は終えていたと考えられる。

また、木杭の上に堆積する炭化物・焼土層の存在は窪地状遺構B期からC期のある時点で、周辺で火災や火を用いた何らかの作業がなされたことを示す。

C期の遺物 C期の堆積土層はⅡ・Ⅲ区の下層(階段状の護岸面より南側)とⅡ・Ⅲ区の中・上層に対応する。遺物は後者の土層から出土した。これらの出土遺物は、改修後に混入したものと捉えられる。

遺物は、福建広東窯系白磁碗や邵武四都窯系白磁皿、漳州窯青花盤(297)、景德鎮系白磁、備前焼擂鉢(391)・甕、陶器類や土鍾(798)、木製品は曲物の側板(971-972)等あり、木杭も16本出土した。391は16世紀中頃~17世紀初頭の年代が付与される。

動植物の遺存体は、Ⅱ区上層で巻貝、Ⅲ区上層で二枚貝や桃・梅の種実等があり、広葉樹の枝葉、茅・竹類の茎や根が砂質土層に混入していた。

改修の時期 窪地状遺構C期、つまり窪地状遺構の北岸が階段状の護岸面に改修される段階は、備前焼擂鉢(391)が窪地状遺構内に混入する時期より以前であるので、16世紀前半頃と考えられる。

(3) 1号井戸跡 (SF1-a期、窪地状遺構D期)

位置と規模 曲輪面の東奥隅に位置し、後背面は曲輪A群の裾部に接する。SF1の井戸枠は2回の嵩上げが確認された(第41図)。構築時の井戸跡をa期、嵩上げ後をb-c期として区分し、本項ではa期(第III期面)の調査結果を記載する。

SF1-a期の井戸枠は、平面方形で一辺1.5mを測る。井戸上端の高さは標高33.0m、主軸方向はN-60°-Wで、上端からの深さは0.75mを測る。井戸枠の西側は天端より0.3m低くなつて開けた空間となり、SE3と接続する。この空間は大人一人が入れるスペースである。井戸枠との接続部分のSE3両側壁は、石積みによる護岸となる。

井戸掘り方 井戸掘り方の平面形は歪な隅丸方形で、長軸2.2m・短軸1.9mを測る(第41図)。断面形は底広の逆台形状を基準とする(第45図)。地山面(第37層)から掘り込まれ、第38層の上面を底面としている。西側の掘り込みは浅く、さらに段状に掘削されてテラス面となる(第45図第36層部分)。

井戸枠の構築 井戸枠は木枠と石積みが併用される。木枠(983)はクスノキの樹幹を割り抜いたもので、外径・高さとも約55cm、厚みは7cmである。上下端はやや内湾する。腐朽により壁面の半周分が

欠損しているが、後述のように石積みとの関係からそのままの状態で井戸枠に使われたと判断される。

木枠の壁面で井戸枠とする部分(西~南側)と井戸掘り方との間隙は、拳大や人頭大の礫や砂利、土でつき固めて埋め戻される(第45図第36-72層)。この第72層の南側に広がる窓みは、第70-71層によって水平に埋め戻されている。

他方、東~北側部分は石積みによる壁面となる。北側部分は、木枠と井戸掘り方の間に4段の石積み後、木枠のわずかな壁面の上に拳大の塊石を押し込むように積み上げて壁体に仕上げる(a-b第20層)。

井戸枠の石積み部分は、約5~30cmの大割石や川原石を5段ほど乱石積みする構造である。使用石材には地輪も転用される(第41図の網掛け部分)。

地表面(天端)付近は、SE3との接続部(西側)を除いて石積み一段の壁体となる。石は井戸内側へ突出させて積まれ、木枠の上端を押さえつけている。その背後は栗石による控え積みがなされる。この控え積みは埋め戻されて曲輪面の高さに揃えられる(第45図第42-67~69層)。井戸枠の構築と連動して井戸跡周囲の曲輪面も盛土で嵩上げされている。

(4) 3号溝状遺構 (SE3、窪地状遺構D期)

位置と規模 SF1(a期)に接続する溝状遺構である。SS2上面の盛土面(第38図第9層・第44図第59-61層)の上面から掘削される素掘りの溝である。井戸枠から溢れ出す水や曲輪内の雨水を窪地状遺構側へ集・排水する機能を持つ。

規模は全長約13.3m+α、上幅の最大幅は約1.5m、底面の幅は0.6~1m、深さ0.2~0.3mを測る。断面形は皿状をなす。上幅はSF1から約9m付近で両側壁が大きく広がる。また、SE3内には木杭列が認められた。平均の残存長30cm、直径3.4cmである。なお、溝の肩部や壁面は崩落や第IV期面の盛土造成で大きく損なわれる箇所が多い。

窪地状遺構(C期)との関係 SE3の終東部分は窪地状遺構に接続する(第37図)。SE3から窪地状遺構へと排水される構造となる。ただし、掘削深度の関係で平面的な把握に留めざるを得なかった。

このSE3と接続する窪地状遺構の北岸は、窪地状遺構C期のそれよりも南側に移動した位置となる。層位的関係からはSE3・SF1と窪地状遺構C期は同時存在と捉えることも可能であるが、上記の平面的な

関係性から、SE3 及び SF1 (a 期) は窪地状遺構 C 期に伴う階段状の護岸面の埋没がかなり進んだ段階 (D 期) で掘削・構築されたものである (第 44 図)。

つまり、SF1 (a 期) と SE3 は、窪地状遺構 C 期より埋没が進行 (D 期) して排水機能を喪失したために、清浄な水の確保と地下水や雨水を排出する必要性から設けられた遺構とみなされる。

護岸施設 SE3 の両側壁には、乱杭状に木杭が打たれていた。つまり SE3 は、いわゆる「しがらみ」を護岸施設とする溝である。なお、SF1 (a 期) との接続部分のみは石組みの護岸となる。

護岸施設に伴う木杭は、打ち込まれた部分のみ遺存していたが、その上端部には火を受けて焦げたような痕跡を示す場合があった。特に、その痕跡は SF1 付近に多い。さらに、SE3 西端部分では炭化した木杭も認められた (写真図版 65 参照)。

堆積土の状況 SE3 内の堆積土は大きく 4 層である。第 38 図床面付近の第 6 ~ 7 層が SE3 機能時の自然流入土であり、それより上位層 (第 3 ~ 5 層) は、後述する第 IV 期面造成時の盛土と判断される。

出土遺物 第 45 図第 35 層中より 15 世紀代の備前焼甕片や桶 (946)・折敷等が出土している。

(5) 木杭列

SE3 北側壁の背面上には、溝に平行して幾列にも木杭が打ち込まれて帶状となる。杭間距離は 0.3 ~ 0.5 m、平均の残存長 31.7 cm、直径 5.1 cm である。

これらの木杭列は、窪地状遺構 A 期や SS2 に伴う木杭列と同様に、防衛的な意味の柵列と理解されると併に、打ち込むことで盛土を補強したとも考えられる。

(6) 第 III 期面の変遷

前項で検討したように、窪地状遺構の北岸は 16 世紀前半頃に階段状の護岸面に改修される。その後、窪地状遺構の自然埋没が進んで、SF1 や SE3 が新たに構築される。窪地状遺構は、堆積土層から出土した遺物の年代から 16 世紀中頃にはかなり埋没が進んでいたようである。16 世紀中頃かそれ以降の時期に SF1 と SE3 が構築された可能性が高い。この SF1 構築時はその周辺で盛土による嵩上げも行われた。

従って、第 III 期面は、古段階 (曲輪面の造成と護岸面の改修: 窪地状遺構 C 期) と新段階 (SF1・SE3 の構築と埋没が進んだ窪地状遺構 D 期) に細分される。

5 第 IV 期面 (第 37・41・44 図)

(1) 遺構面の状況

遺構 第 IV 期面に伴う遺構は、1 号井戸跡 (SF1-b 期)、2 号溝状遺構 (SE2) である。表土下約 1 m、第 III 期面より約 0.4 m 上にある。調査区の東半部は面的に、西半部はトレーンチ主体の調査を進めた。

調査区の東隅にある SF1 からは SE2 が延びるが、平面的には SE3 とはほぼ変わらない。窪地状遺構は、盛土により埋め立てられ、階段状の土壠となる。

なお、第 I ~ III 期面と同じく掘立柱建物跡や柱穴等は検出されなかった (第 37 図)。

(2) 遺構面の構造

遺構面の広がり 第 IV 期の遺構面は、第 44 図の第 29・46・45・49・50・97・96 層の上面となる。テラス面と土壠で形成された遺構面である。

テラス面と盛土 SE3 の北側は 2 段に広がる。SE3 側のテラス面は幅 4 m を測り、SE2 の石積護岸壁 (北側壁) を土留め擁壁に第 45 ~ 48 層等が盛土されて形成される。SE2 構築と盛土造成は一体化している。

窪地状遺構は、自然堆積土 (第 75・76 層) の上に礫を多く含む暗灰黄色系統の盛土で埋め戻される (第 49・50・52 層等)。この窪地状遺構を埋める際は、SE3 の肩部を掘り崩して流しこむように埋め立てた状況も確認された (第 38 図第 3 ~ 5 層)。

土壠とその構造 土壠は、SE2 から遺構面の南面部に向けて緩やかな下り勾配の斜面が続くその南面部に構築される。(第 37 図)。

土壠の断面形状は階段状で、段落ち部分を境に上段と下段の 2 段で構成される。(第 44 図第 89・96・97 層、第 52 図 c-d 第 5・15・22 の上面)。土壠上段の天端の標高は 31.7 m を測る。上段と下段の境目は、標高 31.0 m 付近となる。下段は水平もしくは緩やかな勾配の平坦面が 3.4 ~ 3.6 m 続き、さらに傾斜変換して谷底に到る。この下段の平坦面上には角礫や岩盤破碎礫を用いて貼石状とする (第 44 図第 96 層)。

土壠の基底面は硬質な緑灰色砂質土 (第 44 図第 89 層・第 52 図 c-d 第 22 層) となるので、土壠構築時においては、軟弱な地盤を避けるために窪地状遺構内の堆積土を削平したものと考えられる。

土壠と SE2 SE2 と土壠との関係は、その接続部の検出に失敗したために不明だが、SE2 は土壠の北側と曲輪 B 群の裾部の間を通る構造と想定される。

(3) 1号井戸跡 (SF1-b期)

規模 井戸上端は標高 33.4 m である。井戸枠と SE2 との接続部分は台形状の石敷部となる（第 41 図）。

井戸枠の構造 井戸枠は、a 期のものに 2~4 段石を積み足して 0.4 m 程嵩上げされる。地輪も転用材に使用される。この井戸枠を b 期とする。井戸水の通常の汀線は石敷部の上端で、オーバーフローはしない。

井戸枠の平面形は a 期と同じ方形であるが、控え積み部分は扇形に開く（第 41 図）。石積み一段目は a 期の天端面より 5~10 cm ほど奥まった位置から積まれる。控え積みは第 IV 期面の盛土造成に連動して埋め戻される（第 45 図 a-b 第 18-19-61 ~ 63 層）。

石敷部の構造 規模は井戸側の辺 1.1 m、SE2 側の辺 1.75 m、井戸主軸方向の長さ 1m を測る。0.5 m 大の楕円形の巨礫（川原石）と 1m 大の角柱状の石が使用される。井戸や溝の石積みよりも大き V 石が選択される。敷石は井戸と SE2 の間を充填するように 3 列にわたって並べられる。石敷面は平坦となるよう、石の上面は揃えられる。

出入り口部 石敷部の南側縁には平面扇形の浅い掘り込みあり、石敷部への出入り口部と考えられる。

井戸主軸に対して反対側にも石敷部から SE2 内へ引き込まれる平坦面（第 41 図の網掛けされた石周辺）があり、これも出入り口部となる。つまり、SF1 (b 期) には南北 2 方向から出入り口が設けられる。

出土遺物 備前焼甕・擂鉢（404）と景德鎮窯系白磁碗（第 45 図第 18 層出土）、石敷部の検出面から出土した備前焼甕、瓦質土器擂鉢（410）等がある。

(4) 2 号溝状遺構 (SE2)

位置と規模 SF1 (b 期) に接続する溝状遺構である。現存長は、台形状の石敷部との境から約 12 m、上幅 1.2 m、下幅 0.45 ~ 0.65 m を測る。SE2 南側壁部分は、第 V 期面造成により大きく損なわれていた。

石積護岸 SE2 の両側壁は石積みによる護岸壁となる。断面形は逆台形で、壁面の立ち上がりは約 60° である。石積護岸は 4 段の石積みで、高さは約 0.5 m である。使用石材は割石や川原石で、その色は白色・赤色・灰色・緑灰色・黒色と多彩であった。

石積技法 まず、長方形の石の長辺を溝側に向けて一段目（基底部）として据える。石の大きさは 0.3 ~ 0.5 m × 0.1 m と大ぶりである。2 段目以降は 0.2 ~ 0.3 m × 0.1 m 大と、小ぶりな石が使用される。

2~3 段目は長辺を、4 段目は短辺の平坦な側面を溝内部に向けて積まれるので石積み面は揃う。

石積みには煉瓦積み技法や重箱積み技法が混用され、五輪塔の地輪を立位に据える箇所もある。北側壁部分には拳大の栗石を集中的に充填した箇所があり、補修や地盤強化の一環等によるものであろう。

井戸との接続部 SF1 (b 期) の石敷部と SE2 とは、石敷部の北縁に SE2 の北側壁が、石敷部西縁中央部分に南側壁が接続する関係となる。この石敷部と SE2 北側壁との接続部は、五輪塔の地輪を置いて幅狭の足掛け面となり、石敷部への出入り口になる。

木杭の遺存 木杭は、井戸石敷部から 3.5 m 西側の北側壁側付近に 2 箇所（第 41 図の 1088-1089）、その反対側でも 2 箇所（1090 と抜き穴）検出された。杭間距離は幅 0.5 ~ 0.6 m、長さ 0.8 ~ 0.9 m で、SE2 の壁際から 0.2 m 離れた位置で、床面から約 0.2 ~ 0.3 m の深さに打ち込まれる。木杭の直径は 11cm と、他の木杭と比べて 2 ~ 3 倍大きい。杭の上端部は既に腐朽するが、先端部は 2 方向から取りされて錐状となる。

なお、木杭は護岸壁側に倒れかかる形に図化されている。これは先端部まで掘り下げた結果、自重により倒れてしまったためである。検出当初は垂直に打ち込まれていたのを確認している（第 41 図）。

これら 4 本の木杭は、直径と SE2 内で矩形に配置される状況から、溝を横断する橋脚と考えられる。

堆積土の状況 (第 43 図) 堆積土は上・中層（第 11-37-38 層）と下層（第 39-40 層）に区分される。下層は黒褐色・灰褐色の砂質土主体で、上・中層は黄白色・灰褐色粘質土で硬質であった。

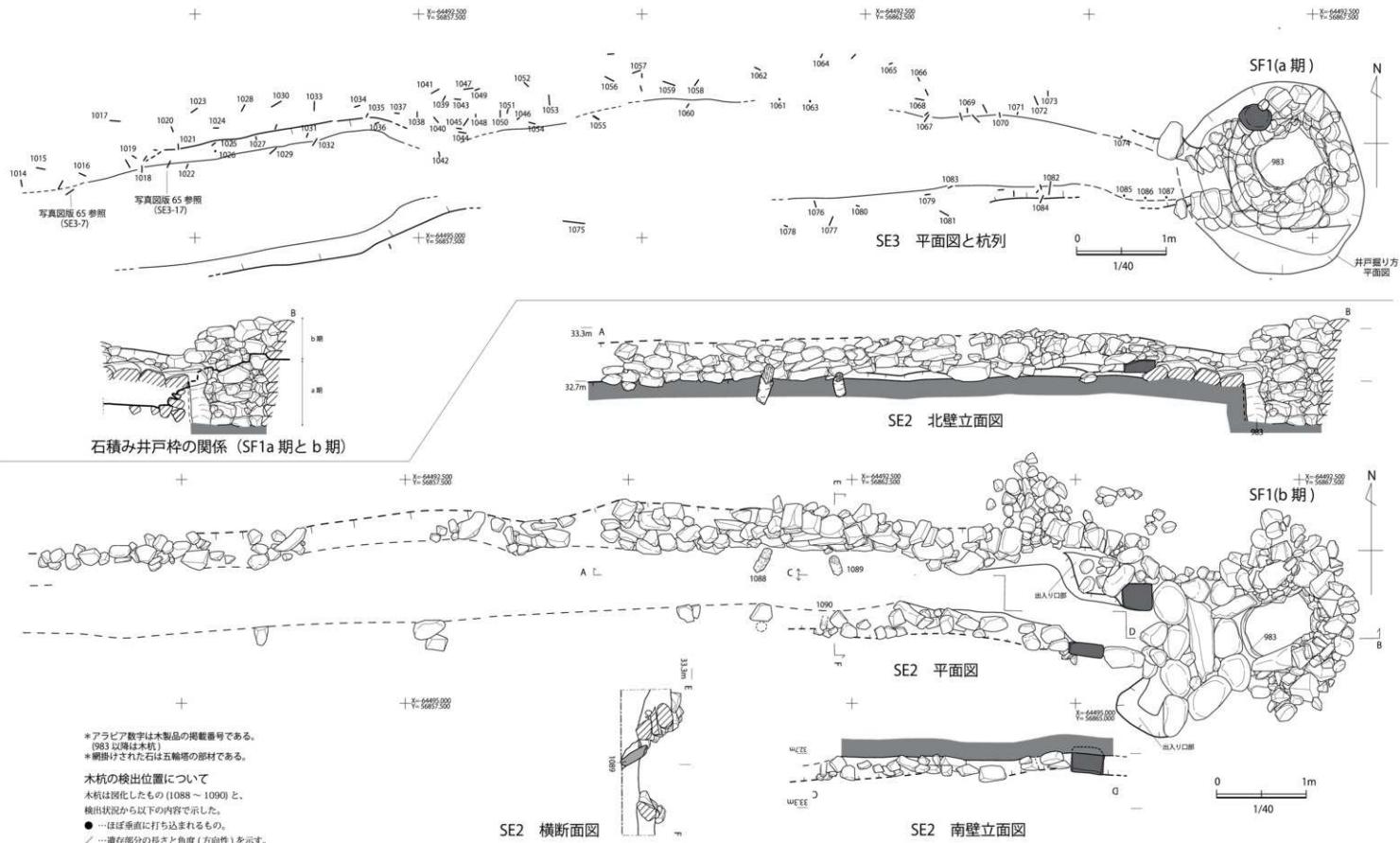
調査時点では、この上・中層も SE2 内への自然堆積土としていたが、硬質で堅緻なので第 V 期面造成に伴う盛土と判断した。なお、上層出土の土師器皿（618）は SF1 第 27 層（第 45 図）と接合関係にある。

出土遺物 SE2 内の堆積土層（下層）からは陶磁器類や木製品等が出土した。陶磁器や土器類は漳州窯系青花碗、景德鎮窯系青花碗や皿、景德鎮窯系白磁、褐釉陶器天目碗（300）・四耳壺（311）、備前焼甕・壺・擂鉢、土鏡（794-795）等がある。遺物の年代は、14 ~ 16 世紀代と幅がある。金属製品は銅製笄（860）がある。木製品は、紡織具の一つである杼（977）等がある。一方、SE2 の床面付近では、獸（猪か？）の牙や管骨といった、動物遺存体が得られている。

(5) 第 IV 遺構面の時期

時期を推定する遺物に乏しが、第 III 期面と第 V 期面の間に位置する時期、すなわち 16 世紀後半と捉えておきたい。

（今塩屋）



第41図 水の手曲輪 SF1(a)期 -SE3、SF1(b)期 -SE2 実測図

6 第V期面（第42～60図）

（1）遺構面の状況

遺構 第V期面で検出された遺構は、掘立柱建物跡（SB）18棟、柵列（SR）16条、切岸3箇所、1号井戸跡（SF1：c期）、1号溝状遺構（SE1）、1号石積遺構（SS1：i / ii期）と炉跡3基である。

後世のゴミ穴や擾乱穴が数多く点在するために、掘立柱建物跡や柵列の柱穴が失う箇所が多い。曲輪A群の裾部付近も部分的に削平を受けていた。

遺構の位置関係 SF1は曲輪面の東端に位置し、このSF1と曲輪面の南西側に位置するSS1をSE1が連絡している。このSS1は、谷地形の狭隘部分を東西に塞ぐ位置にある。

曲輪面の西側縁には、切岸とそれに伴う柵列が曲輪B群の斜面裾に沿って巡るように構築される。その反対側（曲輪A群）では切岸や柵列等の施設は未検出であるが、SF1の背面にあたる曲輪面の東端部分では、平坦面が一段検出された。この平坦面は、SF1上面より0.5m高い箇所に位置し、幅1m弱の犬走り状となる。検出の状況から調査区外に向けて数段の平坦面が続くとみられる。

SE1とSS1の中間には、方形に巡るテラス面が位置する。幅1mの平坦面を介して0.7mと0.3mの段差がつく（第44図18・19層下面）。

掘立柱建物跡は、SE1と切岸1・2およびSE1とSS1で囲まれた空間に集中して建てられる。（堀口）

（2）遺構面の構造

盛土の状況 第V期面は、北側から（第44図）第26・25・34・33・90層上面を結ぶ遺構面である。第IV期面までと比較して広大な造成面となる。

遺構面の盛土は青灰色や灰色の粘質土や岩盤破碎礫混じりの褐色粘質土を主体とする。

この盛土は、調査区東側では層厚約0.6mを測るが、SS1の位置する部分は、約1.6mとかなり厚い。また、巨礫や礫を含む盛土が柵や土堤の基盤面となる（第44図第116層）。SE2上に盛土する際は扁平な巨礫を敷き込んでいた（第43図3～5層）。これは軟弱土層の安定を狙う工夫と考えられる。

盛土の工法は、高所から低所へ流し込む手法を観察できるが、SE1周辺部では土堤または三角形状に盛土する（第44図第30～32・34・36・37層）。

第V期面は南側の谷部を埋め立て、SS1を構築する大規模な一連の造成工事で形成された曲輪面とい

える。このSS1の構築方法については後述する。

盛土中の遺物 盛土中の遺物には、SE2の上層として取り上げたものも含まれる（第43図第11・37層第44図第55層）。陶磁器や土器類は、漳州窯系青花皿（290）、青磁皿（169）や碗、白磁皿、景德鎮窯系白磁小杯や青花、褐釉陶器、瀬戸美濃焼四耳壺（475）、備前焼壺・壺（459）・擂鉢（357・373）、瓦質土器羽釜（620）、土師器皿（577・579・584・618）、土鍤（791）等がある。402は畿内河内産とみられる。

木製品はSE2の上・中層として取り上げたもので、桶の蓋（939～945）や曲物の底板・側板（953・956・957・964・965・970）等がある。直径0.4m、長さ1m程で、上下が切断された杉丸太も出土した。

（3）1号井戸跡（SF1-c期）

土層図の作成 井戸跡の検出時は平面形を円形と認識した関係で、その主軸と直交する方向の土層断面図を図化記録した（第45図a-b, c-d）。しかし、実際は井戸中心と出入り口部を結ぶ線が本来の主軸方向と判明したので遺構断面・立面図はこの主軸方向と直交する方向で作成している（第46図m-n, o-p）。

規模 井戸跡は長辺3.5m、短辺2.5mの平面長方形の区画内に井戸本体と石敷部、排水溝さらに入土部が備わる構造を有する。これをSF1-c期とする。

井戸上端の高さは標高34.0mで、井戸水の汀線は満水時で標高33.6m付近にある。夏季に井戸水を全て汲み上げても一晩で回復する湧水量を誇る。

井戸に伴う柱穴 井戸跡周囲には柱穴が十数か所検出された。井戸跡を方形に囲うように四隅とその延長線上に柱穴も認められる。井戸屋形（覆屋）の柱穴の可能性もあるが、柵列（SR3）としておく（第42図）。跳ね釣瓶の柱穴も存在した可能性もある。

区画の構造 列石による区画は内区と外区にわかれる。内区は井戸本体側では列石、石敷部周辺は掘り込みラインを区画線とする。各隅部は直角に整う。

外区は内区の北側から東側にあり、逆L字形に置き石された直線的な区画線である。この外区と内区の間は幅0.5m程の空間帯が設けられる。この外区の北辺はSE1北側壁の延長上へと連なる（第45図）。

井戸枠の構造 井戸枠は、b期のものに石を3～6段積み足して0.6～0.8mほど嵩上げされる。井戸枠の平面形は主軸方向に長い楕円形となる。

石積みは東壁から南壁・西壁側にかけては垂直で、北壁は仰角70°とやや開き気味である。面を揃